

先生方とともに
高校生の今と未来をつなぐ

〈ビュー21〉
高校版
2018
Volume 5

12月

VIEW21

自分を 問い続ける

特集

「社会」に開かれた 進路指導

—多様な他者とのかかわりの中で

改革事例から導く！
「学校教育デザイン」を描く道標

東京都立淵江高校

主体的・対話的で深い学びへ
実践 アクティブ・ラーニング

生物 茨城県立並木中等教育学校 中島達也

国語 沖縄県立八重山高校 津覇実貴

指導変革の軌跡

東京都・私立富士見丘中学高校

高知県・高知市立高知商業高校

自分たちで前へ

先生 三冠(*)、おめでとう。本校ハンドボール部初の快挙に地元も歓喜に沸いて、うれしかったよ。試合中、悪い流れになっても自分たちでそれを打開できるほど主体的なチームになれたのは、この1年間で一人ひとりが大きく成長したからだと思う。高校総体でタイムアウトを1回も取らずに優勝したのもすごかったね。

生徒 先生が自分たちに練習を任せてくれたおかげです。毎日、部員で課題を出し合い、何をすべきか話し合っていて決めて練習してきたことが、試合でも自ら考えてプレーする意識につながりました。

生徒 トレーナーや栄養士などの専門家にもお世話になって、体づくりへの意識も変わりました。自分で体重を管理し、ウエイトトレーニングの種類や回数を決めるのは大変だったけれど、面白さや達成感もありました。

先生 みんなの勝利への強い思いを知っていたから、基礎知識をしっかり身につけさえすれば、あとは自分たちで進めていけると考えて、環境を整えたんだよ。

生徒 全国高校選抜大会の2週間前の練習試合で、このチームで初めて負けたことも大きかったです。

生徒 このままではチームがばらばらになるとあって、

みんなに声をかけて練習後に思いっきり遊んで、それで1つになれたとか……、コート上でもよく声をかけ合うようになりました。

生徒 以前は、自分の実力不足に落ち込むばかりでしたが、チームでよく話し合っていて連携プレーがうまくいくようになってからは、自信が持てるようになりました。

先生 全員でフォローし合うようになったよな。

生徒 2年生の頃は、点を取られても自分が突っ走って得点を決めればいいと思っていたけれど、今は誰かがミスしても雰囲気が悪くならないよう、ハイタッチして気持ちを切り替えさせるなど、周りが見えるようになり、自分でも成長したと感じます。

先生 君たちは、自分の課題を自分でつかみ、その克服に向けて必要なことを考え、実行に移す力を手に入れたんだ。それは部活動だけでなく、これからの人生でも役立つ力になる。卒業後も自分の道は自分でしっかり考えて、前へ進んでいけよ！

生徒 このチームでプレーできて本当に楽しかったです。将来、海外のチームでプレーすることを目指して、これからも頑張ります！

徳前紀和先生 教職歴30年。同校に赴任して9年目。進路指導部長。ハンドボール部監督。

富山県立氷見高校 全日制/普通科・農業科学科・海洋科学科・ビジネス科・生活福祉科/共学/1学年約280人/2018年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、筑波大、富山大などに38人が合格。私立大は、慶應義塾大、明治大などに延べ161人が合格。

2 特集

「社会」に開かれた進路指導

—多様な他者とのかかわりの中で

4 座談会

自分のあり方・生き方を考え続ける力を高校時代に育む

立教大学教授 中原 淳／福岡県立城南高校校長 和田美千代／お茶の水女子大学1年 宇井瑞希／
大阪市立大学3年 吉田梅乃／広島市立大学1年 齊藤秀太／九州大学1年 鬼塚浩明

12 事例1 ● 秋田県立秋田南高校

教師との対話と生徒自身の内省により、 メタ認知能力を高め、高い志を育む

16 事例2 ● 広島県・私立広島女学院中学高校

人間形成重視の指導を保護者とも共有し、 生き方や社会との関係を深く考えさせる

21 事例3 ● 長崎県立諫早高校

対話を通じた多様性との出会いの中で 「キャリアエリート」を育てる

26 改革事例から導く！「学校教育デザイン」を描く道標

26 東京都立淵江高校

授業や学校行事など、教育活動のねらいを「見える化」し、
身につけさせたい資質・能力を明確化

28 主体的・対話的で深い学びへ 実践 アクティブ・ラーニング

28 生物

茨城県立並木中等教育学校 中島達也

ICTを活用して学び合いを効果的に行いながら、
思考力・表現力の向上を図る

32 国語

沖縄県立八重山高校 津覇実貴

生徒自作のクイズを解き合う活動で基礎・基本の定着を図り、
主体的な学習行動を促す

36 指導変革の軌跡

36 東京都・私立富士見丘中学校高校

グローバル人材の育成

日本人教師とネイティブ教師の連携で英語力を鍛え、
探究学習で国際性を高める

40 高知県・高知市立高知商業高校

主体的な進路意識の醸成

生徒に高い目標を抱かせる指導を学校全体で推進し、
自己実現に挑む意欲を育む

44 改良！ 指導ツール ビフォーアフター

1、2年生 模擬試験振り返りシート

48 大学生による高校生のための 大学の学び 最新ナビ

48 山梨大学 生命環境学部地域食物科学科 ワイン科学特別コース ブドウ栽培からワイン醸造までを実践的に学び、ワインの専門家を育成

50 関西大学 社会安全学部

自然災害・社会災害の最小化を目指し 文理融合で実践的な知識を学ぶ

今月の表紙メッセージ

自分を問い続ける

◎ 2018年、国内外様々な出来事がありました。その中には、これまでの経験からは想像できないようなことも少なくなかったように思います。まさに変化が激しく、予測可能な世界で私たちは生きていたのだと感じます。そのような時代だからこそ、自分はどう生きるのか、この社会で何ができるのかを問い続け、答えは出なくとも、その時その時の自分をしっかり持つ必要があると考えます。その構えは、生徒たちが未来を生きる上で求められる重要な資質・能力の1つとなるのではないのでしょうか。今年も弊誌をお読みいただき、ありがとうございました。2019年もよろしくお願いいたします。

『VIEW21』高校版
編集長 柏木 崇

52 これからの会議・研修のあり方、つくり方

全国の事例紹介 対話的な会議・研修

54 特別企画 都教委の挑戦

第2回 学力向上策

東京都教育委員会、東京都立練馬工業高校

58 シリーズ 私立中高一貫校に聞く

「リーダー」を育む6か年デザイン

東京都・私立海城中学高校

60 VIEW'S REPORT

60 京都学園大学が2019年4月、「京都先端科学大学」に グローバルな視野と実践力を持つ 「トンガリ人材」を育てる

62 「学校組織で取り組む『探究』の指導デザインを考える研究会 ～『探究』の導入による学校改革の可能性～」開催 生徒と教師がともに楽しむ探究学習の追究を

72 Reader's VIEW

巻末 教師を育てた言葉たち

「障害要因は内に求めよ」

東京都・私立共栄学園中学高校 杉山晴彦

<https://berd.benesse.jp>

本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

印刷製本／(株)協同プレス 編集協力／(有)ペンダコ 執筆協力／佐藤 智、中丸 満、二宮 良太、長谷川 敦 撮影協力／荒川 潤、川上一生、ヤマグチイッキ

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

©Benesse Corporation 2018

「社会」に開かれた 進路指導

——多様な他者とのかかわりの中で

次期学習指導要領を通じて、各校においてその実現が求められているのが、「社会に開かれた教育課程」だ。

それは、「よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていく」(*1) というものである。

当然、そのような教育課程に基づいて行われる指導も「社会に開かれた」ものである必要がある。そこで今号では、進路指導にスポットをあて、AIの進化に代表される技術革新やグローバル化などによって大きく、そして予測不可能な形で変化する社会の中で、その指導はどうあればよいのか、教師にはどのような役割や視点が求められるのかについて考えていく。

*1 高等学校学習指導要領 (2018年3月公示)・前文

Q 中央教育審議会の答申(*2)では、「進路指導」は下記のように定義されています。そのような定義での進路指導において、今後課題となることは何だと思われますか。

進路指導とは、生徒の個人資料、進路情報、啓発的経験及び相談を通じて、生徒が自ら、将来の進路を選択・計画し、就職又は進学をして、更にもその後の生活によりよく適応し、能力を伸長するように、教員が組織的・継続的に指導・援助する過程であり、どのような人間になり、どう生きていくことが望ましいのかといった長期的展望に立った人間形成を目指す教育活動である。

*2 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」

- ◎すべての生徒に、細やかな指導が行き届いているとは言えない。教師集団と分掌との目線合わせがうまくいっていないのが、その原因の1つだと考えている。(北海道)
- ◎高校卒業時の「出口」の指導に注力してしまい、どうしても長期的な人間形成の視点が希薄だ。また、変化している社会への認識を、多くの教師が十分に持っていないようだ。そのために、生徒の可能性や選択肢を狭めてしまっている。(栃木県)
- ◎進路指導が就職指導・受験指導にとどまっていると感じている。
- ◎本校には生き方や働くことについて考える学校設定科目があるが、その内容は10年以上前のもので、実態に即した指導ができていない。皆忙しく、内容を見直す機会を持っていないのが原因の1つだ。(静岡県)
- ◎「どのような人間になり、どう生きていくことが望ましいか」について、答えは1つではない。生徒一人ひとりに応じて対話することは、社会経験など、教師にはいろいろな力が必要となるが、それが十分ではないと思う。(鹿児島県)

出典/『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果(アンケートは、2018年10月にウェブとファクスで実施)。

本号のテーマ

社会の変化、及び教育改革・入試改革を踏まえた、
これから求められる進路指導のあり方を考える

自分のあり方・生き方を考え続ける力を高校時代に育む

座談会

▶▶▶ P.4 ~ 11

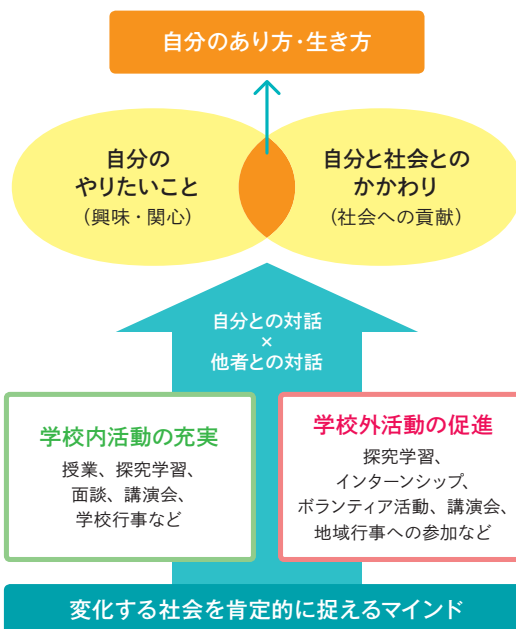
「やりたいことは何か」
「自分の人生をどう使うか」を
生徒に
問い続けていきます



夢を考え直さざるを得なかった「失敗」が、
自分には必要だったと
今は思えます



悩みながら回り道をしてきた
人々との出会いが、
価値観は多様でよいと
教えてくれました



*取材を基に編集部で作成。

これから主流となる
複線的なキャリアを
築くためには
かけ算の発想が必要です



どこにいたとしても
よりよい自分を目指し、
いかに学ぶかが重要だと
気づきました



先生からの問いかけで
立ち止まって考えたからこそ、
大切にすべきことが
分かりました



事例

▶▶▶ P.12 ~ 24

事例 1

秋田県立
秋田南高校

教師との対話と
生徒自身の内省により、
メタ認知能力を高め、
高い志を育む

事例 2

広島県・私立
広島女学院中学高校

人間形成重視の指導を
保護者とも共有し、
生き方や社会との関係を
深く考えさせる

事例 3

長崎県立
諫早高校

対話を通じた
多様性との出会いの中で
「キャリアエリート」を
育てる

先生たちの言葉で

私たちは将来と向き合った

—— 大学生の皆さんは、どのように考えて、今の進路を選ばれたのでしょうか。

吉田 私は、小学生の頃から産科医に憧れていて、中学受験をして入った中学校・高校では、医学科志望者が多い環境にいました。ただ、高校1年生の途中で人間関係がうまくいかなくなり、勉強をする意味も分からなくなってしまうと、それとともに成績も下がっていきました。

勉強に身が入らないまま3年生になり、進路に悩む私に、「ちょっと話そうか」と声をかけてくれたのが担任の先生です。それから週1回、先生は面談を通して、私が何に関心があるのかを一緒に整理してくれました。自分の思いを何度も話すうちに、元々興味があった「赤ちゃん」と「お母さん」の何に関心があるのかを考え、その根本には「人の生活」に意識が向いていることが見えてきました。ただ、それでも、なりたい職業が明確に言えなかった私に、先生は「仕事は自分でつくれるよ。今ある職業からではなく、何を学びた

座談会

自分のあり方・生き方を 考え続ける力を高校時代に育む

予測が難しいと言われる社会を生きていく生徒たちにとって、

高校時代に考える進路選択は、どうあるべきなのか。

そして、高校現場にはどのような進路指導が求められるのか。

高校時代、迷いながら自分の進路と向き合った学生4人と、高校教師、大学教員が語り合った。



いのかで進路を決めればいいんじゃないかな」と言われました。それで、人やその生活を支える学問が学べる今の学科を選びました。

齊藤 僕は、高校でサッカー部に入部しましたが、強豪校のために毎日の練習が厳しく、自分の将来を真剣に考え、社会について知る余裕がありませんでした。そこで、1年生の途中で退部して、脳科学や医療など、

立教大学経営学部教授
中原 淳 なかはら・じゅん



立教大学経営学部ビジネスリーダーシッププログラム主査。東京大学教育学部卒業、大阪大学大学院人間科学研究所、メディア教育開発センター（現・放送大学）、アメリカ・マサチューセッツ工科大学客員研究員、東京大学准教授等を経て、2018年度から現職。専門は、人材開発・組織開発。著書に『アクティブ・ラーナーを育てる高校』（学事出版）等。

福岡県立城南高校校長
和田美千代 わだ・みちよ



教職歴36年。同校に赴任して1年目。城南高校に教諭として勤務していた時、「ドリカムプラン」の立ち上げに尽力。その後、教頭としても同校に勤務し、今回が3回目の赴任となる。

興味を持った講演会に片っ端から参加しました。それでも社会の構造をよく理解できず、漠然と、県外の難関大学に進学したら、いろいろな人に出会えて、社会のことがよく分かるのではないかと思うようになりました。

そんなことを3年次に担任だった先生に話すと、「どんな大学に行けば、自分が満足できるように時間を



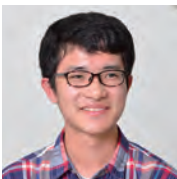
お茶の水女子大学
文教育学部1年
宇井瑞希
うい・みずき
東京都・私立かえつ有明中
高校卒業。



大阪市立大学
生活科学部人間福祉学科3年
吉田梅乃
よしだ・うめの
富山県・私立片山学園中学
校・高校卒業。



広島市立大学
国際学部1年
齊藤秀太
さいとう・しゅうた
広島県立広島観音高校卒業。



九州大学
共創学部1年
鬼塚浩明
おにつか・ひろあき
福岡県立福岡高校卒業。

充てて、研究を深められると思う？」と問いかけられました。改めて考えると、地元の広島であれば、知人から人や企業を紹介してもらいやすく、通学やアルバイトなどを最小限にして研究に時間を充てることができると気づき、広島の大学に進学しました。

鬼塚 僕は、高校3年間で、やりたかったことに何でもチャレンジしてきました。外国人と交流したいと思ったら国際交流事業にボランティアスタッフとして参加したり、生物部で菌の研究が面白くなってめり込んだら、その成果が認められて九州大会に出場したりしました。

でも、3年生になっていざ進路を選ぶ時に、関心の幅が広すぎて、学びたいことを1つに絞り切れませんでした。そうした僕に、「今ある学部では、鬼塚くんが興味のあるすべてののことに取り組むのは難しそうだから、新しくできるこの学部はどう？」と担任の先生が紹介してくれたのが、その年に新設された、現在通っている学部でした。調べてみると、1つのことを研究するというよりも、自身の関心を広げたり深めたりすることができそうな学部だった

ので、そこに入って、学びながら将来を考えようと決めました。

教師が社会の変化を肯定的に捉えるマインドを持つ

宇井 1年生の時、「過去・現在・未来」について自分の思いや考えを自由に書くという授業がありました。私は、「過去」と「現在」はすんなり書けましたが、「未来」の枠で書きたいことが思い浮かばず、手が止まってしまいました。それまでは、よい点数を取ると周りから褒められてから勉強を頑張っていました。ただ、それだけでは未来につながらないのだと感じました。「未来」を考えていく中で、自分は親の仕事や教師など、教えるほどしか職業を知らないと感じて、学校外の講演やワークショップに参加するようになりました。環境や農業など、様々な分野を知る中で、一番強くひかれたのが「未来の教育を考える」ワークショップでした。そこで志望学部は、教育を学べる学部に決めました。ただ、教育は社会の一員となる人材を育てる学問なので、人や社会にかかわる領域を幅広く学んだ方がいいと

考え、いろいろな大学を調べた結果、現在通っている学部を選びました。

和田 こうして4人のお話を聞いてみると、生徒の悩みを感じ取り、問いを投げかけ、本当にしたいことは何かを考えさせ続けようとしています。先生方の指導が見えるようです。

4人の先生方の共通点は、変化する社会を肯定的に捉えていることだと思えます。教師がそういったマインドを持つことで、生徒が自分の人生を前向きに考えられるような支援ができるのだと感じました。

中原 「変化を楽しむ心」は、とても重要です。ここ数年、AIの代替によってなくなってしまう職業のことが、よく語られるようになりました。しかし、AIに代替するとしても費用がかかりすぎ、代替に伴う新たな仕事が発生するとも考えられます

(図1)。OECDのレポートによると、AIによって自動化するリスクが高い仕事は10%以下だとされています(*1)。日本は少子高齢社会で人手不足の状況が続きますから、その問題解決のために、AIに仕事をしてもらった方がよいという見方もあるはずで、社会の変化を前向きに捉え、自分の頭で考えて、自分

で行動することができれば、予測しにくい社会になるからといって、心配することは何もないでしょう。

やりがいい、社会的価値、経済的価値から進路を考える

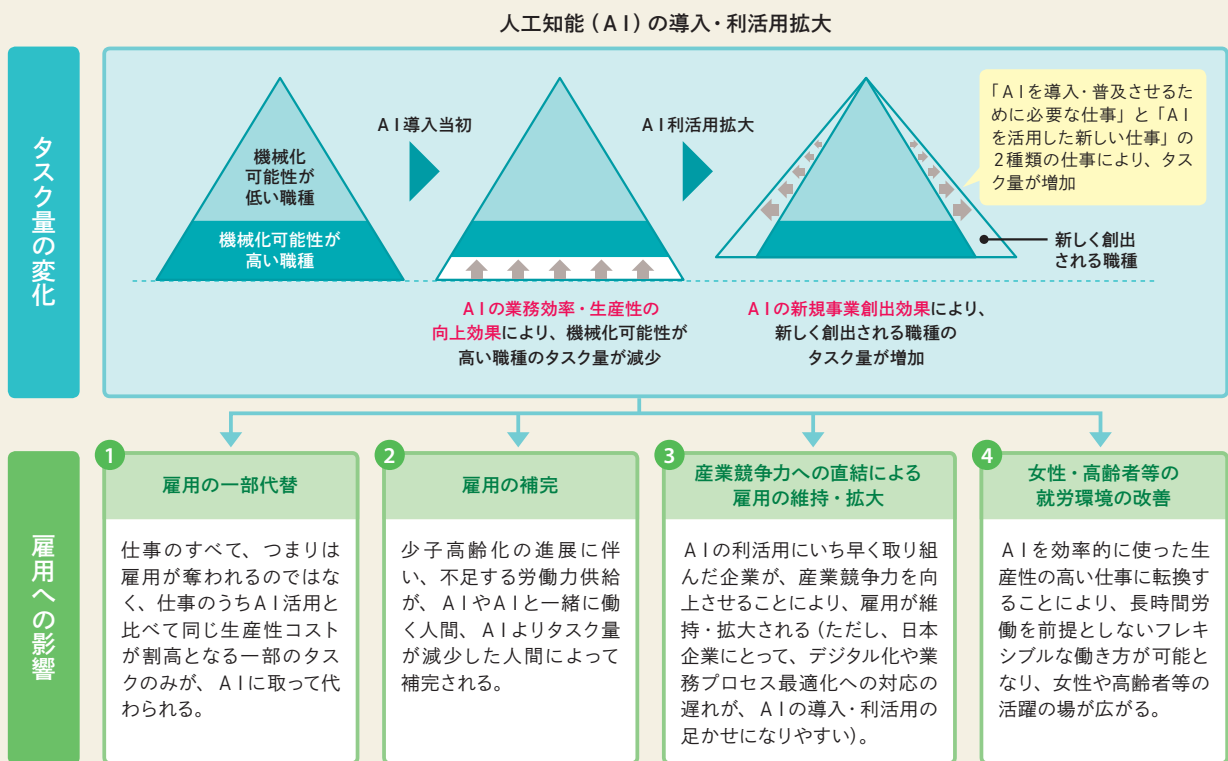
——そうすると、変化の激しい社会を生きる生徒には、どういった進路指導が必要だとお考えですか。

和田 4人の先生がされていた「やりたいことは何か」「自分の人生をどう使うか」を聞いて続けることが、まずは大切だと考えます。加えて、人は社会で生きていくわけですから、自分は社会にどうかかわり、貢献できるのかも考えさせたいですね。そうした場合は、次期学習指導要領の下、実施される「総合的な探究の時間」で持てるはずで。

中原 私は、その2つに加えて、将来を考える際には、生活の基盤を築くための家庭経済の観点も必要だと思えます。

和田 勤務校が長年取り組んでいる「ドリカムプラン」では、キャリアプランニングノートに「個人のやりがい」「社会的な価値」「経済的な価値」が記されており、それらをセツ

図1 人工知能(AI)導入で想定される雇用への影響



*総務省「ICTの進歩が雇用と働き方に及ぼす影響に関する調査研究」(平成28年)を基に編集部で作成。

*1 Arntz et al. 「The Risk of Automation for Jobs in OECD Countries A COMPARATIVE ANALYSIS」(2016年6月公表)。Frey & Osborne (2013年)が、アメリカで47%の雇用が自動化される恐れがあると発表し、議論を呼んだことに対し、その推計手法を見直し、アメリカ及び他のOECD諸国における自動化リスクの高い雇用の割合について改めて推計を行い発表した論文。



トにして将来を考えさせています。人生をかけて行いたいことで社会に貢献できれば幸せですが、その仕事では生活に必要な金銭を得られないかもしれません。その時には、生計を立てるための仕事を別に持つという判断も必要になるからです。

生徒が3つの観点で将来を考えられるようにするために、どういったことが学校や教師に求められるでしょうか。

中原 1つは、生徒が社会に触れる

場を設けることでしよう。学校での学びが社会でどう生きるのか、自分のやりたいことが社会にどう役立つのかが分かりますし、多様な価値観に出会うことで、自身の価値観と向き合う機会にもなります。

和田 自分とは違う考えや価値観を知ってこそ、自分を客観視し、本当に大切にしていることに気づく、メタ認知ができます。生徒同士が将来について話し合う場や社会人による講演会を積極的に設けるとともに、生徒が学校外で活動することを促す必要もありますね。それは、次期学習指導要領で示された「社会に開かれた教育課程」につながるものと考えます。

齊藤 僕は社会をもっと知りたいと思って、自分から積極的に学校外に出て活動していましたが、そうした人は高校には少なかったです。

和田 まずは、生徒の目が外に向くようにさせることが大事ですね。「学びは、自らつかみにいくものだ」と生徒の意識が切り替わるよう、1年生からアクティブ・ラーニングの考え方を、授業を通して浸透させることが大事だと思います。

吉田 知り合いの様子を見ると、先

生や保護者が敷いてくれたルールには疑問を持たないですし、「ルールから外れるのが悪い」という人もいるのではないかと感じています。

和田 「外に出てみよう」「殻を破ってみよう」と思うタイミングは人それぞれであり、社会に自ら目を向ける時が、大学時代でもよいと思います。ただ、生徒がいつかそう思えるよう働きかけ続けることが大切です。生徒一人ひとりの様子を見取り、そのタイミングに合わせて支援することを心がけたいです。

中原 生徒が社会に一步を踏み出せるような場があるとよいですね。例えば、短期間のインターシップなどで「社会は意外と恐くない」ことを体験させ、次に別の場を用意し、スモールステップで進める環境を整えるといったことです。学校外で活動する価値を生徒が見いだせば、あとは自ら学んでいくでしょう。先生方に求められるのは、社会が魅力的な場所だと生徒に見せることです。

多様な価値観に出会い、自分についてとことん考えた

——学生の皆さんは、学校外活動で

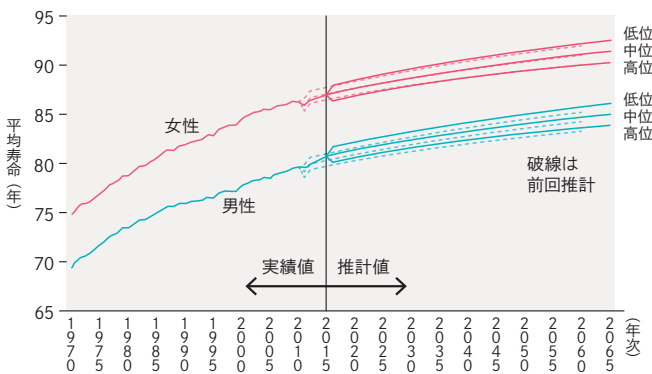
どのようなことを学びましたか。

鬼塚 僕は、学校外活動で価値観の多様さを学びました。高校の講演会で聞いた内容は、難関大学を卒業後、有名企業に就職したとか、研究者になったとか、ほとんどが成功談でした。でも、人生はそんなふうに真っ直ぐに進むものではないはずで、学校外活動では、自分で面白いことを見つけて、それを自分で仕事にしてしまうような人と大勢出会いました。悩みながら回り道してきた人たちの話は、自分の進路を考える上で影響を与えてもらいました。

和田 多くの学校では、講師にお願いをして、「生徒がこんなふう成長してほしい」という教師の願いを込めた話をしてもらっていることが少なくないと思います。しかし、そうした成功談が、変化の激しい今の社会のロールモデルたり得ないこともあります。20代や30代の方に、自身の葛藤を含めたキャリアを語っていただくともいかもしれません。

吉田 ロールモデルを見せることも大事ですが、価値観を揺さぶられるような生き方にも触れられると、自分の価値観を見つめ直すきっかけになると思います。

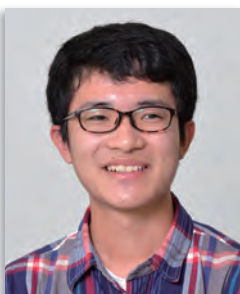
図2 平均寿命の推移：中位・高位・低位推計



2065年に男性の平均寿命は84歳、女性は91歳を超え、国民の2.5人に1人は高齢者になる。総人口は約8808万人にまで減少。

*国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成29年推計)」を基に編集部で作成。

宇井 話を聞いたり、体験したりするだけでなく、自分について考える時間をしっかり確保することも大事にしてほしいです。私は、和田先生がおっしゃっていた「自分の人生をどう使うか」について深く考えたこ



悩みながら回り道をしてきた人たちの出会いが、価値観は多様でよいと教えてくれました

鬼塚浩明

中原 学校という1つのコミュニティーにとどまるのではなく、高校生のうちから自ら外に出ていく意識を持つためにも、学校外活動はぜひしてほしいと思います。日本の平均寿命は、2065年に男性は約85歳、女性は約91歳と推計されています(図2)。国や企業では、定年退

コミュニティーを複数持ち、変化に対応する力をつける

とで、進みたい道が見えてきました。学校の授業にそうしたことを深く考える場があり、先生が様々な形で問いかけてくれたからこそ、考えられたのだと思います。多様な価値観に出合っても、それを受け止めきれなければ、意味がなくなってしまう。すし、自分で考える時間がなければ、敷かれたレールの上を歩いていくだけになってしまうと思います。



先生からの問いかけで立ち止まって考えたからこそ、大切にすべきことが分かりました

齊藤秀太

吉田 私は今、結婚式を企画・運営する会社でインターンとして働いていますが、その会社には私のように大学と職場だったり、ほかの仕事を持っていたり、複数のコミュニティーを持つ人がかなりいます。**和田** 私は、4年前に全世界から受講生が集まるオンライン講座を受

職の年齢引き上げが検討されていますし、そもそも、年齢に関係なく働けるうちは働くという価値観が根づくと考えられます。社会や景気の浮き沈みがある中で、今後、1つの組織やコミュニティーに居続けることは少なくなるでしょう。

中原 コミュニティーが違えば、価値観も評価の物差しも違います。そのことを知っていれば、今のコミュニティーでうまくいかなかったとしても、ほかの場所に行けばよいと考えられ、自分が生きる場所を探すことができます。そうした対応力が、変化の激しい社会においては非常に大事なことだと、私は思うのです。

他者との対話があつてこそ自分を知ることができた

——これまでのお話から、他者と対話する経験とその振り返りが、進路を考える上で重要だと言えます。

和田 振り返りも、生徒が「自分の

人生をどう使うか」を考える場になることが大切です。教師には、今以上に対話力が求められます。その力をつけるためには、校内研修の充実が必要ですし、学年団を多様な経歴の教師で編成し、生徒への声かけを多面的にすることも重要でしょう。

中原 自分のことを自分1人で掘り下げるのは難しく、他者という相対化する存在が必要です。教師であれ友人であれ、他者からのフィードバックを得る機会を設けることは、学校としてできることの1つでしょう。例えば、本学の「ビジネス・リーダーシップ・プログラム」では、自分のアイデンティティを掘り下げる活動を行います。自分の人生を振り返り、様々な人からフィードバックを受けながら、これから何をしたいのかを考えていきます。学生の様子を見ると、かなり深く考えるようになり、その後の行動も意欲的になります。高校時代にそういった機会があってもよいと思いますし、決して早すぎることはないでしょう。

吉田 私は、高校時代、先生との面談で自分を振り返ることができましたが、それ以外ではフィードバックをもらう機会は少なかったように思

います。また、フィードバックをもらうとしても、それは誰からでもよいというわけではないですし、自分の心に響く言葉をかけてもらえるとも限りません。

中原 残念ながら、他者にわざわざ意見を言ってくれる人は、大人になればなるほど少なくなります。つまり、自らフィードバックをもらいにいく姿勢が大切であり、誰からフィードバックをもらうかも自分で見極めなければなりません。そうした力も、これからの社会では必要と言えるかもしれません。

進路をかせ算で考えれば道はもっと広がる

中原 大学教員の立場からお伝えたいのは、仕事と学部を1対1で対応させず、かけ算で学部選びを考えてほしいということです。例えば、



どこにいたとしても
よりよい自分を目指し、いかに
学ぶかが重要だと気づきました

宇井瑞希



夢を考え直さざるを得なかった
「失敗」が、自分には必要だったと
今は思えます

吉田梅乃

介護に関心がある場合、「介護福祉士の資格を取れる学部」が唯一の選択肢ではありません。介護の職場でもIT化は進んでいますし、介護用ロボットの開発、介護用品のデザイン、地域社会づくりなど、様々な側面からかかわることが出来ます。

一直線のキャリアが主流である時代は、終わりつつあります。複線的なキャリアを築くためには、かけ算の視点が欠かせません。先生方には、そうしたアドバイスができる引き出しを数多く持っていたいただきたいですし、そのためには先生方も外に出て、多様な価値観に触れることが重要で

はないでしょうか。

和田 私は国語科の教師ですが、最近、『平家物語』に書かれていた「諸行無常」の意味がより深く理解できたような気がしています。今後、社会の変化は一層激しく、多様になっていきます。1つの場にとどまったり、同じことを続けたりすることは、流れる時代の中では難しいものです。「諸行無常」は、変化の中でも、よりよいものを目指して、日々更新していくことではないかと思ったのです。未来を肯定的に捉え、複線的に生きていく力を育むことが、今、求められる進路指導ではないかと思うのです。

吉田 自分が思い描いていた成功の姿から外れて、「失敗した」と感じることもあると思います。でも、私は、成績が落ち込み、ずっと憧れていた医師への道を考え直さざるを得なかった「失敗」があったからこそ、



「やりたいことは何か」
「自分の人生をどう使うか」を
生徒に問い続けていきます

和田美千代

自分の人生を真剣に見つめることができ
ました。だから今では、一般的
に「失敗」とされる経験も必要だと
思っています。

齊藤 実は、僕はプロのサッカー選
手を目指して、サッカーの強豪校で
ある母校を選びました。しかし、チー
ムメイトには全国大会で得点王にな
った選手がいて、実力の違いを見
せつけられました。自分はサッカー
選手にはなれないと思い、部を辞め
ました。そこから、自分がやりたい
ことを真剣に考えるようになり、勉
強の機会を探して学校の外に出て
行って、今の自分があります。

鬼塚 僕は、大学入学前は公衆衛生
の分野を勉強したいと思っていまし
た。ところが、1年次の基幹教育で
基礎的な科目を学ぶ中で、違う領域
にも関心を持ちました。大学は、い
ろいろな人や情報に触れて、柔軟に
専門分野や将来を定めていく場だと

感じました。

宇井 大学に行くことが目的になっ
ていて、志望校に合格できなかった
ら、「人生の失敗」と捉えるような
人はまだまだ多いと思います。でも、
大学生になった今、どの大学に行っ
たとしても、いかに学ぶかが重要な
のだと実感しています。よりよいも
のを目指して自分を更新することは
大事なことであり、高校時代にそれ
に気づくためにも、まずは多様な価
値観に触れることの素晴らしさを知
ることが必要なのだと思いました。

和田 私たち教師の役割は、生徒が
自分の人生を考え続けられるよう対

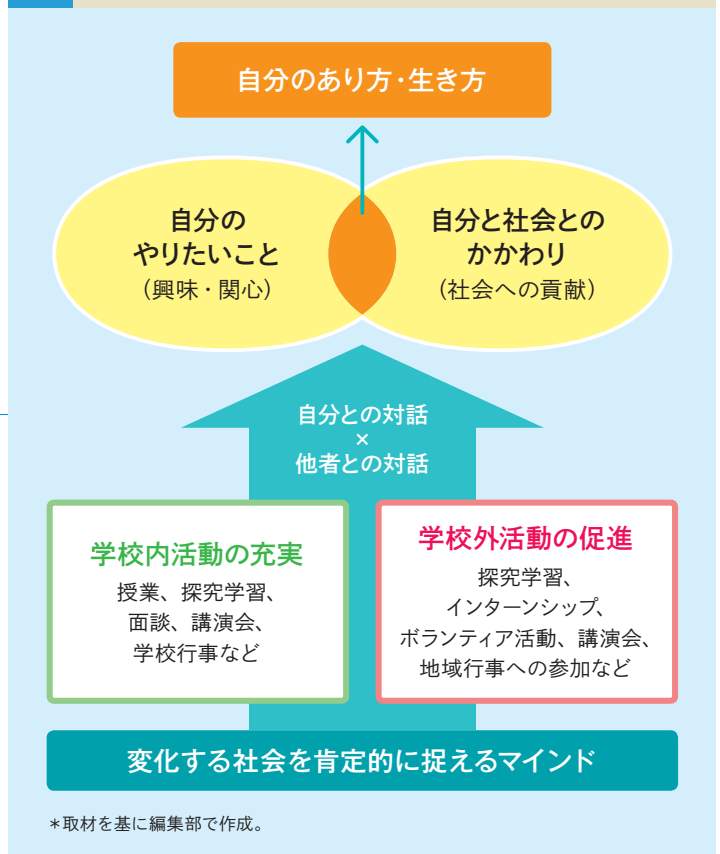


これから主流となる
複線的なキャリアを築くためには
かけ算の発想が必要です

中原 淳

話し続けることであり、今も昔も変
わらず、生徒の背中を押すことだと、
改めて感じました。卒業生が「動け
ば心がついてくる」という言葉を残
してくれました。行動するからこそ、

図3 これからの進路指導のあり方



心定まってくるのです。私たち教
師は様々なきっかけを用意して、生
徒が動き出せるよう、そっと背中を
押してやれる存在でありたいと思
います。

12ページから、本座談会で語られ
た、対話や講演会、学校外活動、振
り返りなどを工夫し、自身のあり方
や社会とのかわりを深く考えさせ
る進路指導に取り組む3つの学校を
紹介します。

4人の恩師からメッセージ

教師は、どのような思いで生徒と向き合っていたのか



宇井瑞希さんの恩師

東京都・私立かえつ有明中・高校でのプロジェクト科(*2)担当

進路選択の前に内なる声に向き合わせる

「選択の幅を広げるために少しでも上位の進学を」という指導が縛りになり、自らの可能性を狭めて苦しんでいる生徒が意外に多くいます。進路選択の前に内なる声とじっくり向き合う時間が必要だと思い、多様な人との対話から出てくる感情を言語化したり、大切にしている価値観をあぶり出したりしました。殻が緩んできた頃、過去・現在・未来を書くワークを行いました。宇井さんはまだ自身の未来を描くことができていませんでした。そこで、過去の経験による気づきを言語化したり、焦点をあてていなかった経験に意識を向けたり、深い内省を促しながら対話を重ねていきました。そして、大切にしたい思いが浮かび始めてきた頃に、学校外に出て人と出会い、話してくることを勧めました。宇井さんは臆することなく外に飛び出し、多様な人との交流から多くの気づきを得て、進む道を見つけました。今は「よりよい学びの場づくり」の仲間として大いに助けられています。



吉田梅乃さんの恩師

富山県・私立片山学園中学校・高校での3年次担任

本当の目標を見つけたと思えるように

進路選択では、どんな道を選んでも、それが自分にとってベストだと思えることが大切です。自分で調べ、悩み、考え抜いた生徒は、その先にあるどんな人生の岐路でも主体的に進む道を選択できますし、「納得解」が多いほど、「幸せな人生だ」と思えるからです。そうした思いから、吉田さんが「医学科志望と言いつけてきたのに、それを变えるのは挫折に思える」と打ち明けてくれた時、「挫折」ではなく、「本当にやりたいことを見つけたんだ」と思える進路選択をさせたいと考えました。気をつけたのは、私から選択肢を用意しないことです。ひたすら問い続け、聞き役・まとめ役に徹しました。「赤ちゃん」「お母さん」「福祉」は、すべて彼女から出てきたキーワードです。そうして、希望進路のイメージが持ててからは、私が言うべきことはありませんでした。学習にも前向きになり、職員室に質問に来るようになりました。成績がぐんぐん伸びていくのを見て、私は彼女の合格を確信しました。



齊藤秀太さんの恩師

広島県立広島観音高校での3年次担任

あえて選択肢を増やして悩ませました

私は、AかBで悩む齊藤さんにあえて「CやDもある」と揺さぶりをかけ、相談に来た時には「それで君はどうしたらよいと思う？」と言って徹底的に悩ませました。授業やSHRなどでも「なぜそう考えたの？」と意識して問いかけました。彼はその都度、自己を客観的に振り返り、自分の言葉で語ることを通して、自分が決めた目標と行動を連鎖させる水準を高めていったと思います。

3年生の夏、「大学を選ぶ時に本当に大切にしたいものは何？」と問いかけたところ、自分を取り巻く環境や様々な視点から深く考えることを通して、大学進学の意味が明確になったと、自ら志望校の変更を申し出てきました。その後は、外国人観光客へのボランティア活動をしたり、自分で探したNPOを通じてカンボジアでのボランティア活動に参加したりと、行動力の高まりには目を見張るものがありました。その体験を通じて自分が得たものを報告しに来てくれた時の会話は、私の大切な宝物です。



鬼塚浩明さんの恩師

福岡県立福岡高校での2・3年次担任

自身に問いかけられるよう声をかけた

生徒は表面的なイメージにひかれて志望校を選ぶことがあります。そうした場合でも「あなたには合っていない」と決めつけた言い方をしないようにしています。自分で考えたり、納得したりしていなければ、志望校を変更しても意味がないと思うからです。

鬼塚さんのAO入試の出願書類を読み、本人が目指す方向と学部の内容がずれていると感じた時も、他者との対話の中で、彼自身が自分に問いかけられるよう声をかけました。「鬼塚さんは〇〇の関心が高いように思えたけれど、自分ではどう思う？」といったように、2人で「鬼塚さん」を俯瞰し、分析していったのです。出張講義に来た医師に直接相談することも勧めました。すると、その医師が公衆衛生に詳しい別の医師を紹介してくれ、専門家の視点で助言をいただき、志望校が決まりました。そこまでじっくり考えて決めた学部なので、推薦入試の志望理由書もすんなり仕上がりました。

*2 協働するための「場の創造」と、ロジカル・クリティカル・クリエイティブシンキングをトレーニングする学校設定教科。

事例1 秋田県立秋田南高校

教師との対話と生徒自身の内省により、 メタ認知能力を高め、高い志を育む

秋田県立秋田南高校では、面談や振り返りなど、教師との対話を通して生徒に内省を深めさせ、自分の将来と向き合わせている。そして、探究学習や学校外活動で多様な経験をさせることで、将来への視野を広げさせ、多様な考えを受容する態度の育成にもつなげている。失敗を含めた様々な経験は、生徒を大きく成長させており、自ら選んだ進路を貫こうとする生徒が増えているという。

志を育み、第1志望を貫く 指導を学校全体で徹底

基本理念に「郷土や国家を支える高い志と国際的な視野を備えたグローバルリーダーの育成」を掲げる秋田県立秋田南高校は、国立大学に例年150人前後が合格する進学校だ。2015年度、文部科学省のSGH（*1）の指定を受け、1年次は必修の「国際探究Ⅰ」で、2・3年次は選択科目として、探究学習を行っている（図1）。また、16年度に中等部が併設されて中高一貫校となった。

同校の生徒は、素直で優しい反面、さらなる可能性を目指そうとする意

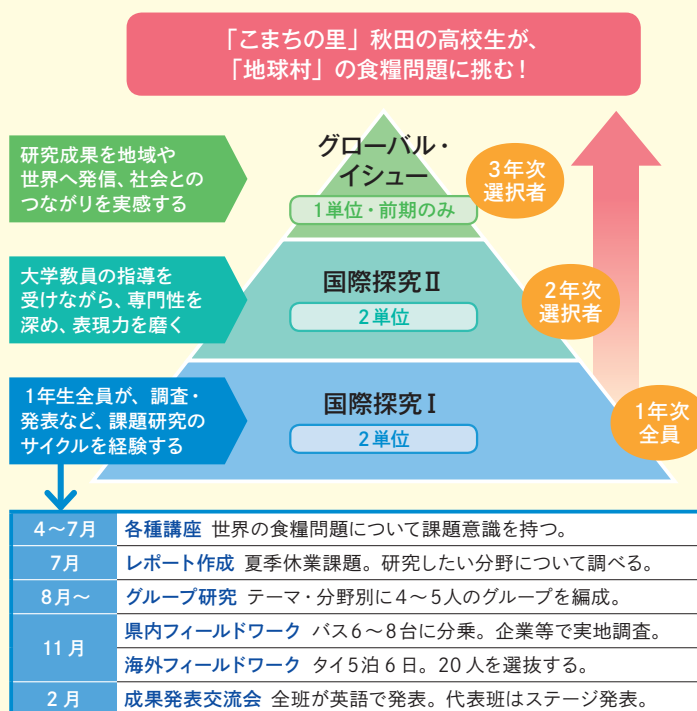
欲に課題が見られた。1学年主任の小名雅司先生は次のように述べる。

「ポテンシャルが高い生徒が多いと感じています。生徒に自身の可能性の高さに気づかせ、高い志を育むことが、我々の役割です」

そうした課題意識を持つ中、同校では進路指導を変化させている。地域の期待を担う進学校として、国立大学合格を目指す進路指導が重視されてきたが、ここ数年は、現役合格にこだわらず、生徒自らが高い目標を掲げ、その第1志望を最後まで貫かせる指導を全校で行っている。進路指導部副主任の中村東先生は、次のように語る。

「かつての生徒には、まだまだ伸

図1 秋田南高校のSGHでの探究学習、及び「国際探究Ⅰ」の内容



秋田県の「農と食」の特長と課題、同県と交流のあるタイの現状などから「世界の食糧問題」について考察し、解決策を提言する。

* 学校資料を基に編集部で作成

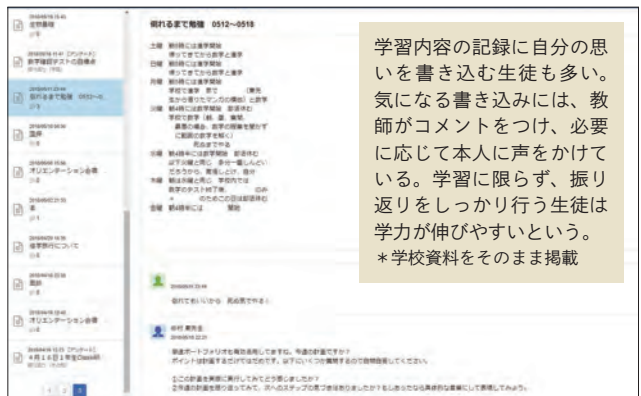
* 1 文部科学省のスーパーグローバルハイスクール。

図2 定期考査の振り返り



定期考査の振り返りには、「Classi」のポートフォリオを活用。教科ごとに、「うまくいったところ」「駄目だったところ」「次回に向けて継続したいこと」「改善したいこと」を書き込む。
*学校資料をそのまま掲載

図3 学習内容の書き込み例



学習内容の記録に自分の思いを書き込む生徒も多い。気になる書き込みには、教師がコメントをつけ、必要に応じて本人に声をかけている。学習に限らず、振り返りをしっかり行う生徒は学力が伸びやすいという。
*学校資料をそのまま掲載



人や留学生との意見交換など、世界や地域社会と自分とのつながりを考える機会を設けている。そこでの気づきから、生徒の意識が学校外にも向けられるようになり、多くの生徒が、大学主催の講座や地域づくりのイベント、海外研修、数学オリムピックなどに積極的に参加し、多様な経験を積んでいる。

学校外活動で自信を深めていく様子は、生徒が記入するポートフォリオからも見て取れる。例えば、国際教養大学のイベントに参加した生徒は、学生や海外留学生のオープンな雰囲気刺激を受け、自身の発表では身振り手振りが加わり、思いを伝えられたと、振り返っていた。

また、大学の講座に刺激を受けてバイオテクノロジー系の学科を志望するようになった生徒や、海外留学を機に個人でNPOの活動に参加する生徒など、学校外活動を自己実現に結びつける生徒も現れている。

「学校外における多様な経験が、生徒の視野を広げ、自分と社会とのつながりを意識して進路を深く考えるきっかけとなり、その結果、目標を明確化させていると感じます。学校外でしかできないことを体験して

学年全体で生徒の状況を把握し、個別にアプローチ

改善を促している。

定期的な面談以外にも、昼休みや放課後などの時間を活用して、多くの教師が適宜面談を行っている。例えば、「Classi」のポートフォリオに学習内容を記録させているが、「文理選択で迷っている」「自分は変わりたい」といった生徒の変化をうかがわせる書き込みを見つけたら(図3)、すぐに生徒に声をかける。

「生徒は、学習内容の記録に加え、自分の思いも書き込んでいます。少しの変化でも気づけ、すぐに対応できるようになりました」(小名先生)

ただし、担任が必ず声をかけるとは限らない。生徒の様子を見て、すぐに支援が必要と判断したら声をかけ、自力で解決できそうな場合はしばらく様子を見る。

そういった生徒の情報は、月1回の学年部会や職員室での会話を通して学年団で共有し、担任に限らず学年全体で様子を見る。そして、教科担当が授業中にさりげなく声をかけ

ることもあれば、副担任や学年主任が面談を行うこともある。生徒の悩みや教師の個性に応じて、広く、個別にアプローチしている。

学校外活動で視野が広がり、将来をより深く考えるように

生徒の資質・能力を高めるために、同校がここ数年積極的に活用しているのが学校外活動だ。

同校のSGHでは、「世界の食糧問題」をメインテーマとし、県内のフィールドワークや、地域の社会

自己肯定感を高め、学校での活動も頑張るといふ、好循環ができています」と思っています」（佐藤先生）

他者との違いに気づき 多様性を認める場を設ける

同校が「重点目標達成のために育成する資質」に掲げる、①基本的知識・技能・習慣、②探究力、③協働力の育成に向けて、多様なものの見方や考え方を受け入れる雰囲気づくりも意識して行っている。例えば、クラスで話し合う場面では、多数派の意見に押されて自分の考えや気づきを言い出せないといったことがないようにしている。中村先生は次のように説明する。

「全員の意見が一致することは好ましいように思えますが、何か盲点があつて誰も気づいていないのなら、それは危険な状態です。新しいアイデアは、多様な価値観がぶつかり合う中で生み出されるものであり、生徒が多様な意見を出し合う場を積極的に設け、多面的に物事を見る目を養うことが大切だと考えています。それは、自分と他者との違いに気づき、多様性を認める態度にも

つながるでしょう」

授業や探究学習では、どんどん考えやアイデアを出すよう、生徒に促している。取り組みを重ねる中で、議論を活性化させるためにあえて人と違う意見を述べたり、問題提起したりする生徒が現れているという。

「探究学習を通して、人の意見を受け入れるだけではなく、批判的に見て、判断し、考えを発展させていこうとする意識が芽生えていると感じています」（佐藤先生）

「AIに代替される仕事が多くあると言われる中で、選ばれる人材になるためには、自分にしかない強い個性を持つことも必要でしょう。『人とは違うことをしよう』といった気概を持つ生徒が増えたことを、心強く思っています」（中村先生）

失敗も見守り、声かけで 自身の課題に気づかせる

失敗経験や挫折も大切にしていく。実は入学当初、ほかの生徒や外部講師から投げかけられる批判的な意見を受け止められない生徒が相当数いるという背景がある。

「大人なら、『できない自分』を認

めつつ、その都度解決の方策を考え、乗り越えていくことの連続が人生だと分かって、生徒はそうした経験を積んでいる最中なので、分かります。生徒が失敗しそうになっても、教師はあえて手を出さず、見守ることになっています」（小名先生）

例えば、探究学習で生徒が問題を抱えていても、教師は「何が足りないと思う?」「どこを変えたらよくなるのかな?」と問いかけ、改善すべき点を生徒自身に気づかせるようにしている。

「失敗は、教師が仕かけられることではありません。試行錯誤の中でおのずと失敗経験もできるのが、課題研究のよいところであり、だからこそ1年次では生徒全員に取り組みさせています」（小名先生）

さらなる成長に結びつく 振り返りの方法を模索

面談を中心とした教師との対話や、学校内外での多様な経験を通して、志を高く持つ生徒が増えていく。模擬試験での合格判定が厳しい結果でも第1志望を貫いた生徒、医学科現役合格がかなわなかったけれど、引き続き医師を目指すことを

選んだ生徒、海外留学に挑戦する生徒など、多くの生徒が夢に向かって力強く進んでいる。

そうした生徒の学びをさらに充実させるため、ポートフォリオを活用した振り返りを深化させたいと、中村先生は語る。

「振り返りでは、活動内容をただ記録するだけの生徒もいれば、活動を通して気づいたことや、今後すべきことにまで言及する生徒がいるなど、そのレベルはばらばらです。大学入試のための活動記録にとどめるのではなく、生徒一人ひとりに深い内省を促して、その後の行動に結びつくような振り返りの方法を工夫したいと考えています」（中村先生）

大学入試で求められる教科学力については、これまで通り、授業でしっかり身につけさせていく。

「今後も、難関大学の入試においては高い教科学力が求められることと思います。探究学習や課外活動などを通して、これからの社会で求められる資質・能力を高める一方、引き続き、高い教科学力を生徒に育んでいけるよう、授業改善を重ねていきます」（佐藤先生）

人間形成重視の指導を保護者とも共有し、 生き方や社会との関係を深く考えさせる

広島県・私立広島女学院中学高校は、進路指導の土台として、生徒の人間的な成長を支えることを重視する。キリスト教主義教育や探究学習など、教育活動全体で人間形成を促すほか、教育環境の変化や育成を目指す資質・能力を保護者と共有するための講演会を実施し、教師と保護者がともに生徒の進路実現をサポートする関係をつくり上げている。

進路指導の土台として

生徒の人間的な成長を支える

広島県・私立広島女学院中学高校は、132年の歴史を持つキリスト教主義の中高一貫校だ。例年、多くの生徒が難関大学に合格し、約3分の1が国立大学に進学する。

同校が進路指導の土台として重視しているのは、生徒の人間形成だ。広報部部長の畑野喜信先生は次のように語る。

「中高6年間を通して、生徒が自分と向き合い、『これからどう生きるのか』どのように社会とかかわっていくのか』を、じっくり考える機会を多く設けています。生徒には、

『人間的に成長する努力を重ねた上で、学力を身につけることが大事』とよく話します」

生徒の人間形成は、進路指導に加え、毎朝の礼拝を始めたキリスト教主義教育、「Peace Studies（平和教育・多文化共生・人権教育）」、文部科学省のSGH（*1）指定校としての探究学習など、教育活動全般で行っている。まず、中学校3年間は、人格の土台を築く時期と捉えている。例えば、毎朝の礼拝では、教師や生徒が生き方や信仰、学びなど、様々なテーマで話している。進路指導部長の久保光章先生は次のように説明する。

「礼拝を重ねる中で、生徒はかけ

がえない自分の存在や他者とともに生きるこの意味など、多くの大切な気づきを得ていきます。『こう考えなさい』と言うのではなく、生徒が自由に考え、豊かな人間性を育めるように意識しています」

そうした指導で人間的な成長を支え、高校では自分の将来へのイメージを膨らませる指導に移行する。

「自分史」で生き方を見つめ、 これからの自分を思い描く

多くの生徒が変容する機会となるのが、高校1年次の4月に、自分を見つめ、将来を考えることを目的に行われる1泊2日の「進路合宿」だ。

進路合宿では、クラスの親睦を深めるレクリエーションや、高校生活への心構えについての講話などを行った後、「自分史」を基に、「これからの自分」について書き、発表する（図1）。その際、高校生活をどのように過ごし、人生をどう歩んでほしいのかといった思いがしたためられている保護者からの手紙が渡される。そのようにして、人生を振り返り、自分の将来や社会とのかかわりなどについて十分に考えた上で、クラスメートの前で一人ひとりが「これからの自分」を語る。

また、クラスメート全員分のよいところを書き、伝え合う。生徒は他者からの感想などを通して自分を客

*1 文部科学省のスーパーグローバルハイスクール。



広島県・私立広島女学院中学校
畑野喜信 はたの・よしのぶ
教職歴42年。同校に赴任して43年目。広報部部長。英語科。



広島県・私立広島女学院中学校
久保光章 くぼ・みつあき
教職歴18年。同校に赴任して4年目。進路指導部長。数学科。



広島県・私立広島女学院中学校
濱岡由希子 はまおか・ゆきこ
教職歴16年。同校に赴任して13年目。広報部。教育構想検討委員会。地理歴史・公民科。



広島県・私立広島女学院中学校
田中佑真 たなか・ゆうま
教職歴11年。同校に赴任して10年目。広報部。教育構想検討委員会。生徒支援部。数学科。



広島県・私立広島女学院中学校
和田知亜紀 わだ・ちあき
教職歴3年。同校に赴任して4年目。広報部。理科。

広島県・私立広島女学院中学校

- ◎学院聖句に「我らは神と共に働く者なり」を掲げ、キリスト教に基づく女子教育を展開。平和や共生について学ぶ。Peace Studies。が伝統的教育の1つ。2014年から、文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」指定校。
- ◎設立 1886(明治19)年
- ◎形態 全日制/普通科/女子校
- ◎生徒数 1学年約200人
- ◎2018年度入試合格実績(現浪計)
国立大は、京都大、大阪大、広島大、九州大、早稲田大などに8人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ392人が合格。
- ◎URL <http://www.hj.sed.jp/>

観視するとともに、自分のよさが認められることで、自信を持って高校生活をスタートさせる。

「これまでの経験を振り返って今後への決意を固めることが、目標に向けて歩み出すきっかけとなります。また、自分の内面を伝えて本心で語り合い、励まし合うことで、クラスの結束は一気に強くなります」(久保先生)

教師にとつては、個々の生徒の内面を深く理解し、その後の進路指導に生かせる貴重な情報になる。例

えば、生徒が高校生活や進路に迷いや不安を抱えている時には、個人面談で「進路合宿ではこんな宣言をしていたよね。その考えに変化はあったか？」などと声をかけることで、自分の出発点に立ち返らせて目標を確認させる指導につながっている。

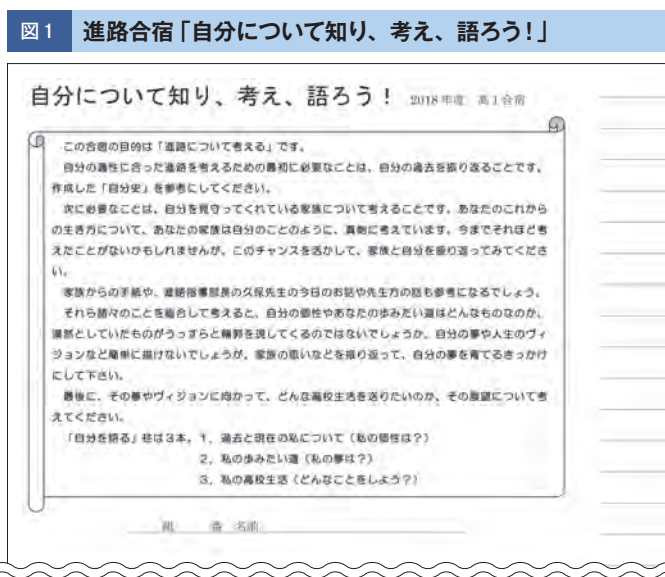
保護者対象の講演会で、育成を目指す資質・能力を共有

進路の検討に必要な情報を提供し、意識を高めるために、外部講師

を招いた講演会も積極的に行っている。その内容は、高校1年次ではこれからの社会で求められる資質・能力などを理解して、日々の学習への意欲につながられるようなもの、2・3年次では徐々に具体的な進路を考えられるものになっている。

2017年度からは、「これからの学校教育を考えるセミナー」と題し、保護者や地域住民を対象とした講演会を、広報部の企画・運営で年5回実施している。そこでは、保護者の関心の高い大学入試改革の方向性や生徒を取り巻く環境の変化を説明したり、グローバルに活躍することの意味を伝えたりする中で、同校が目指す資質・能力の育成を、保護者と共有することをねらいとしている。授業参観日などに合わせて実施しており、会場の約300席は満席になることもある。

講演会の回数を重ねるごとに、保護者の意識が変化している。以前は、生徒が生き生きと活動して人間的に成長しているも、保護者が偏差値やテストの得点といった数値を気にすることがあり、生徒が自分の思いの実現に向けて進路選択をする上で、保護者の考えが壁になることもあった。



将来の夢を語ったり、自分の弱さや悩みを打ち明けたりと、生徒の発表の内容は様々。担任も、自分のことを語る。
*学校資料をそのまま掲載

た。しかし最近では、教育活動に積極的に協力し、学校や生徒を信頼して見守る保護者が増えてきたと、広報部の濱岡由希子先生は語る。

「保護者の方は、これからの社会でどのような資質・能力が求められるかといった話を聞く機会があまりありません。講演会に高い関心を持って参加される保護者は多く、次第に本校の教育方針を理解し、子どもを考えを尊重して、本人に責任を持って考えさせる姿勢へと変わってきたと感じます」

同校を志望する小学生の保護者と情報を共有する意義も大きい。

「『入り口』である入学時から、本校の教育のねらいをしっかりと保護者と共有することで、6年間、両者が協力し合って生徒の成長を支えられ、『出口』である卒業後の進路が一層充実すると考えています」（久保先生）

講演内容によっては、生徒対象・保護者・地域住民対象と、2回実施する場合もある。18年11月には、海外の大学に進学し、グローバルに活躍する卒業生の講演会を、生徒対象と保護者・地域住民対象、それぞれに行った（下記コラム）。広報部の

田中佑真先生はこう話す。

「保護者・地域住民対象の講演会でも、その話を聞いてほしい生徒には個別に声をかけ、進路指導の一環としても活用しています」

SGHの探究学習を通して自分と社会を結びつける

SGHにおける探究学習は、同校が伝統的に力を入れてきた“Peace Studies”を組み込み、生徒の内面に大きな変化をもたらすなど、人間形成に大きな役割を果たしている。

“Peace Studies”では、「平和観」「対話力」「リーダーシップ」の育成を目指し、「平和構築」「多文化共生・人権」の2領域について、生徒の主體的・対話的な学びを主とした6年間の体系的なプログラムを組んでいる（図2）。その内容は、例えば平和構築領域では、中学校3年間を通して、原爆をテーマに、学びを広島・長崎から世界に広げ、平和に関する自分の考えを論文にまとめる。そして、高校1年次には、カンボジア内戦について、自分で課題を設定してリサーチし、希望者によるカンボジア研修を経て、学んだことを発表する。

講演会 レポート

グローバルに活躍する卒業生が語る
アイデンティティが未確立だからこそ、
いろいろな世界を体験しよう

先輩の言葉を通して、 将来への考えを深める

2018年11月、同校が育成を目指す生徒像のロールモデルの1人、卒業生の北岡美佐子さんを講師に迎え、生徒と保護者・地域住民それぞれを対象に2回の講演が行われた。北岡さんは、同校卒業後、米国・スタンフォード大学経済学部、コロンビア大学大学院教養学部を経て、米国公認会計士資格を取得し、米国企業で会計業務を担当。帰国後は、ニュージーランド大使館で日本と同国の教育外交を推進する仕事に就いている。

生徒対象の講演では、自らの高校生生活を振り返るとともに、「ダイバーシティの力オス」と言える大学で英語力が追いつかずに全寮生活に苦労した経験や、大学院修了後、現在の仕事に至るまでのキャリア形成などについて語られた。そして、“What Stanford has taught me.”として、5つの力（図2）の大切さを説明し、心の知能指数である「EQ」（*2）を高めてほしいと語った。



後輩に語りかける北岡さん。卒業生が経験を踏まえて語る言葉には、親しみと重みを感じられ、生徒にとって将来について深く考える機会となった。

図 北岡さんの “What Stanford has taught me”

- English (英語)
- Resilience and compassion (困難からの回復力、他者に共感できる・思いやり)
- Intellectual vitality : curiosity and passion (学術的バイタリティー：好奇心、熱意)
- Intercultural translation and interpretation (異文化、他者への共感、文化間の翻訳)
- Physical and mental well being (身体と心の健康)

*北岡さんの講演を基に編集部で作成

*2 Emotional Intelligence Quotient の略。

図2 “Peace Studies” のプログラム

	平和構築領域	多文化共生・人権領域
中学校	1年次 「広島戦争遺構」ポスター作成	よいクラスにするための行動宣言
	2年次 外国の原爆観とその変化	“SNSといじめ”を考える
	3年次 卒業論文「世界の平和構築のために」	在日外国人とともに生きるためには
高校	1年次 カンボジア内戦と開発について自分で課題をリサーチし、プレゼン	理不尽な差別をなくしていくには
	2年次 沖縄修学旅行でのコース別フィールドワーク	在日コリアンと日本社会～共生のために～
	3年次 核軍縮のための交渉ゲーム 卒業論文「核兵器を廃絶すべきか」	私の Peace Builder 宣言

* 学校資料を基に編集部で作成

写真1 他県や外国から広島を訪れた生徒に、平和記念公園内の碑を案内する「碑めぐり案内」は、同校で1982年から行われているボランティア活動だ。2017年度は延べ265人の生徒が参加し、600人以上の生徒・学生を案内した。

そうした体験的な学びは多くの生徒にとって、「他人事」だった世界の様々な問題を「自分事」と捉える機会となり、自分の生き方や社会に貢献できることを深く考えるきっかけになると、濱岡先生は語る。

「カンボジアを訪れ、日本では考えられない貧しい環境で過ごす子どもたちと交流する中で、自分たちがいかに恵まれてるかに驚き、『私ができることはないか』と自分の問題として考え始めます。それをきっかけとして、国際貢献などにかかわる進路を志望する生徒は少なくありません」

SGHの中心となる選択科目“Global Issues”（1～3年次）では、「国際紛争」「平和構築」などをテーマとしたネイティブの大学教員による授業を受けたり、「平和学」に関するウェブサイト上のイベントに参加したりしながら、生徒個々が探究学習に取り組み、グローバルリーダーに求められる資質・能力を身につけていく。

「各自が取り組みたいテーマを選び、発表に向けて、とことん探究する姿が見られます。そこから将来的なビジョンが膨らんでいく生徒が多

講演後、2時間にわたって 生徒たちが講演者に直接質問

講演後は、希望者による質疑応答が約2時間にわたって行われた。北岡さんは真摯に答え、温かみのある言葉を返した。そのやりとりの一部を紹介する。

生徒 高校時代にしておくといふと思うことは何ですか。

北岡 自分の関心とは一見無関係と見える分野に目を向けたり、活動をしたりすることです。私は海外大学の進学に向けて必要な勉強に集中していましたが、それとは直接関係のない分野の勉強をしたり、部活動をしたりしていたら、違う発見があったり、新しいスキルが身についたりしたりしたかもしれないと、今は思います。

生徒 「EQ」は、どうしたら伸ばせますか。

北岡 EQでは、シンパシー（同情）より、エンパシー（共感）が大切です。困っている人に、“I'm there for you.”と云うのがシンパシー、“I'm there with you.”と云うのがエンパシーです。相手のことを考え、寄り添うことで、EQは育まれると思います。

マインドフルネスも、EQを伸ばすのに有効です。それは、メタ認知能力つまり、もう一人の自分が自分のこと

を見て、どのような人間かを捉えることです。スタンフォード大学の出願時の提出書類に、「将来のルームメイトに一言」をテーマにしたエッセイがありました。共同生活を送る上で相手のために何ができるのかをアピールするわけですが、それを書くためには自分がどのような経験を重ね、どういった人間であるか、自分を客観的に捉える必要があります。そこでもEQが求められていたのだと思います。

生徒 社会で求められる人とは、どのような人だと思いますか。

北岡 単に知識が豊富なだけではなく、その知識を使って何ができるかを考えられる人、そしてEQの高い人だと思います。

生徒 将来の目標が特にないのですが、「外の世界を知りたい」だけで、留学してもよいでしょうか。

北岡 「外の世界を知りたい」という気持ちがあるのなら、ぜひ留学してください。多感な思春期は、様々な知識・経験を柔軟に吸収できます。語学ならいつでも身につけられますが、他文化を身につけたバイカルチュラルになれるのは、若い時期だけだと思います。アイデンティティーを形成している途中の皆さんだからこそ、いろいろな世界を体験してみてください。

く見られます」(久保先生)

SGHの学びでは、生徒に自分の考えを書かせることを大切に行っている。講演や研修に参加した後など、多くの場面で思いや考えを書き、それに教師が目を通した結果、ほかの生徒にも共有させたいと教師が思ったものは、学級内や礼拝時に発表し、共有する時間を持つ。

「以前から生徒に考えを書かせて、全員で共有する指導をしてきました。SGHに指定されてから徹底して行うようになったことを機に、学校の文化として定着しました。まず自分で考え、言葉にして、皆で共有するというプロセスを通し、自分の考えを振り返って深めていく姿が見られます」(畑野先生)

礼拝やオープンスクールなどの運営を生徒に任せる

授業以外の様々な活動にも、進路を意識して資質・能力を伸ばす指導を取り入れている。例えば、毎朝の礼拝は生徒が運営を補助し、感話も生徒が行う。広報部の和田知亜紀先生は次のように話す。

「自分に自信が持てるようになる

と、自分の考えに信念を持って相手にしっかり伝えられるようになりま

す。それは進路を選択する上でも、社会に出てからも必要な力です。そこで、成功体験を積み重ねて、人から認められる経験を多くさせたいと考えています。例えば、礼拝ではオルガンの演奏で輝く生徒がいますし、ほかにも、校内の様々な活動で個性が発揮できる機会を設けています」

オープンスクールでは、中・高の生徒会を中心に生徒が運営に参加し、学校案内や体験授業などを行っている(写真2)。

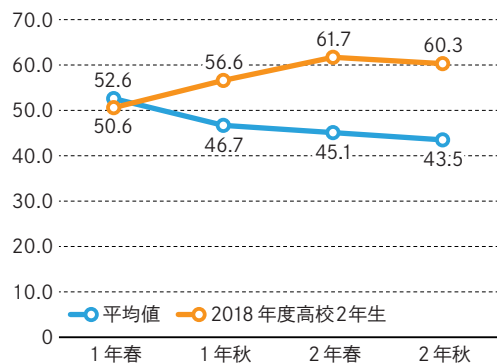
写真2 オープンスクールでは、高校の生徒会が、校内ツアーを企画・運営。中学校の生徒会は、質問コーナーで学校生活や勉強の方法について、小学生らの質問に答えた。

える力につながればと考えています」(田中先生)

社会とのかかわりから夢を見いだす生徒たち

それら一連の指導によって様々な資質・能力を伸ばし、高校2年次以降は面談や生徒集会などを通して具体的な進路を考えさせていく。近年は、SGHなどの成果として、生徒の進路意識に変化が見られるという。

図3 学習状況リサーチ「課題克服」の推移



「学習行動」の「課題克服」について、平均値は1年生春から下降傾向にあるが、同校の2018年度高校2年生の数値は上昇している。ほかの学習行動にも同様の傾向が見られた。※ここでいう平均値は各回における母集団をすべて含む。*学校資料を基に編集部で作成

「以前は、『○○になりたいから△学部に行きたい』と、職業ありきで進路を考える生徒が多く見られました。それがSGHに取り組んでから、『社会にこうかわっていききたい』『こんな貢献をして生きていきたい』など、まず自分と社会のつながりから夢を語り、それを実現するために職業を考える生徒が増えてきました」(畑野先生)

生徒の変化の傍証と捉えているのが、ベネッセの「スタディーサポート」において、高校2年生の「課題克服」(*3)の平均値の伸び率が、全国の中でもトップレベルだったことだ(図3)。

「探究学習などを通じて、自分が本当にやりたいことを見だし、問題解決に取り組むプロセスに喜びを感じる生徒が増えたからだと思っています。そうした学習から発した興味・関心が進路選択にもつながっていると 생각합니다」(久保先生)

SGHの指定期間終了後も、一連の指導や探究学習の取り組みは継続する予定だ。今後も教育活動全体で資質・能力を育みながら将来へのビジョンを膨らませ、希望進路の実現を目指す指導を追究していく。

*3 「課題克服」は、3つある「学習行動」の1つで、「自ら課題を克服する学び方(自分の苦手なことを克服する学習)」であり、「疑問点は先生や友人に質問をして解決する」「何が分からないかを確かめながら学習する」を指す。「学習行動」のほかの2つは、「習得(基本的な学び方)」と「仮説検証(答えではなく、考え方があっていくかを重視する学び方)」。

事例 3 長崎県立諫早高校

対話を通じた多様性との出会いの中で 「キャリアエリート」を育てる

長崎県内屈指の進学校として着実に実績を積み重ねている諫早高校。だが、その指導のあり方は、近年、「教師が答えや指示を与える指導」から「生徒に時間や機会を預ける指導」へと大きく変化している。学校活動の様々な局面で、「対話を通じた多様性との出会い」を重視しながら高い主体性を持った「キャリアエリート」を育てる同校の教育活動を紹介する。

教師からの自立を促すため 社会の多様性に気づかせる

国公立大学を志望する生徒が多い長崎県立諫早高校は、例年、全国屈指の国公立大学合格率を上げている。生徒、そして保護者は学校に全幅の信頼を寄せるが、それが高じ、「生徒が教師の与える答えや指示を待っていると感じることがある」と進路指導主事の後田康蔵先生は近年の生徒の気質における課題を説明する。

「変化の激しいこれからの社会は、私たち教師にも予測が不可能です。進路選択においても、教師の持っている知識の箱の中だけで、生徒に自分のあり方、生き方を考えさせるの

は難しくなっています。生徒には高校3年間を通して、よい意味で教師を疑いながら自分で考え、選択する力を身につけてほしいと思っています」（後田先生）

生徒が教師である自分を信じてくれることに満足せず、よい意味で生徒に教師を疑う力をも身につけさせたい。そこで、同校が取り組んでいるのが、社会の多様性に気づかせる仕かけづくりだ。教師の考えはいつも正解とは限らず1つの意見に過ぎないことを理解し、何が最適なのか分からないからこそ、様々な人々と対話し、いろいろな考えに耳を傾ける……そんな生徒を育てるため、仲間のユニークな意見や経験を

共有できる対話の場づくりを行っている。



長崎県立諫早高校
砂川一真 すながわ かずま
教職歴16年。同校に赴任して7年目。3学年主任。



長崎県立諫早高校
高比良周 たかひら しゅういち
教職歴20年。同校に赴任して10年目。2学年主任。CDA（*1）委員長。



長崎県立諫早高校
藤村 誠 ふじむら まこと
教職歴30年。同校に赴任して4年目。1学年主任。



長崎県立諫早高校
後田康蔵 うしろだ こうぞう
教職歴22年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。

同校における対話の場づくりの軸となっているのが、2015年度より年2、3回の頻度で開催されている進路講演会「グローバル講演会」

長崎県立諫早高校

- ◎校訓 「自立創造」の理念のもとに、人間性を豊かにして徳、知、体の調和のとれた社会に有為な逞しい人間の育成を目指す。併設型中高一貫校であり、中学校3クラス、高校7クラスを擁す。陸上部をはじめ、全国大会に出場する部活動も多い。
- ◎設立 1911（明治44）年
- ◎形態 全日制・定時制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約280人
- ◎2018年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、東京大、京都大、大阪大、広島大、九州大、長崎大、熊本大などに213人が合格。私立大は、中央大、東京理科大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ140人が合格。
- ◎URL <http://www.news.ed.jp/sahaya-h/>

*1 Comprehension（理解）、Discovery（発見）、Ambition（大志）の頭文字をとった、同校独自の進路観醸成プログラム。

だ。グローバル講演会では、グローバルに活躍するNPOの代表や研究者、実業家等をゲストに迎えるが、その人選や登壇交渉、全校生徒に提供する事前学習資料の製作、そして講演会やゲストとの対話の場のプログラムづくりなど、メンバーが入れ替わりながら各回十数人の有志の生徒が数か月をかけて主体的に進めている(本誌2016年6月号P.58参照)。

「グローバル講演会では、様々な社会問題の解決に取り組む方をゲストに迎えますが、実際にどんなことを話してもらいたいかは生徒が話し合い、ゲストに伝えます。生徒たちが関心を持っているのは、ゲストが自分の人生の価値をどのように考え、社会への働きかけを決定していったかです。多様な価値観を持った校外の人の話を聞きながら、これからの社会を生きるために必要な力は何かを考えています」(後田先生)

学部・学科や学問、職業などを切り口に、自分が関心を持つ人、自己と志向が近い人の話を聞こうとするのが以前の進路講演会だとしたら、それほど関心を持っていなかった分野で活躍する人の話を聞き、その生き方から共感や違和感を自分なりに

整理し、新たな視点を学ぶのが今の進路講演会だと後田先生は話す。

学校という社会の変革に 動き始めた生徒たち

グローバル講演会を主体的に企画・運営する有志の生徒の姿は、全校の生徒、教師に「高校生でもここまでできる」という驚きを与え、学校の様々な活動が生徒の対話を土台にした主体的なものに生まれ変わっているという。特に、以前から存在した既存の取り組みが、生徒に任せられ、大きく価値を高めていると2学年主任の高比良周一先生は話す。

「例えば、中学生に向けた学校説明会においては、生徒会の生徒が『自分たちの学校の魅力は何だろう』『どのように中学生に伝えればよいだろう』と話し合い、それを踏まえて、校長に対して『こんな内容で話をしていただきたい』と企画書にまとめています。また、文化祭は今年度から2日間になりましたが、それも生徒会の生徒たちが企画を立て、私たち教師に提案した結果です。文化祭を2日間にしようとした一番の理由は、『グローバル講演会や課題

研究などに取り組む同級生のユニークな活動経験や、そこでの学びを、ほかの生徒に共有する場をつくりたい』と考えたからです。学校には様々な個が存在することに気づき、そんな学校に対して誇りを持つているのだなと思えました」(高比良先生)

今、同校では、「ランチミーティング(写真1)」が毎日のように開かれている。部活動で忙しい生徒たちが、学年やクラスを超えて自由に集まれる昼休みに行うミーティングのことで、グローバル講演会を運営する有志生徒が始めたものだが、今では校内の様々な生徒主体のプロジェクトに波及して、学校行事のあり方などが話し合われているという。

「最近では、部活動の部長が悩みや疑問を共有するランチミーティングが企画されました。また、生徒会役員に『委員会活動の取り組みを評価する指標があると、活動が改善されるながら積み上がっていくよね』とアドバイスしたところ、生徒は委員会活動を評価するためのルーブリックの作成を思い立ちました。近々、

そのランチミーティングも行われると聞いています」(高比良先生)

生徒同士の対話を大切にしながら主体的に活動する生徒を、後田先生は「キャリアエリート」と表現する。「これまででは、勉強と部活動が生徒にとっての活躍の場でした。しかし今、本校にはそうした枠にとどまらず学校行事や課外活動などで活躍する、いわばキャリアエリートが出現しています。そして、勉強エリートや部活動エリートがキャリアエリートに憧れと尊敬の念を持って接し、『勉強や部活動だけで満足しては駄目だ』と活動を広げようと

写真1 グローバル講演会を始め生徒の主体的な活動でよく見られる「ランチミーティング」。学校や社会をよりよくするための方策を話し合う、勉強でも部活動でもない第三の活動が増えてきた。

しています。また、そうした生徒の出現によって、私たち教師が『これも任せてみよう』と生徒に背中を押される、よい循環が生まれているように思います」（後田先生）

特別な生徒でなくても任せれば、できる

対話を通じた多様な価値観との出会いを全生徒に保証する取り組みも始まっている。3学年主任の砂川一真先生が例に挙げるのは、3年生が高校に入学した直後の取り組みだ。

「『先生だからすべて正しいということはない』『高校生活で疑問や悩みが生まれた時は、大人に頼りきるのではなく、クラスの仲間との対話を通してよりよい答えを探してほしい』と話をし、その後、学年全員が体育館で『なぜ、学ぶのか』をテーマにグループで話し合いました。お互いをまだよく知らない者同士が協力して模造紙に考えをまとめる中で、この学校は多様な価値観を大切にしながら、正解が誰にも分からない問いを仲間と話し合って考える学校なのだと、生徒は感じ取ったのではないのでしょうか。身近なテーマで

も仲間との対話で深掘りでき、そこに多様な価値観を見いだせるのだと実感することで、対話が日常化していきます」（砂川先生）

学年全員が参加する進路説明会

も、生徒主体の企画になっている。「外部講師をゲストに進学環境について講演をしていたらいい時も、各クラス委員が何について知りたいかをアンケート調査し、そこから話

図1 18年度入学生に提示したルーブリック「本校の目指す生徒像」

観点	S	A	B	自己評価	評価理由・具体的取組み
授業	各教科の授業内容を十分に理解し、授業の中では、より高度の学習である「質問する」「話し合う」「実習する」「人に教える」活動を積極的に行うことで、しっかりと習得できた。	各教科の授業内容をほぼ理解し、授業の中で、先生の話を良く聞き、わからないことは、先生や友人に質問するなどして、難しい問題や課題にもチャレンジした。	各教科の授業内容を理解できないこともあったが、自分でふり返ったり、質問することができていた。授業の内容をおむね理解できた。		
家庭学習	長期的、短期的学習計画を主体的に立て、毎日欠かさず、予習・復習、課題に加え、自分の苦手な教科へのテーマ学習も積極的に進めた。	指示された課題などの意義を理解し、毎日、自分の成長のために積極的に取り組んだ。課題が少ない日であっても、3時間の学習を継続して行った。	指示された課題などは、おおむねやり進めることができた。		
総合的な学習の時間	活動の意義や目的を理解し、積極的に活動した。活動では、興味・関心があることだけでなく、知らなかった、体験したことがなかった分野についても積極的に学び、対話により自己の可能性や選択性を広げることができた。ポートフォリオにより、自己を振り返ることで成長につながった。	毎回、指示された活動に真摯に取り組んだ。仲間との対話が、自己の可能性を広げたり、見聞を広げることを実感した。活動をポートフォリオにより欠かさず進めることができた。	毎回、指示された活動については、真面目に活動し、活動履歴も欠かさず残した。		
学校生活	時間や規律を守り、自分に与えられた役割を果たすだけでなく、学校や学級をよくするために、新たな企画や活動に主体的に参加した。	時間や規律を常に守ることができた。また、自分に与えられた役割は十分に果たすことが出来た。また、集団の一員として協調性を持って活動することもできた。	時間や規律は、おおむね守ることができた。また、自分の長所に従って活動した。		
部活動・課外活動	自己を成長させるために、テーマや目標を設定し、毎日、積極的に活動した。また、仲間との対話により、リーダーやフォロワーとして、部や団体を引っ張ることができた。	課外活動が行われる日には毎日参加し、自己の成長のために努力した。また、集団のために、与えられた役割を果たした。	課外活動には、可能な限り参加し、自己の力や技術が向上しつつある。		
主体性	志手帳を毎日、有効に活用するだけでなく、活用方法を自分なりに工夫し、自己管理に努めた。また、常に問題意識を持ち、自分の考えで、両手にも使った。	志手帳を継続して活用しながら、自己管理能力を高めることができた。自分の考えで取り組んだことが、1度以上はあった。	志手帳は、指示された時には着実に活用し、自己を振り返った。そのことで、自己管理できるようになったと感じている。		
コラボレーション	異年齢や異性、校外など、活動の範囲を積極的に広げ、対話を通して、一人では、果たすことができない成果を生み出すことが出来た。	素心の知れた仲間やチームメイトとも、問題意識を持ち、新たな課題解決に取り組んだ。その結果、少しずつ集団が成長していると感じている。	集団で行動することを求められた状況では、仲間と協議して活動することが出来た。		
チャレンジ	自分の苦手なこと、未体験のこと、校外外を問わず積極的にチャレンジした。その結果、自分の成長を実感するとともに、新たな課題を見つけ積極的に活動した。	周囲にすすめられ、自分の苦手なこと、初めての事に1度はチャレンジしてみた。結果は出来ていないが、またチャレンジしようという思いがある。	今まで行ったことのないようなことにチャレンジする機会はなかったが、今後、チャレンジと考えているものがある。		

*学校資料をそのまま掲載。

多様な視点から生徒を評価する進路指導

対話を重視し、生徒の主体性を尊重する指導を学校の文化として定着させるためには、教師、生徒による目指すべき生徒像の共有が必要だ。同校では、18年度の1学年より「本校の目指す生徒像」を定め、ルーブリックによる評価ができるようにしている（図1）。授業、家庭学習、学校生活、部活動・課外活動などの5つの場面と、主体性、コラボレーション、チャレンジの3つの観点で高校生活について4段階で状態を記述したもので、生徒、保護者、そして学年団の指針として共有されている。仲間と対話し、主体的に動く力を生徒に望む教師が、場面に応じた具体的な行動指標を生徒に示したわけだ。

そのルーブリックを用いて、学期末、生徒は振り返りを行うが、そこ

図2 他者視点を交えた1年生2学期の振り返りシート

諫早高校73回生振り返り(8月~12月) 組 番 氏名

3つの力について書いてみよう。

書き手 の視点 を つ け て 書 き ま す。	3つの力	いつどのように、身についたか。具体的に書こう。	これから、身につけるためには、どのような工夫が必要か。具体的に書こう。
	主体的に取り組む力		
	他者と対話し、受容する力		
	仲間とともに協働する力		

【より】※記入者の氏名及び振り返りへのポジティブメッセージを記入してください。

【より】※記入者の氏名及び振り返りへのポジティブメッセージを記入してください。

【保護者より】

【担任又は副担任より】

*学校資料をそのまま掲載。

では自己評価に加えて、保護者、さらにクラスの仲間のコメントが書き加えられる(図2)。自己評価と他者評価は、担任との面談で生徒の内省を深めるヒントになると1学年主任の藤村誠先生は話す。

「生徒を評価する視点が增えることで、それぞれの生徒のよいところ、頑張っている部分を見逃してしまふことが少なくなりまふ。もちろん、保護者や同級生が厳しめの評価をしようとしてもありますから、そんな時は担任が『あなたはこんなところでも努力していたよ』と生徒を励ませばよいのです」(藤村先生)

今年度の3学期には、1学年団で資質・能力ベースの進路検討会を予定している。生徒の活動実績とルーブリックによる自己評価、他者評価、さらに1学期に受検したベネッセの「GPS-Academic(*2)」の結果を客観評価として材料にした検討会で、同校でも初めての試みだ。

「キャリアエリートが増える中、生徒が社会に対してどのような課題意識を持ち、校外でどのような活動をしているのかを丁寧共有することで、2年生になった生徒に『こんな活動をしてみては?』と働きかけることができます」(藤村先生)

社会貢献する達成感を 高校時代に味わわせる

生徒が主体的に様々な活動に取り組む学校の様子は、近隣の中学生に知られるようになった。

「学校説明会でも、勉強だけをやりたいと入学を希望する生徒が減っています。既に『グローバル講演会の企画に携わりたい』と入学してきた生徒もいます」(後田先生)

対話を通して多様な価値観に出会い、自分や社会に対する問題意識を深めることを重視する諫早高校。今後は、自分の中に生まれた問題意識を、実際に解決するための手段まで考え、挑戦できるようにサポートしたいと教師たちは考えている。

「『総合的な学習の時間』で取り組み課題研究も、単に興味のあることを調べるだけでなく、それは社会のどんな問題を解決するのか、社会にどんな価値をもたらすのか、考えながら取り組ませています。実際に解決に至るのは困難でも、高校卒業後も考え続けたい大切なテーマを見つけた上で、大学に進学してもらいたいと思っています」(後田先生)

「理科離れの原因を分析し、科学

写真2 課題研究を通して、応援歌づくりや中学生向け授業など、学校という社会に貢献しようとする生徒も現れている。

が好きになる授業を考えた。附属中学校で授業させてほしい」「ヒット曲のメロディーと歌詞を分析して同級生を応援する歌を作った。昼休みに中庭で演奏したい」など、高校生らしいユニークな視点で自分ができる社会貢献を考え、実行する生徒も出てきている(写真2)。

「諫早高校はこの数年で本当に変わりました。しかしそれは、私たち教師が変わったからではありません。変化したのは生徒であり、私たちはそれに引っ張られ、変わっているのです。そして、この変化はまだ成果ではありません。本当の成果は、生徒が卒業した後、もっと大きな形で表れてくるはず」(後田先生)

*2 ベネッセのアセスメントの1つで、問題発見・解決に必要な3つの思考力(批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力)を選択式、記述・論述式、質問紙で多面的に測るテスト。

VIEW21 PRESENTS

先生方とともに高校生の今と未来をつなぐ ワークショップ 2019

理解! **習得!** 自校に **展開!**

生徒の学びをデザインする カリキュラム・マネジメント

高大接続改革が進み、カリキュラム・マネジメント（以下、カリマネ）に対する学校現場の関心が高まる中、カリマネを自校でどのように進めていけばよいのか、悩まれている管理職・ミドルリーダーは少なくありません。今回のワークショップでは、参加者が実習を通してカリマネ実践のポイントを理解・習得し、自校に戻って同僚とカリマネに取り組めるようになることを目指します。また、カリマネを進める中で得られたノウハウや経験を共有するネットワークづくりも行います。

**2019年
3月23日(土)
岡山市で開催!**

監修・ファシリテーター

ともこ
森 朋子

関西大学教育推進部教授

専門は、学習研究、学習理論。島根大学教育開発センター長等を経て、現職。共編書に『アクティブラーニング型授業としての反転授業』（ナカニシヤ出版）。



日賀優一

「三四郎の学校」事務局長

本誌連載コーナー「これからの会議・研修のあり方、つくり方」監修者。

内容

① 学校教育目標の設定

自校で育成を目指す資質・能力を学校教育目標として設定する際のポイントを理解

② カリキュラムの作成

学校教育目標を達成するためのカリキュラムを、実際に自校で作成していく際のポイントを理解

③ 自校での実践工程表の作成

学んだことを自校で実践できるように、今後の具体的な工程表を作成

- ◎ いずれの場面でも、対話を中心とした参加者主体の活動が盛り込まれます。
- ◎ 参加者には、自校の現状を整理するなどの事前課題への取り組みをお願いする予定です。

※上記の内容は予定であり、変更される場合があります。

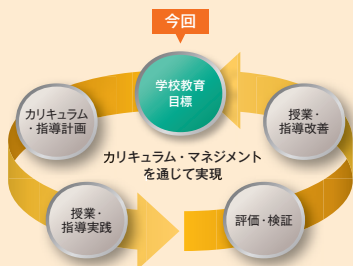
日時	2019年3月23日(土) 10時30分～17時30分
場所	株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社(岡山市北区)
参加対象者	カリキュラム・マネジメントの推進において課題を抱えている高校の先生
募集人数	50名程度(先着順。同一校からの参加は上限2名までとさせていただきます)
参加費	3,000円(税込み。昼食代を含む)

参加申し込みは
2019年1月15日(火) 開始!

ベネッセ教育総合研究所のホームページトップ(*)にあるバナー「カリマネ・ワークショップ参加申し込みフォーム」からアクセスし、必要事項をご記入ください。

*「ベネッセ 研究」で検索→「ベネッセ教育総合研究所」

ワークショップの様子は、2019年度『VIEW21』高校版にてご紹介する予定です。



授業や学校行事など、 教育活動のねらいを「見える化」し、 身につけさせたい資質・能力を明確化

東京都立淵江高校ふちえ

アクティブ・ラーニング導入 を機に教育活動全体を見直す

東京都立淵江高校では、生徒が主体的に学ぶ授業を目指し、2015年度から、各教科でアクティブ・ラーニング（以下、AL）の視点を取り入れた授業改善を進めてきた。16年度には、東京都教育委員会「アクティブ・ラーニング推進校」の指定を受け、取り組みを深める中で、カリキュラム・マネジメントの重要性に気づいたという。降幡高志ふりはた副校長は次のように話す。

「授業改善を進める中で、ALで大切なのは、生徒の実態に応じて授業や単元の目標を適切に設定し、それを生徒に示して、見直しを持って学ばせたり、振り返らせたりすることだと見えてきました。目標設定を追究していくと、まず、教育活動全体を通して、生徒に身につけさせたい資質・能力を明らかにし、学校のグランドデザインを明確にすることが不可欠だと分かりました」

17年度からは、東京都教育委員会「カリキュラム・マネジメント推進校」の指定も受け、その研究を進めてきた。



写真 生徒に身につけさせたい資質・能力を付せん紙に書き出し、KJ法で整理。グループごとに3～4つに分類して模造紙に概念図を作成し、それを発表し合って共有した。

育成を目指す資質・能力を カリキュラム・マップに示す

まず、生徒に身につけさせたい資質・能力を設定するため、全教員でワークショップを行った（写真）。生徒の実態と課題を確認し合った後、グループに分かれて生徒に身につけさせたい資質・能力を出し合い、全体で共有。その後、降幡副校長や主幹教諭が検討し、4つの枠組みと14の資質・能力に整理した（図）。そして、各資質・能力のルーブリックも作成し、どう育成を図ればよいのかを具体的にイメージできるようにした。

「以前から、教員間で共通認識を図りながら生徒指導を行い、さらに、全校でALを進めてきたため、身につけさせたい資質・能力についても

大きな認識のずれはなく、スムーズに共有できました」（降幡副校長）

18年度は、次のステップとして、各資質・能力をどの教科・科目や教科外活動で重点的に育成するのか、各教科会や分掌で検討した。

「当初、担当教科・科目でどの資質・能力の育成に重点を置けばいいのか、多くの教員が判断が難しいと感じていました。そこで、従来の指導で大切にしてきた思いを整理し、見える化するようになりました。そうした作業を進めるうちに、さらに力を入れるべき指導も見えてきました」（降幡副校長）

そうして、各教育活動において育成を目指す資質・能力を明確化した「教科用」と「教科外活動用」のカリキュラム・マップの概念図を完成させた。進路指導部主任の片桐慶久かたぎりよしひさ先生は作成の意図をこう説明する。

「教員はつい自分の担当教科・科目に注目しがちですが、カリキュラム・マップの作成によって教育活動全体を通して資質・能力を育成する意識が高まりました。本校が力を注ぐ学校行事や国際交流、ボランティア活動などの教科外活動の教育的な意義も確認できました」

* 「学校教育デザイン」とは、本誌が2017年度6～12月号の特集で提唱した、「学校教育目標からカリキュラム・指導計画の策定、授業・指導実践、その評価・検証、授業・指導改善までの一連のサイクルが、カリキュラム・マネジメントを通じて実現される学校改革の営み」のこと。



東京都立淵江高校校長
杉淵明子 すぎふちあきこ
 教職歴36年。同校に赴任して1年目。



東京都立淵江高校副校長
降幡高志 ふりはた たかし
 教職歴37年。同校に赴任して4年目。



東京都立淵江高校
片桐慶久 かたぎり よしひさ
 教職歴31年。同校に赴任して3年目。主幹教諭。進路指導部主任。



東京都立淵江高校
小澤憲司 おさわ けんじ
 教職歴14年。同校に赴任して4年目。主幹教諭。教務・総務部主任。

東京都立淵江高校

◎教育重点目標は、「学力の向上」「規範意識の涵養」「穏やかな心身の育成」。2018年度、東京都教育委員会「アクティブ・ラーニング推進校」「ボランティア活動推進校」「カリキュラム・マネジメント推進校」等の指定を受けている。国際交流活動を始めとした国際理解教育にも力を入れている。

◎設立 1971（昭和46）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約230人

◎2018年度進路実績（現役のみ）私立大は、流通経済大、明海大、国士館大、拓殖大、帝京大、東京工科大、東京電機大、武蔵野大、目白大、立正大などに延べ62人が合格。短大、専門学校進学73人。就職62人。

◎URL <http://www.fuchie-h.metro.tokyo.jp/site/zen/>

全員で考えた目指す指導を实践、振り返るPDCAサイクルを確立

現在は、カリキュラム・マップ（図）を基に、各教科・科目や教科外活動の指導改善を進めている。18年10月に実施された化学の公開授業では、資質・能力の育成に焦点をあてた授業のあり方を共有した。

「指導案の作成では、『この資質・能力をつけるためにどのような学びを展開すればよいか』『これまでの指導はこの資質・能力の育成につながっていたのか』など、試行錯誤を重ねました。その過程で、授業者は、授業の目的、すなわち育成を目指す資質・能力を明確にすると指導がしやすく、生徒の学びも深まると感じていました」（降幡副校長）

各教科・科目のルーブリックの作成も進めており、今後は教科外活動のルーブリックも作成予定だ。教務・総務部主任の小澤憲司先生は、次のように語る。

「全員で考えた目指す指導を实践に移し、振り返りを通じて効果を検証し、さらに概念を修正するサイクルが確立されつつあります。カリキュラム・マネジメントに基づく教

育活動の最初の一步がようやく踏み出せたと感じています」

18年度中にはグランドデザインも練り上げ、教員と生徒だけでなく、家庭や地域とも共有し、教育活動のさらなる充実につなげたいと考えている。杉淵明子校長は、今後の展望を次のように述べる。

「A.Lの実践を通して、生徒の主体性やコミュニケーション能力が着実に育っていると実感しています。その延長としてカリキュラム・マネジメントの取り組みがあり、一人ひとりの生徒の資質・能力をいかに高めるかを考えることに大きなやりがいを感じています。社会は変化していますし、生徒は一人ひとり異なります。教育活動に完成はありません。今後も、常に走りながら改善を重ねる姿勢で取り組んでいきます」

4つの枠組みと14の資質・能力を図示した「教科用」のカリキュラム・マップ



上図とは別に、「教科外活動用」のカリキュラム・マップも作成した。＊学校資料をそのまま掲載

導かれた道標

これまでの実践を振り返り、整理することで、今後の学校の姿・指導のあり方が見えてくる



14:40 前時の復習



前時の授業で生徒が80字で書いた前時の授業のまとめ(「R80」)のうち、クラス内で「よかった」という得票が多かった生徒のまとめをモニターに映した。中島先生は、授業の要点を押さえた論理的な文章である点を褒めた。続いて、クリッカーアプリで、前時の学習内容をクイズ形式で復習。1問10秒で考えさせ、生徒1人を指名し解答させた。

授業
ハイライト

●4年生(高校1年生)「生物基礎」で、「遺伝子とその働き・遺伝情報とタンパク質の合成」の全6時間のうちの3時間目。遺伝暗号であるコドンについて、協働学習や講義で理解を深める。生徒は一人一台のタブレット端末を活用(P.31に単元の指導計画を掲載)

主体的・対話的で
深い学びへ

実践
アクティブ・ラーニング

生物

ICTを活用して
学び合いを効果的に行いながら、
思考力・表現力の向上を図る

中島先生のアクティブ・ラーニング

「R80」「AL指数」を駆使し、
全校を挙げてALに取り組む

茨城県立並木中等教育学校では、中島博司校長の主導の下、2016年度から全校を挙げて、アクティブ・ラーニング(以下、AL)の視点を取り入れた授業づくりを進めている。中島校長が推奨する手法の1つが、「R80(アールエイティ)」だ。「R」は、リフレクション(振り返り)



茨城県立並木中等教育学校
中島達也 なかじま・たつや

教職歴18年。同校に赴任して6年目。
企画研究部。理科(生物)担当。6学年担任。
2018年度から本格的にアクティブ・ラーニングを実践。

茨城県立並木中等教育学校

◎茨城県立並木高校を前身として開校。「自制・自律・自尊」を校訓とする。文部科学省「SSH」(*1)指定によるサイエンスプログラムや、先進的な国際理解教育などを展開し、グローバルリーダーの育成を図る。

◎設立 2008(平成20)年
◎形態 全日制/普通科/共学
◎生徒数 1学年160人

◎2018年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、千葉大、お茶の水女子大、東京大、一橋大、京都大、大阪大、神戸大、茨城県立医療大などに88人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、明治大、早稲田大などに延べ294人が合格。

◎URL <http://www.namiki-cs.ibk.ed.jp/>

*1 文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール。



座席を戻し、チャットアプリで寄せられた疑問をモニターに映して、中島先生が解説。疑問はすべてタブレット端末で共有し、「RNAのヌクレオチドは何種類？」などと、中島先生は問いかけ、生徒とやり取りをしながら説明した。さらに深めたい疑問については、「よい質問ですね。これはあとで詳しく説明します」と言っていったん保留にした。

次に、毎授業同じメンバー構成の6人グループとなり、メンバーの1人が予習プリントや教科書の内容を基に作成したスライドを示しながら、本時の学習内容をほかのメンバーに説明した。分からない点はグループ内で教え合い、解決できなかった疑問は、チャットアプリに投稿。その間、中島先生は本時のねらいの3点を板書した。

「生物は、現行の学習指導要領で学ぶ内容が大幅に増え、教科書の内容を教えることで手いっぱいでした。対話的な活動は、資質・能力の育成に効果的だろうと思いましたが、時間が取れないというもどかしさを感じていました」

全校で授業の相互参観が活発に行われ、ALの視点を取り入れた授業がどういったものであるかが浸透する中で、中島先生も本格的に授業改善を始めた。今年度の担当学年は、4年生と6年生（高校1年生と3年生）で、6年生は、模擬試験の結果の振り返りをグループワークで行いつつ、入試に対応した講義型の授業が中心だ。

とリストラクチャー（再構築）のことで、生徒がペアやグループで話し合った内容を80字でまとめる活動であり、必ず2文とし、接続詞でつなげるのがルールだ。思考力・判断力・表現力、論理力を同時に高め、大学入試の記述式問題に対応できる力が高められるという。

「AL指数」も、中島校長が推奨する手法の1つだ。「AL指数」とは、対話的な活動の実施率を示す指標で、例えば、50分授業で10分間対話的な活動を行った場合は、「AL20」となる。教師が自身の授業を客観的に捉えるために考案された。指数が高ければよいというわけではなく、教科の特性や単元の内容に応じて講義と対話的な活動を使い分けることを前提としている。

生物担当の中島達也先生が、ALを知ったのは3年ほど前であり、当時は自身の授業で行うのは難しいと感じたと言う。

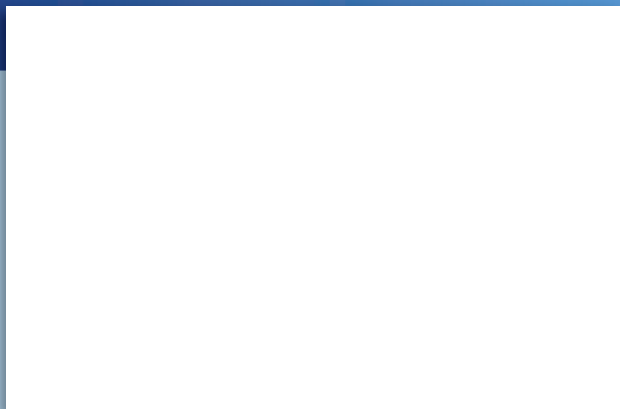
一方、今回取材した4年生の「生物基礎」では、対話的な活動を積極的に取り入れている。授業の基本的な流れは、①前時の「R80」の紹介、②クリッカーアプリを使った前時の復習（1単元に2〜3回実施）、③予習した内容のグループでの共有、④グループで出た疑問への回答と講義、⑤ペアワークによる本時の内容の振り返り、⑥本時の「R80」の作成となる。

思考の活性化・深化への配慮

予習を前提とした授業とし、ペアやグループの活動時間を確保

中島先生の授業のポイントは、予習を前提とした授業、「R80」の実施、ICTの活用 の3点だ。予習を前提とするのは、習得すべき知識が多い中で、授業での活動時間を確保するためだ。中島先生が配布した本時の学習範囲の予習プリントで、生徒は予習をする。さらに、6人グループのうち1人が、予習プリントや教科書の内容を基に、学習内容をプレゼンテーションソフトを使ってスライドにまとめる担当者となる。その担当者が、授業前半に行うグループワークにおいて、スライドを見せながらグループのメンバーに本時の内容を説明し、メンバーからの質問に答えるなどの協働学習を行う。

スライド作成の担当は、グループ内での持ち回りだ。作成に1〜3時間かかるが、月に1回程度であり、生徒は1年生（中学1年生）から探究



座席が隣の生徒同士でペアになり、本時の学習内容を確認。授業プリントをチェックしながら、中島先生が黒板に示した3つのねらいに沿って、ペアの相手が理解できるように説明し合った。そして、最後の5分間で、ペアワークの内容を基に、本時の内容を80字にまとめ、タブレット端末で中島先生とクラス全員とて共有した。



中島先生が、講義形式で本時の学習内容を解説。コドンが3個の塩基の組み合わせでできていることや歴史的実験でコドンとアミノ酸の対応が明らかにされたこと、そしてrRNAとtRNAの構造についての理解を促した。生徒は、事前に配布された授業プリントに記入しながら、学習内容を整理した。

学習でスライド作成や発表を行ってきた慣れていたので、負担はさほど大きくない。

思考の深まりを促すのが「R80」だ。

「2つの文章を矛盾せずにつなぐためには、論理的な思考力が必要です。すべての内容を書く」と80字を超えますから、ポイントを絞って端的に表現する力も鍛えられます。生徒が書いた「R80」を見れば、授業で学習した内容を理解しているかどうかをおおよそつかむことができます

以前は、生徒が書いた「R80」を一つひとつ添削していたが、どうしても時間がかかってしまっていた。そこで今は、全生徒の「R80」をウェブ上にアップしてクラス全体で共有し、アンケートアプリを使って、生徒によいと思ったものに投票させ、上位となったものの内容を次の授業で紹介している。中島先生は、よい点は褒め、論理的に弱い部分は指摘・指導することで、概要を的確につかみ、論理的に表現する力を磨く場としている。

場づくりへの配慮

疑問をクラス全体で共有し、生徒同士で解決

授業後半は、教科書の内容をまとめたスライドと、生徒がチャットアプリに投稿した疑問を同時にスクリーンに映して、中島先生が疑問について解説。中島先生が話すテンポはやや速めだが、生徒は予習してきている上、グループワー

クで疑問の多くは解消できていたので、速いテンポにもついてこられる生徒がほとんどだ。

クラスの一体感を高める上で大きな役割を果たしているのが、チャットアプリだ。グループワークで出た疑問をモニターで紹介することで、クラスメートが何に疑問を持っているかがひと目で分かる。生徒にとつて、様々な考えや気づきに触れる機会になるとともに、周りの生徒の理解度も分かり、生徒が安心感を得られるという。

生徒から投稿された疑問については、授業中に中島先生がすべて解説するため、授業後に疑問が残らない点も、生徒に好評だ。また、チャットアプリには、授業時間外でも疑問を投稿できる。中島先生が解説することもあるが、クラス全員がいつでも見られるため、生徒同士で疑問を解決し合うこともあると言う。

「今後、生徒の思考を深められるような問いを私がチャットアプリに投稿し、生徒同士で議論を深めていける場になりたいと考えています」

成果と課題

生徒の9割以上が学習内容を理解できたと回答

本格的にA.Lの視点を取り入れた授業を行って約半年経ち、生徒の発言の活発さや質問の多さなどから、学習意欲が高まっているのを感じると言う。そして、自身の予習、グループワークにおけるスライドを使ったメンバーによる説

単元の指導計画

【教科・科目】理科・生物基礎 【分野・単元】遺伝子とその働き・遺伝情報とタンパク質の合成 【テーマ・作品】タンパク質の合成
 【設定時数】全6時間の中の3時間目 【単元目標】DNAの遺伝情報からどのような過程を経てタンパク質が合成されるのかを理解する。

時数	学習内容	身につけさせたい資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	<ul style="list-style-type: none"> RNAの構造 転写とはどのような過程か 	<ul style="list-style-type: none"> DNAとRNAの違いを理解している。 DNAの遺伝情報がどのような流れでタンパク質の発現に至るのかをおおまかに説明できる。 塩基の相補性によって、DNAの塩基配列がmRNAに写し取られることを理解している。 <p>【知識、思考力、表現力、主体性、協働性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> 前時の終わりに80字で書いた前時の授業のまとめについて、アンケートアプリを用いて振り返る。 クリッカーアプリを使って前時の復習をクイズ形式で実施(2~3時間に1回)。 グループごとに、代表者1人が作成してきたスライドを基に、本時の学習内容を説明する。疑問はチャットアプリを用いてクラス全体で共有する。 講義形式で本時の学習内容を教師が説明する。 RNAを構成する糖、塩基を示す。 DNA→RNA→タンパク質の流れをおおまかに示す。 転写の具体例を挙げ、説明する。 ペアワークで本時の内容を振り返る。 ペアワークの内容を80字でまとめ、アンケートアプリでクラス全体で共有する。 <p>※基本的にすべての授業を①~⑥の流れで実施。</p>	<p>【主体的な学び】前時の最後に生徒が80字で書いた前時の授業のまとめを振り返る。</p> <p>【対話的な学び】授業の初めに、各々の生徒が予習してきた授業内容を、発表者が中心となってグループ内で共有できているか。授業の終わりに、本時の授業内容をペアワークで振り返り、疑問点を解決できているか。</p> <p>【深い学び】予習してきた授業内容をグループ内で深め合うことで生じた、さらなる興味・関心・疑問点を、チャットアプリを用いてクラス全体で共有する。</p> <p>※1~5時間目も「教師の配慮」「評価方法」は同様</p>	<ul style="list-style-type: none"> グループワークのために作成した予習スライド 80字のまとめ
2	<ul style="list-style-type: none"> スプライシングとはどのような過程か 	<ul style="list-style-type: none"> スプライシングとはどのような過程か理解している。 スプライシングが真核生物でしか起こらないことの意義を考察することができる。 <p>【知識、思考力、表現力、主体性、協働性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> ①~③は同じ。 講義形式で本時の学習内容を教師が説明する。 スプライシングの過程を説明する。 その上で、その反応によってどのような利点が生じる可能性があるのか、考えさせる。 ⑤⑥は同じ。 		
3	<ul style="list-style-type: none"> コドンとは どのようにしてコドン表が作成されたのか rRNAとtRNAの働き 	<ul style="list-style-type: none"> 実験結果からコドンとアミノ酸の対応を考察することができる。 rRNAとtRNAについて、各々の働きを理解している。 <p>【知識、思考力、表現力、主体性、協働性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> ①~③は同じ。 講義形式で本時の学習内容を教師が説明する。 コドンがトリプレットであることの必要性を説明する。 ニールセンバーグ及びコロナの実験から、コドンとアミノ酸の対応を推定できることを考えさせる。 rRNAとtRNAの構造と働きを示す。 ⑤⑥は同じ。 		
4	<ul style="list-style-type: none"> 翻訳とは 	<ul style="list-style-type: none"> 翻訳の過程を理解している。 翻訳後の修飾や構造変化によって、タンパク質が形成されることを理解している。 <p>【知識、思考力、表現力、主体性、協働性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> ①~③は同じ。 講義形式で本時の学習内容を教師が説明する。 翻訳の過程を説明する。 翻訳によって形成されたポリペプチドは、その一次構造に基づいた立体構造をとることで、タンパク質として機能することを説明する。 ⑤⑥は同じ。 		
5	<ul style="list-style-type: none"> セントラルドグマとは 鎌状赤血球貧血症はなぜ起こるのか 	<ul style="list-style-type: none"> セントラルドグマの概念を理解している。 遺伝子突然変異によって鎌状赤血球貧血症が引き起こされるまでを説明できる。 なぜこの変異遺伝子が集団に残されるのかを説明できる。 <p>【知識、思考力、表現力、主体性、協働性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> ①~③は同じ。 講義形式で本時の学習内容を教師が説明する。 セントラルドグマの概念を説明する。 一塩基の変異で、赤血球の構造変化が起きることを説明する。 その遺伝子が集団内に残りやすいか、残りにくいかは、環境によって左右されることを理解させる。 ⑤⑥は同じ。 		
6	<ul style="list-style-type: none"> まとめ 	<ul style="list-style-type: none"> 転写・翻訳とは、どのような分子が関与する、どのような過程なのか、説明できる。 <p>【知識、思考力】</p>	<p>本単元の復習をクリッカーアプリを用いて行う。</p>		

*中島先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。

生徒の声



高橋真也さん 中島先生の授業は、生徒から出た疑問をグループで話し合うなど、疑問をベースに授業が進むので、自分たちで授業をつくる面白さややりがいを感じます。グループのメンバーが作るスライドは様々に工夫されていて、いつも気づきがあります。また、授業中にインプットとアウトプットを何度も行うので、より深く理解でき、知識の定着の面でも効果的だと思います。

「今後も、生物学的な考え方やセンスを磨いていけるような発問や課題を追究していきます。学校設定科目『理数探究』で行う探究学習との相乗効果も意識し、教科横断型で資質・能力を高めていける指導を目指します」

佐竹葉月さん スライドを作った説明する時は、自分が頭で理解したことを、どうしたら相手に分かりやすく伝えられるかという点に注意しています。言葉を選び、噛み砕いて説明することで、自分自身の理解も深まり、表現力が高まるのを感じます。分からないことはグループ内で気軽に質問できますし、それでも解決できなければチャットアプリでみんなに聞けるのも心強いです。

●1年生「国語総合」の漢文で、『十八史略』の「元璧」を学ぶ全5時間のうちの5時間目。前時に生徒個々で作成した漢文に関するクイズを、グループで話し合っ各グループ1問に絞り、それをほかのグループと出し合った。(P.35に単元の指導計画を掲載)

4～5人のグループになり、自分が前時に作ったクイズを1人3問ずつ付箋に記入して提示。それらを見比べ、難易度や各自の関心などに配慮しながら、自分たちのグループを代表するクイズを1問に絞り込んでいった。クイズの内容は、漢文に関するものなら何でもよいが、誰も答えられないものにはしないよう、事前に津覇先生が伝えておいた。

生徒自作のクイズを解き合う活動で 基礎・基本の定着を図り、 主体的な学習行動を促す

津覇先生のアクティブ・ラーニング

楽しさと基礎・基本の定着を
両立するALを目指す

津覇実貴先生がアクティブ・ラーニング(以下、AL)の視点を取り入れた授業を本格的に始めたのは、沖縄県のALの研究指定校になった沖縄県立八重山高校に2017年度に赴任してからだ。専門家による研修会への参加や先輩教師の授業参観などを通して知見を深める中で、津



沖縄県立八重山高校

津覇実貴 つは・さねたか

教職歴5年。同校に赴任して2年目。

国語科担当。1学年担任。

2017年度から本格的にアクティブ・ラーニングに取り組む。

沖縄県立八重山高校

◎県立の八重山中学校と八重山高等女学校を前身として開校した。八重山地区唯一の普通科高校。「師弟同行」を校是に、「学徳・進取・雄飛」を校訓として、「真の文武両道」「1ランク上の進路実現」をキーワードに教育活動を展開している。

◎設立 1942(昭和17)年

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約240人

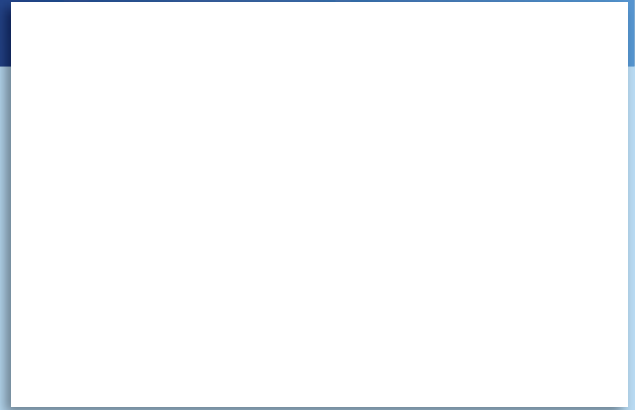
◎2017年度進路実績(現役のみ)

国公立大は、琉球大19人、名桜大1人、県外国公立大15人が合格。私立大は、延べ114人が合格。大学校短期大学校1人。専修学校・各種学校53人。就職9人。

◎URL <http://www.yaeyama-h.open.ed.jp/>



今回のクイズ作りでは、他教科との相乗効果をねらって、同時代の中国史からもクイズを作ってよいことにした。すると、『十八史略』が南宋時代に成立したことを踏まえて、「元朝を興して南宋を滅ぼした人物は誰?」、「『完璧』の故事が生まれた戦国時代の趙に隣接する国を2つ以上挙げると?」など、世界史に関連したクイズが複数のグループから出された。



グループの代表者がクイズを出題したら、ほかのグループは教科書や参考書を見ずに、グループ内で相談して、1分以内にホワイトボードに解答を書いて提示し出題者は各グループの解答をチェックするという活動を、全グループのクイズが出題されるまで行った。第1問は『完璧』の主人公の名前を漢字で書くと?」。全グループが正解し、教室中に拍手が起こった。

覇先生が関心を持ったのは、英語の授業で行われた、クイズ形式で単語や文法を学ばせる指導だった。

「私が初任の頃から目指していたのは、生徒が楽しみながら学力を高めていく授業です。ゲーム的な要素を取り入れることで、その理想に近づけるのではないかと考えました。実際、漢字や語句、古文の単語や文法、漢文の句法なども、クイズ形式にすると、生徒は楽しんで学習に取り組むようになりました」

提示する資料も、生徒が興味・関心を持つようなものを選ぶ。例えば、津覇先生が17年度に行った公開授業では、『土佐日記』が女性に仮託して書かれた理由を考えさせた。クイズ形式やジグソー法を取り入れた活動の中で、津覇先生は、平安時代の男女の日記と、現代の男女のメールを比較させた。すると生徒は、男性が情報を伝えることを重視するのに対し、女性は感情を伝えることを重視するというそれぞれの文章の特徴が、時代を超えて共通していることに驚きながら、活発に討論を繰り返したという。

思考の活性化・深化への配慮

クイズ作りで学習内容を振り返り、 周辺知識にも興味・関心を広げる

今回取材した授業は、漢文の『十八史略』にある、「完璧」の語源となった故事について取り上げた単元だった。単元計画通りに、1〜3時

間目は基本的な句法や語句の意味を、津覇先生が講義形式で解説した上で、ペアで本文の書き下し文を作成し、グループで現代語訳を行った。4時間目は学習した単元やテーマに関するクイズを生徒個々で作成し、5時間目の本時では、作成したクイズを用いるグループワークを行った。津覇先生は、同じ内容のグループワークでも、学力層に応じて声かけの内容を変えている。上位層のクラスでは、授業の最後に解説を行うと伝えた上で、ほぼノーヒントで現代語訳を行わせる。一方、下位層のクラスでは、随時ヒントを出しながら1行ずつ現代語訳をさせ、完訳に近づけていく。

津覇先生が今回の単元で特に学びを深める時間として設定したのが、4時間目のクイズ作りだ。以前は、先生が作問し、生徒に答えさせていたが、生徒にクイズを作らせることで、前時までの学習内容の復習の機会となり、周辺知識への興味・関心も広がると考え、現在の形にした。クイズは、生徒が興味・関心を持った事柄について自由に作らせる。ただ、内容が広がりすぎないように、使用する資料は国語の教科書と参考書、そして今回は世界史の教科書とした。世界史の授業で『十八史略』と同時代の中国史を学習していたため、クイズの範囲に加えたのだ。「クイズ作りを通して、幅広い知識が自然と身につきます。国語が苦手な生徒が得意な生徒より早く答えられることもあり、自己肯定感を高める機会にもなっています」

津覇先生が10分間で重要句法や語句の意味を解説し、クイズを出題する活動では触れられなかった知識を補った。今回の授業では行われなかったが、毎回単元の最後に自己評価用紙を記入し、自身の成長を省察する時間も設けている。授業後、教室を清掃しながら「どんなクイズを作った？」と話す生徒の姿が見られ、漢文への関心が喚起された様子がうかがえた。

クイズ形式の授業は、ゲーム性を持たせて生徒の関心を喚起するとともに、既習事項を振り返るために行った。あるグループは穴埋めクイズを提示。津覇先生は「以前の授業で学習した内容だね」と、生徒がその内容を思い出せるよう声をかけた。『待命於奏』の置き字『於』の役割は？」のように、1学期に学んだ置き字と本単元の内容を関連づけたクイズも出された。

場づくりへの配慮

間違いを許容する雰囲気 グループワークを活性化

授業では、学習内容の定着やメタ認知能力の向上を促すため、国語科共通の「自己評価用紙」を単元ごとに記入させる。生徒は、単元の最初の授業で本文を読んだ後、第一印象（感想・疑問・作者・作品の知識、授業への期待）を書いて自身の理解度を確認。単元終了後、ルーブリックを見ながら、「働きかける力」「状況を把握する力」「課題を発見する力」を各3段階で自己評価し、学習成果と課題・質問を自由に書いて提出する。「どのような力を身につければよいか？」がルーブリックで分かるだけでなく、振り返りを通じて学力の伸びが実感できる」といった生徒の声もあり、授業の羅針盤として機能している。

津覇先生が理想とする、グループワークにおける1グループの人数は3人だ。ペアワークは、音読など、目的が明確な活動では効果的だが、自由討論ではペアを組む相手との相性によって議論が活性化しない場合がある。また、4人以上では控えめな生徒の発言が少なくなってしまう。今回の授業では、クラスの人数や教室の広さを考慮して1グループ4〜5人としたが、中・下位層のクラスでは3人を基本としている。

さらに、以前は、発表者や書記といったグループ内の役割を輪番制としていたが、今はその都

度、生徒たちに決めさせ、主体性や協働性を育てている。

間違いを許容する雰囲気づくりにも努めている。入学時から「発表すること自体が大切。間違いを恐れないで」と繰り返し呼びかけ、生徒が間違えても「同じことを考えている人もいると思う。みんなのためになっているよ」と声をかける。成績がよい生徒ほど間違いを恐れる傾向があるが、間違いを肯定的に受け止める雰囲気をつくることで、生徒に安心感が芽生え、話し合いが活性化するのだ。

成果と課題

クイズを楽しむに 自学自習に励む生徒たち

ALの視点を取り入れた授業を始めてから、生徒が主体的に学習するようになった。「次の授業でクイズをやります」と伝えると、津覇先生が指示をしなくても、教科書や参考書を使ってクイズ作りを自ら進んで行うと言う。

「小テストを課しても勉強すると思いますが、それは外発的な要因によるものです。同じ学習内容でも、クイズ形式にすることで、生徒はやらされ感を抱くことなく、意欲的に取り組みます」クイズを行う授業の前には、生徒たちは「どんな問題を作った？」などと楽しそうに話しながら、自分たちが作ったクイズを出し合っている。そして、授業終了後には、クイズの内容に

単元の指導計画

【教科・科目】国語総合 【分野・単元】漢文 【テーマ・作品】『十八史略』「完璧」 【設定時数】全5時間の中の5時間目
 【単元目標】1. 訓読のきまりに注意し、書き下し及び現代語訳ができるようになる。2. 文章全体の内容を把握し、故事成語の由来を理解する。

時数	学習内容	身につけさせたい資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	<ul style="list-style-type: none"> 重要句法、訓読のきまり、単語の確認 本文の書き下し 	<ul style="list-style-type: none"> 句法(受身・使役)・単語の意味を理解する。 既習の知識を活用し、本文を書き下す。 <p>【知識、協働性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> ①本単元の目標の確認。 ②『十八史略』及び当時の中国について確認する。 ③句法(受身・使役)、及び語句の確認。 ④ペアで協力して、本文を書き下し文にする。 	<p>【対話的な学び】</p> <ul style="list-style-type: none"> 本文の書き下しは、ペアで協力して完成させる。既習の知識で可能な学習のため、教師からの働きかけは極力控える。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート、行動の観察
2	<ul style="list-style-type: none"> 書き下し、訓読の確認 本文前半部分の現代語訳 	<ul style="list-style-type: none"> 訓読に必要な知識の定着。 訓読のきまりや文脈に注意し、現代語訳ができるようになる。 <p>【知識、思考力、協働性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> ①前時に行った書き下し文を確認。 ②書き下し文を音読し、読みを確認する。 ③グループで協力して、前半部分を現代語訳する。 	<p>【対話的な学び】</p> <ul style="list-style-type: none"> 間違ってもよいので、グループで協力して現代語訳に挑ませる。 進捗状況が思わしくないグループには、教師が介入しヒントを与える。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート、行動の観察
3	<ul style="list-style-type: none"> 本文後半部分の現代語訳 内容の確認 	<ul style="list-style-type: none"> 訓読のきまりや文脈に注意し、現代語訳ができるようになる。 「完璧」の内容及び故事成語の由来を理解する。 <p>【知識、思考力、協働性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> ①グループで協力して、後半部分を現代語訳する。 ②現代語訳を発表し、現代語訳及び文章全体の内容を確認する。 	<p>【対話的な学び】</p> <ul style="list-style-type: none"> 間違ってもよいので、グループで協力して現代語訳に挑ませる。 進捗状況が思わしくないグループには、教師が介入しヒントを与える。 <p>【深い学び】</p> <ul style="list-style-type: none"> 本時までの学習内容を振り返り、学習の深化を図る土台を固めさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート、行動の観察
4	<ul style="list-style-type: none"> 「完璧」に関するクイズの作成 	<ul style="list-style-type: none"> 主体的にクイズを作成し、前時までの学習内容の活用及び深化を図ろうとする。 <p>【知識、思考力、判断力、主体性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> ①前時までの学習を振り返る。 ②本単元に関するクイズを個人で考え、付箋紙に記入する。 	<p>【主体的な学び】</p> <ul style="list-style-type: none"> 前時までの学習内容の確認を生徒自身で行わせる。 前時までの学習内容で生じた疑問や気になる点、興味を持った点などを中心に、書籍やインターネットを活用して答えを導かせる。 <p>【深い学び】</p> <ul style="list-style-type: none"> 教科書に記載されている内容のみにとらわれず、自身が興味・関心を持った事柄について自由に学習させる。ただし、クイズの内容が拡大しすぎているか、クイズの内容の妥当性についても吟味するように指示する。 	<ul style="list-style-type: none"> 行動の観察
5	<ul style="list-style-type: none"> 「完璧」に関するクイズ まとめ 	<ul style="list-style-type: none"> グループで協力して、積極的にクイズに参加することができる。 訓読のきまりや語句の意味、故事成語の由来を理解する。 <p>【知識、表現力、主体性、協働性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> ①前時に作成したクイズをグループで共有し、クイズの選定を行う。 ②1グループずつクイズを出し、ほかのグループはその答えを話し合う。 ③本単元の振り返り及び自己評価を行う。 	<p>【主体的な学び】</p> <ul style="list-style-type: none"> 積極的にクイズに参加できるよう、ゲーム性を持たせた展開とする。 <p>【対話的な学び】</p> <ul style="list-style-type: none"> 前時に個別に学習した内容を共有するツールとして付箋紙を使用。作成したクイズを付箋紙に記入させ、グループで共有・整理させる。 <p>【深い学び】</p> <ul style="list-style-type: none"> グループ内でのクイズの共有や、クイズを通して、学習内容の深化を図る。 自己評価用紙の記入を通し、本単元学習においての自己の学習を振り返らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己評価用紙、作問(付箋紙)、行動の観察

*津覇先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。

生徒の声

玉城莉里さん クイズを作るために、教科書や参考書などいろいろな調べます。語句の意味や故事成語の由来などの周辺知識も自然に頭に入ってくるので、クイズ作りを通して興味・関心の幅が広がりました。グループワークが楽しみで、クイズの授業の時は前向きに自習に取り組みようにもなりました。

大城千空さん 入学当初は間違っ
てはいけないという緊張から、グループワークでもなかなか発言でき
ませんでした。「間違ってもいいよ」という津
覇先生の励ましを受ける中で、自信を持って発
言することができるようになりました。これか
らは、クラス全体の発表の場でも積極的に発言
できるように頑張りたいと思います。

ついで話を続ける生徒も多いと言う。いずれもAL導入前はほとんど見られなかった光景だ。また、実力テストでは古文の成績が向上しているなど、学力面の成果も表れ始めている。

今後の課題は、生徒の活動をさらに増やすことだと、津覇先生は語る。

「基礎・基本の内容については私が解説していますが、自分が話し過ぎだと感じています。理想は、今以上に生徒の活動を増やし、深い思考と知識の定着を両立させる授業です。単元計画を一層綿密に組み立て、良質の資料を用意するなど、事前準備をしっかりと行っていきたいと考えています」

東京都・私立富士見丘中学校高校

グローバル人材の育成

日本人教師とネイティブ教師の連携で英語力を鍛え、探究学習で国際性を高める

変革のステップ

背景と課題

- グローバル社会で求められる英語4技能の育成に向け、40年以上続けてきた英語教育を拡充する
- 文部科学省のSGH(*1)の指定を受け、それまで行ってきた国際理解教育での探究学習を発展させる

実践内容

- **スピーキング、ライティングの指導を強化** ネイティブ講師と1対1のオンライン英会話の練習を週1回、30分間実施。週末課題に英語の日記やエッセイを課し、ネイティブ教師と日本人教師の両方で添削
- **海外フィールドワークを取り入れた探究学習** 「災害」「経済」「環境」をテーマに、持続可能な地球社会の実現に向けた課題を設定して探究。海外フィールドワークでは、英語での討論・発表なども実施

成果と展望

- 英語の資格・検定試験のスコアが伸び、中学3年次で全国の高校3年次のスコアの平均値以上に
- SGH甲子園(*2)や全国高校教育模擬国連大会(*3)の出場など、発表の場を求めて生徒が積極的に外に出るように

PROFILE



教育理念に「『グローバル・コンピテンシー』を育てる」を掲げ、英語4技能の育成、探究学習、国際交流等を推進。海外大学進学にも力を入れる。2015年度から、文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」指定校。

設立	1940(昭和15)年
形態	全日制/普通科/女子
生徒数	中学校1学年約40人、高校1学年約100人

2018年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、東京外国語大、富山大などに3人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、津田塾大、早稲田大などに延べ216人が合格。海外大には、ロンドン大学キングスカレッジ(イギリス)、トロント大(カナダ)クイーンズランド大(オーストラリア)などに延べ13人が合格。

住所	〒151-0073 東京都渋谷区笹塚3-19-9
電話	03-3376-1481
Web site	http://www.fujimigaoka.ac.jp/

SGH指定を機に、英語教育と探究学習の深化を図る

東京都・私立富士見丘中学校高校は、教育理念に「『グローバル・コンピテンシー』を育てる」を掲げる、中高一貫の女子校だ。46年前の春季休業中にイギリス短期留学をスタートさせ、その後も海外留学制度の拡充、海外修学旅行の実施、ネイティブ教師の採用・増員など、英語教育や国際理解教育に力を入れてきた。吉田晋校長はその思いを次のように語る。

「留学先や研修先での活動は、ホームステイや学校交流を中心としています。日本と異なる環境に身を置き、現地の人と交流して、英語は心と心をつなぐコミュニケーションツール

*1 文部科学省のスーパーグローバルハイスクール。 *2 全国のSGH指定校・SGHアソシエイト校が集まって行われる課題研究発表会。2018年は3月24日に関西学院大学にて開催された。 *3 実際の国連における会議と同様に、参加者が各国の大使の役を務め、議論、交渉を行い、決議を採択する大会。2018年は8月6、7日に東京で開催された。



東京都・私立富士見丘中学校高校
Kristofer Kent クリスターファー・ケント
 教職歴23年。同校に赴任して11年目。英会
 話科主任。[Language, Learning, and Life
 go hand in hand for us all.]

東京都・私立富士見丘中学校高校
町田寛未 まちだ ひろみ
 教職歴21年。同校に赴任して21年目。英語
 科主任。「生徒が自分の長所を伸ばし、自己
 実現するためのサポートに全力を注ぐ」

東京都・私立富士見丘中学校高校教頭
白鷺訓彦 はくおう くにひこ
 教職歴33年。同校に赴任して33年目。「知
 徳体のバランスの取れた生徒を育てる」

学校法人富士見丘学園理事長
 東京都・私立富士見丘中学校高校校長
吉田晋 よしだ すすむ
 教職歴40年。同校に赴任して40年目。日本
 私立中学高等学校連合会会長。

ルであることを学べるよう努めてきました」
 国際理解教育では、社会的な環境保護への関
 心の高まりとともに、地球と人類の共生や環
 境問題についての探究学習も取り入れるようにな
 った。2000年度の校舍改築時には、発電
 量が分かる太陽光発電パネルを設置し、また、
 校内のトイレトペーパーは学校で出た古紙の
 再生紙とするなど、生徒が環境問題を身近に考
 えられるようにしてきた。

そうした中、15年度、SGHの指定を受けた。
 「本校が英語教育や国際理解教育で育成し
 てきた、コミュニケーション能力や社会問題
 に対する関心・教養などは、次期学習指導要

領において育成が求められている資質・能力
 です。SGHの指定は、本校の教育活動をさ
 らに発展させ、生徒の資質・能力を一層高め
 るチャンスになると考えました」(吉田校長)

オンライン英会話の学習効果が 振り返りシートでさらに高まる

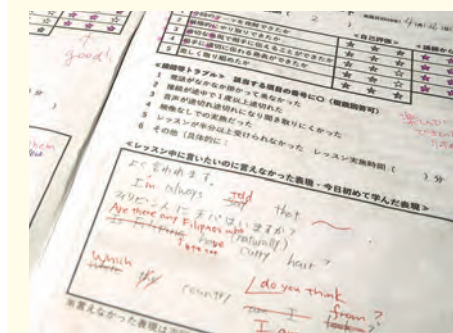
英語教育でまず強化したのは、スピーキング
 とライティングの指導だ。生徒の英語4技能を
 客観的に把握しようと受検した「GTEC」で、
 その2技能のスコアに課題が見られたからだ。
 ネイティブ教師の授業は週2回あり、日本人教
 師の授業も英語の活動を中心に進めているが、
 発言するのは英語が得意な生徒が多く、すべて
 の生徒が英語を使う場面をつくる必要があった。
 そこで、17年度、中学2年次〜高校1年次で、
 「Online Speaking Training」(以下、OST。
 *4)を週1回導入した。すると、前期の終わ
 り頃には、以前は発言が少なかった生徒が、普
 段の英語の授業でもよく発言するようになった。
 OSTでは、ヘッドセットをつけてネイティ
 ブ講師と対話をするため、ほかの生徒に自分の
 英語を聞かれる心配はない。そのため、英語が
 苦手な生徒も積極的に話し、学習を積み上げて
 自信をつけられるのだ。英語科主任の町田寛未
 先生は、OSTの効果を次のように語る。

「生徒は最初、ネイティブ講師の発言を理
 解できずにいましたが、それが聞き取れる
 ようになると、英語で答えられ、聞き取った

表現も身につく、どんどん話せるようになって
 きました。リスニングはスピーキングに
 とっても重要だと、生徒は実感していました」
 18年度は振り返りシートを開発した。それ
 は、授業終了後、ネイティブ講師に英語で言え
 なかったことを日本語で書いておき、翌週の授
 業までに自分で調べたり、教師に質問したりし
 て、英語で表現できるようにするという取り組
 みで、自己評価と他者評価の差を把握させ、メ
 タ認知を図るのがねらいだ(図1)。英会話科主
 任のKristofer Kent先生は、こう説明する。

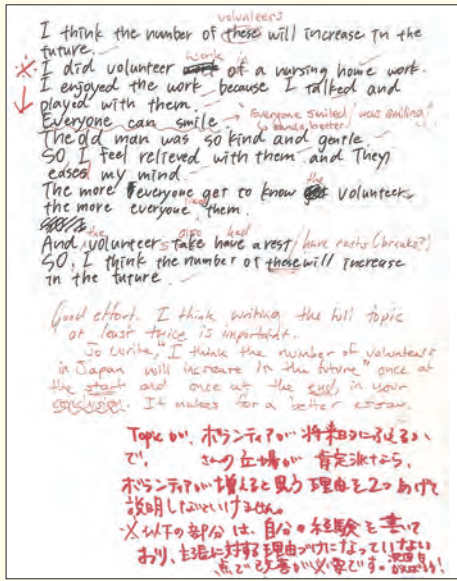
「英語で話す場さえあれば、スピーキング
 力が高まるというわけではありません。言え
 なかったことを放置せず、きちんと復習する
 ことが、英語の表現力を豊かにしていきます」
 週1回30分間でも、予習や復習の効果が大き
 いと、町田先生は実感している。

図1 「Online Speaking 振り返りシート」



振り返りシートには、自己評価や講師からの評価、
 初めて学んだ表現だけでなく、言いたかったのに言
 えなかった表現を書き込む。そして、その表現を調
 べて英語で書いてから、担当教師に提出。教師は
 英文をチェックし、必要に応じて添削して返却する。

*4 ベネッセが提供するサービスの1つで、インターネットのテレビ電話を使って、ネイティブスピーカーと1対1での英会話練習ができるサービス。



ネイティブ教師の添削内容を理解するのが難しい生徒には、日本人教師が説明を加える。
*学校資料をそのまま掲載

日本人教師とネイティブ教師が連携し、徹底的に鍛える

「OSTのレッスンの最後にある講師とのフリートークを、生徒は毎回とても楽しみにしています。自分の伝えたいことを考え、音読の練習をするといった自主学習が高い英語力につながっています」

ライティングの指導では、中学1年次〜高校2年次に、週末課題としてエッセイライティングを導入した。年度当初にネイティブ教師が英作文の書き方を指導。中学1・2年次は日記、中学3年次からは与えられたトピックについて書き、いずれもネイティブ教師が添削し、日本人教師が補足説明などを加えて返却する(図2)。連続性ある指導ができるよう、ネイティブ教師がどの生徒のエッセイを添削するのは固定

で決め、同じような間違いを繰り返している生徒は、日本人教師が個別に指導するようにしている。また、添削の内容は、生徒の英語力に応じて変えている。例えば、中学生の低学年では、文法事項を細かく指摘せず、自己表現に意識を向けさせる。一方、高学年や英語力が高いコースの生徒には、正確さに加え、適切な表現かどうかも指摘する。Kent先生は次のように語る。

「添削の観点は、論理的であるかどうかです。自分の立場を明確にし、考えが伝わる文であれば、論拠が欠けても、きれいな英文でなくてもよいと、生徒に伝えています」

そういった方針は、町田先生とKent先生が相談して決めている。同校の英語科担当は、日本人教師8人、ネイティブ教師6人。職員室は同じで、教科会以外にも頻繁に打ち合わせを行う。Kent先生は両者の連携が大切だと語る。

「外国人と対話するために、英語をツールとして使える力を身につけることは、これからの社会でも重要です。その力を育むために、日本人の先生と私たちの指導が連動していることが大切です。ライティングの添削などは大変ですが、英語がどんどん上手になっていく生徒の姿を目のあたりにすると、指導にも一層力が入ります」

指導改善の一方、基礎・基本の定着を図る従来の指導も重視する。

持続可能な社会とは何か？ 世界に触れる機会を交えて考える

「その他、リーディング力を高めるための『Extensive Reading(辞書を使わない洋書多読の授業)』も行っていきます。その一方で、従来から継続している週3回の単語テストで基礎力強化を図るなど、日常的な努力による基礎学力の積み重ねも大切に行っています」(町田先生)

学んだ英語力を実践的に使う場となり、これからの社会で求められる資質・能力を育む場の中心となるのが、SGHにおける探究学習だ。

高校1年次の必修科目「サステイナビリティ基礎」でサステイナビリティ(持続可能性)にかかわる社会の課題を理解し、探究学習に必要なスキルを習得する。その上で、高校2年次の選択科目「サステイナビリティ演習」では、「サステイナビリティから創造するグローバル社会」をテーマに、海外フィールドワークを中心とした探究学習を進める(図3)。いずれも探究の視点は、「災害と地域社会」「開発経済と人間」「環境とライフスタイル」の3つだ。白鷺訓彦(はくろくみひこ)教頭は次のように説明する。

「本校が以前から取り組んできたテーマ『地球と人類の共生』を発展させて、3つの視点を設定しました。課題意識を持ち、世界の人々と手を携えて問題解決に努力を惜しまない女性を育てることが目標です」

図3 SGHのプログラムの概要

目的 サステナビリティの視点を有し、課題解決に向け、海外の人々と協働的な活動を行う上でリーダーシップが発揮できる人材を育成する

高校2年次「サステナビリティ演習」 (選択科目)

自身の関心に応じて3つのテーマに分かれ、その中で4~5人のグループとなり、大学との連携により探究を深める。海外フィールドワークでは、現地での英語によるプレゼンテーションも実施。最後は各自、英語で論文を執筆する。

<p>「災害と地域社会」 主に地震災害や防災について考える。日本と同じく地震が多い台湾でフィールドワークを行い、現地の高校生と意見交換、プレゼンテーションを行う。</p>	<p>「開発経済と人間」 現地の大学と連携し、シンガポールの観光政策、資源政策、経済発展などについて、日本との比較研究を行う。現地での取材内容も踏まえて、発表資料を作り、現地でのプレゼンテーションを行う。</p>	<p>「環境とライフスタイル」 持続可能な低炭素社会、環境問題の解決策を考える。マレーシア・イスカンダル開発地域でのフィールドワークで、温室効果ガス削減におけるマレーシアの環境施策と課題を調べ、現地の高校と交流授業などを行う。</p>
--	---	--

高校1年次「サステナビリティ基礎」
(必修科目:「総合的な学習の時間」)

視点「災害と地域社会」「開発経済と人間」「環境とライフスタイル」

- 教師のチーム・ティーチングによる教科横断型授業
教師の関心を基に問いを設定。例えば、「日本人の災害観」「貧困の様々な見方」などについて、データや体験談、意見交換を通じて考えを深める。
- 慶應義塾大学との共同グローバルワークショップ (年8回)
大学院生・海外留学生とともに、グローバル規模の課題を自分たちで探し、解決に向けたディスカッションやリサーチなどを行う。海外に住む学生とICTを使って話し合う場もある。
- 岩手県釜石市フィールドワーク (1泊2日)
3つの視点ごとにグループになり、それぞれの視点で被災地の復興事業を学ぶ。
- レポート作成、研究発表
それぞれの活動を通して、生徒個々が考えたサステナビリティをまとめ、提言する。

*学校資料を基に編集部で作成

探究学習の特徴の1つは、全教師が一体となって進めていることだ。例えば、「サステナビリティ基礎」では、教科横断で教師がチームをつくり担当する。各自が持つ関心や知識を基に生徒に問いかけ、生徒がそれについて考え、発言・提案していく。

「専門分野の指導でないからこそ、教師は生徒と一緒に考えられ、専門が違う教師同士がチームを組むことで、生徒に多様な視点を投げかけることができ、生徒の考えが深まっています」(吉田校長)

大学と連携した活動で、生徒が世界に直接触

れる機会を数多く設けていることも特徴の1つだ。「サステナビリティ基礎」では、多くの海外留学生が所属する大学院とのワークショップのほか、ICTを使って海外に住む大学生とも意見交換をする。そして、3つのテーマで探究学習を行う「サステナビリティ演習」では、台湾、シンガポール、マレーシアの3か所でフィールドワークを実施。英語でプレゼンテーションを行い、最後に英語で論文にまとめる。

「シンガポールでのフィールドワークにおいて、韓国とシンガポールの経済の比較研究を発表したところ、聴衆の多くが韓国からの留

学生であったため、厳しい意見が出されるといった苦い経験もありました。生徒にとつて、海外には多様な立場の人がいることを実感する、またとない機会となりました」(白鷺教頭)

多様な可能性を世界で発揮する生徒を育てていきたい

SGHを契機にした指導改善により、生徒の英語力は一層伸びている。「GTEC」では、中学3年次のライティングのスコアの平均値が、全国の高校3年次のスコアの平均値以上だった。また、「SGH甲子園」や「全国高校教育模範国連大会」、各種コンクールに生徒たちが出場するなど、学外での活躍も目覚ましい。

今後の課題は、それらの取り組みを学校の教育活動の柱として定着させることだ。

「SGHの指定期間終了後も持続可能な教育活動として定着させるために、負荷が増えすぎないよう、ほかの教育活動との調整も検討していきます」(白鷺教頭)

同校は海外大学への推薦入学制度を有するなど、多様な進路を支援しており、18年度は延べ13人が海外大学に合格した。吉田校長は、グローバル人材育成への思いをこう語る。

「生徒には多様な可能性があり、それをより広い世界で発揮してほしいと考えています。そのために、使える英語力と深い教養、思考力、そして世界に目を向け、社会の課題に真摯に向き合う姿勢を育んでいきます」

高知県・高知市立高知商業高校

主体的な進路意識の醸成

生徒に高い目標を抱かせる
指導を学校全体で推進し、
自己実現に挑む意欲を育む

変革のステップ

背景と課題

- 4年制大学への進学を目指す生徒が増える中、希望進路に応じた進路指導に課題があった

実践内容

- 教師間の目線合わせを徹底** 学校経営ビジョンや重点教育計画を策定し、さらに、学校が育成を目指す資質・能力を「市商（*1）マネジメント力」として整理し、教師間の目線合わせをしっかりと行う
- 「国公立大学対策講座」の開設** 国公立大学への進学を志望する3年生を対象にした「国公立大学対策講座」を開設し、高い目標を抱く生徒同士が刺激し合える環境を整備
- 特別活動で成功体験を積ませる** 特別活動を通して、生徒に「やればできる」という自信をつけさせ、高い目標に挑戦しようとする進路意識を醸成

成果と展望

- 自分の進みたい道を選択する生徒が目立つようになり、国公立大学進学者も増加
- 教科指導・進路指導と特別活動の有機的つながりを強化することが、今後の課題

PROFILE



旧制・高知市簡易商業学校として開校。校是に「報本反始（ほうほんはんし）」を掲げる。「経済人として信頼と信用を得ることができる能力」「国際人としての視野」を備え、地域の産業・文化に貢献する人材の育成を目指している。

設立	1898（明治31）年
形態	全日制・定時制／総合マネジメント科・社会マネジメント科・情報マネジメント科・スポーツマネジメント科／共学
生徒数	1学年約280人
2018年度進路実績（現役のみ）	国公立大は、筑波大、岡山大、高知大、高知県立大などに27人が合格。私立大は、同志社大、立命館大などに延べ113人が合格。短大、専門学校進学91人。就職45人。
住所	〒780-0947 高知県高知市大谷6
電話	088-844-0267
Web site	http://www.kochinet.ed.jp/kochisho-h/

「進学にも就職にも強い学校」を目指し、全校体制で指導改善を図る

高知県・高知市立高知商業高校は、4学科から成る学校だ。1990年代に始まった地域の経済不況の影響により、高卒者の就職が厳しくなっていく中、同校では次第に4年制大学への進学を目指す生徒が増加し始め、生徒の多様な志望に応じた指導体制を整えることが課題となっていた。また、生徒が自信を持ち、本当に進みたい道を選択できるよう、後押しも必要だった。そこで、学校が一丸となり、進路意識の醸成や学力向上を中心とする指導改善を図ることとした。岡崎伸二校長は、次のように語る。

「社会の変化とともに、学校に求められる

*1 同校の略称。

教育は変わります。本校では、地域社会における即戦力の養成に従来通り力を入れながら、上級学校への進学を視野に入れた指導も充実させることにしました。そうして、生徒一人ひとりが希望進路を実現できる『進学にも就職にも強い学校』をつくり、地域に一層



岡崎伸一 おかざき しんじ
高知県・高知市立高知商業高校校長
教職歴37年。同校に赴任して38年目。「すべて親心で」（初代校長）生徒に向かい、校是「報本反始」「馳程万里」の精神での学校経営

安岡孝浩 やすおか たかひろ
高知県・高知市立高知商業高校
教職歴20年。同校に赴任して13年目。進路指導部長。「我が子ならばどう手助けするか？」と常に自問しながら、進路指導を行いたい

成瀬孝治 なるせ こうじ
高知県・高知市立高知商業高校
教職歴21年。同校に赴任して22年目。特別活動指導部長。「諦めが限界を生む。時には猪突猛進で」

西岡秀和 にしおか ひでかず
高知県・高知市立高知商業高校
教職歴18年。同校に赴任して14年目。進路指導部長。「若いうちの苦労は買ってでもせよ」生徒とともに成長を続ける教師でありたい

安岡浩二 やすおか こうじ
高知県・高知市立高知商業高校
教職歴14年。同校に赴任して7年目。進路指導部長。総合マネジメント科特進コース長。「物事の背景に目を向けられる生徒を育てたい」

森本堅祐 もりもと けんすけ
高知県・高知市立高知商業高校
教職歴13年。同校に赴任して9年目。進路指導部長。総合マネジメント科特進コース主任。「生徒にとっての最善を考え、接していきたい」

貢献しようと考えました」

学校経営ビジョンを明確化し、 教師・生徒の目線合わせを徹底

最初に取り組んだのは、目指す学校像の共有だ。管理職と進路指導部長・教務部長・商業科長で構成される「学校づくり企画会議」を設置し、年度ごとに「学校経営ビジョン」「重点教育計画」を策定（図1）。学科・コース・校務分掌・教科会ごとに重点教育計画に基づいた指導方針を立て、カリキュラム・マネジメントを推進する体制を整えた。現在では、それらに加えて、「課題発見・課題解決力」「察する力」「失敗から学ぶ力」といった生徒に育みたい6つの資質・能力を整理した「市商マネジメント力」も打ち出し、あらゆる教育活動の指針として位置づけている。「市商マネジメント力」は生徒一人ひとりにも根づいており、生徒自らが部活動の応援などで「市商マネジメント力」6番！（*2）と入れ込むほどだという。

進路指導部では、進路指導・教科指導の方針の統一を図り、まずは全学科で同じ模擬試験を定期的実施することにした。そのねらいを、進路指導部の安岡浩二先生は次のように話す。

「生徒の基礎学力の定着度を把握し、普通高校と同じ意識で指導できるよう、一般教科・科目の到達目標は『模擬試験の偏差値50以上』と設定しました。具体的な数値を示せば、各教科担当の教師はその達成を自分事と

して捉えやすくなり、指導改善につながるという思いもありました」

学科間の連携強化にも力を入れ、全学科の学年主任を進路指導部の所属とした。そして、生徒の進路選択が具体化していく2年次の2月以降は、進路指導部の全教師と各学級担任が定期的に集まる「進路検討会」を行うことにした。毎回、生徒一人ひとりについて、評定や模擬試験の成績の推移、希望進路などを確認して指導方針を話し合い、担任の個別指導に反映させる。進路指導部長の安岡孝浩先生は、こう語る。

「安全志向になりがちな生徒にも、目標を高く設定し、挑戦してほしいと思っています。進路検討会の重要な目的は、そうした指導方針を共有し、全学科に浸透させることです。また、第1志望の実現が難しくなった場合も想定し、生徒一人ひとりが納得する進路指導を意識しています」

図1 高知商業高校の目指す学校像

- ◎2018年度学校経営ビジョン
 - 教職員全員が同じ方向を向く時、相乗効果が波及効果が生まれ、生徒が変わる
- ◎2018年度重点教育計画
 - ①ビジネスマナー教育の徹底
 - ②基礎学力向上
 - ③市商マネジメント力の育成
 - ④学びに向かう力の育成
- ◎市商マネジメント力
 - ①コミュニケーション力
 - ②課題発見・課題解決力
 - ③プレゼンテーション力
 - ④ICT活用力&英語活用・表現力
 - ⑤察する力
 - ⑥失敗から学ぶ力

* 学校資料を基に編集部で作成

* 2 6番とは、図1の「市商マネジメント力」の⑥「失敗から学ぶ力」を指す。

同じ目標を抱く生徒を集め、最後まで頑張る意欲を高める

進路意識の向上を目指した取り組みには、2つの柱を設けている。

1つは、国公立大学を志望する全学科の3年生を対象に、4〜12月まで行う「国公立大学対策講座」だ。一般入試や推薦・AO入試の流れを説明し、短期・長期両方の学習計画を考えさせたり、学習意欲を高められるよう、大学の教員や地域の社会人を講師として招き、出前講座をしてもらったりする。ほかにも、推薦・AO入試での進学を目指す生徒には、管理職を含む全教師が分担し、面接対策や志望理由書作成のための指導を行う。その取り組みを企画した進路指導部の西岡秀和先生は、次のように述べる。

「国公立大学進学という目標を共有する生徒が集まれば、互いに刺激を受け合えると思いい、そうした機会を定期的に設け、最後まで頑張ろうとする意欲的な集団をつくりたいと考えました。『国公立大学対策講座』に参加する生徒は次第に増え、2018年度は100人を超えました。進路選択に前向きになる生徒が増えるにつれて、全学科の先生方からの協力が一層得やすくなっています」

もう1つは、希望進路を実現した3年生が1・2年生の教室に向き、その進路を選んだ理由、大学受験や就職活動の体験談などを語る「ようこそ先輩」だ。

「進路決定に至るまでの不安や迷いを具体的に挙げながら、『それでも、自分の力を信じて、やりたいことに挑戦してよかった』と述べる3年生が目立ちます。そうして自己実現を果たした3年生の話を聞けば、1・2年生は『自分も頑張ろう』と感じるでしょう。主体的な進路選択への意識づけになると考えています」（西岡先生）

指導のポイントを全教師が共有し、組織的に学力向上対策を推進

学力向上対策としては、日々の授業を充実させられるよう、全学科で指導改善を図っている。その1つが、「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れたアウトプット中心の授業だ。各教科・科目でグループ学習やプレゼンテーションなど力を入れている。記述を通じた振り返りも重視し、生徒が自己評価をしやすいよう、各授業における評価規準は板書などで明示している。18年度からは、振り返りを始める目安として、授業終了の5分前に予鈴を鳴らすことにした。そうした学校全体で大切にしている指導のポイントは「授業スタンダード」にまとめ（図2）、全教室に掲示している。

一方で、学科・コース独自の取り組みもある。例えば、国公立大学を志望する生徒が多い総合マネジメント科特進コースでは、毎朝10分間の朝学習の時間を設定し、「Class」（*3）で配信する小テストに取り組みさせている。また、同

図2 授業スタンダード（抜粋）

授業規律スタンダード

- 授業者1分前着
- 号令「起立・礼・着席」
- 机の上の教材以外の物を片づけさせる など

授業実践スタンダード

- 本時の生徒の到達目標（具体的なアウトプット）を板書などで明示
- プロセス（発言の質や量などの行動目標）評価の規準を板書などで明示
- ワーク中、積極的にプロセス評価（対話的な学びの促進）を行う
- 振り返り
 - プロセス評価のまとめを行う
 - 板書した本時の生徒の到達目標を振り返る など

* 学校資料を基に編集部で作成

コースでは、18年度の1年生から「大学入学共通テスト」への対応も検討中だ。同コース主任の森本堅祐先生は、自身が担当する地理歴史・公民科の方針についてこう話す。

「同テストの試行調査の問題を見ると、語句から文を選んだり、複数の資料を比較・分析したりする問題が増え、読解力がより求められる傾向にあると思います。そこで、国語科や商業科と連携した授業を考えています」

特別活動における成功体験で、自信を深める生徒たち

同校の指導改善の推進には、生徒会活動や学校行事といった特別活動の支えも大きい。

同校では、ラオスにおける学校建設を支援する国際協力活動を生徒会主体で行うなど、特別活動が伝統的に盛んであり、「市商祭」（文化祭）

* 3 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

では、毎年、クラスやグループごとに模擬店やダンスのパフォーマンスといった趣向を凝らした企画を行う。特別活動指導部長の成瀬孝治先生は、次のように語る。

「生徒一人ひとりが、クラスメートと力を合わせながら、出し物を練り上げます。思うようにいかないことがあっても、最後まで粘り強く取り組む生徒が目立ちます。そうした経験を積む中で、どの生徒も『やればできる』という自信をつけていくようです」

17年度の市商祭からは、同校が運賃を負担し、路面電車での来校者を増やすという取り組み「電車でも市商祭へGO!」を、地域の鉄道会社やデパートと連携して行っている。それは、来校者用の駐車場の不足という問題を解決するため、生徒会役員やクラス評議員らが自ら立案した企画だ。市商祭の約1か月前からは、PR活動の一環として、イルミネーションを施した路面電車も運行してもらった（写真）。

「そのアイデアが地域で評判になり、17年度の来校者は例年の約1.5倍になりました。盛況を目のあたりにして、生徒は『高校生でも地域や大人を動かせるのだ』と感じたようです。そうした感動が自分の可能性に目を向けるきっかけとなり、積極的にやりたいことに挑戦しようという意欲につながっていると

思います」（成瀬先生）
市商祭や合唱大会といった大規模行事では、各学科の3年生のリーダーが行事の準備・練習



写真 地域の大学や企業と連携する特別活動の企画では、外部との交渉は基本的にすべて生徒が行う。市商祭の「電車でも市商祭へGO!」のPR方法も、生徒が予算も含め総合的に判断しながら鉄道会社と話し合い、路面電車にイルミネーションを施してもらうことにした。

期間中に集まり、毎日の活動を振り返る「リーダー会」を放課後に行う。そこで準備・練習の課題を洗い出し、それを翌日に改善するための計画を「PDCAサイクルシート」に書く。また、生徒会では、自分たちの活動の内容について、市内の全公立中学校の生徒会役員が集まるイベントなど、校外の様々な場で発表する。そうした取り組みの中で得た学びは、日々の授業にも反映されているという。

「行事のリーダーや生徒会役員は、特別活動での経験を生かし、授業で自分の考えを整理して述べ、的確な振り返りを行います。そうした姿から、ほかのクラスメートは刺激を受けるようです。当初は控えめでも、次第に前向きに取り組むようになる生徒が少なくありません。特別活動に意欲的に取り組む生徒が『核』となり、学校全体によい影響を及ぼ

していると感じます」（安岡孝浩先生）
**地域に貢献できる人材育成を
目指し、指導改善を続ける**

一連の取り組みの成果は、進路実績に結びつき、毎年20人以上が国立大学に進学するようになった。高い目標に挑戦しようとする意識の向上は、前述した「国立大学対策講座」に参加する生徒が100人を超えたことからもうかがえる。ほかの進路を選ぶ生徒も、自分のやりたいことに向き合い、結論を出しているという。

「以前と最も大きく異なると感じるのは、卒業式での生徒の表情です。堂々としている生徒が多く、自分で決めた進路への期待感と『3年間、力いっぱい取り組んだ』といった達成感が伝わってきます」（安岡孝浩先生）
そうした生徒の変化を見て、指導改善をさらに進めようとする教師が全学科で増えている。18年度の学校経営ビジョンにうたわれた「相乗効果と波及効果」が、実現していると言える。

今後は、教科指導・進路指導と特別活動のつながりを強めていきたいと、岡崎校長は話す。
「高校卒業後、いったん県外に出た生徒にも、いずれは故郷に帰ってきてほしいと思っています。そこで、地域をテーマにした探究学習と特別活動を融合させるなど、生徒の地域への関心をより高める取り組みを充実させようと計画中です。そうして、地域に貢献できる人材を育てていきたいと考えています」

自校の指導ツールを他校の教師とともに検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。今回は、模擬試験の個人成績表を活用して、その後の学習へとつなげていく「模擬試験振り返りシート」のあり方について検討する。

Before

広島県・広島市立舟入高校
赤尾 元先生提供

「模擬試験自己分析シート」

課題

- 1 できたこと、できなかったことを踏まえて、次の模擬試験までに自分はどんなことに取り組むべきかについて考える自己分析が、表面的な内容にとどまっている生徒がいる
- 2 次の模擬試験までに取り組むべきことが具体的に書けても、それを実際の行動に移せない生徒がいる

検討メンバー



ツール提供者

広島県・
広島市立舟入高校

赤尾 元

あかお・はじめ



千葉県立君津高校

小山和紀

こやま・かずき

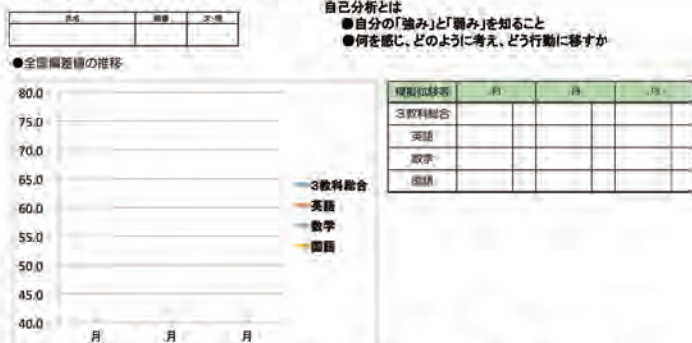


兵庫県立北条高校

衣川顕子

きぬがわ・あきこ

〇〇模擬試験 月 自己分析シート



- 月の模擬試験の結果を受けて自分が「できている分野」、「できていない分野×」、それぞれの「原因」を分析してみよう
(裏面のSTEP3設問別成績も参考にしてみてください)
- ～目標に近づくために～「何」を「いつ」取り組むのか、月の模擬試験に向けた対策を考えよう。

	月の模擬試験を終えて	月の模擬試験に向けて				
英語	<p>目標: ○</p> <p>×</p> <p>月模擬試験出口()</p>	<p>目標:</p> <table border="1"> <tr> <th>計画</th> <th>具体的な方策</th> </tr> <tr> <td></td> <td></td> </tr> </table>	計画	具体的な方策		
計画	具体的な方策					
数学	<p>目標: ○</p> <p>×</p> <p>月模擬試験出口()</p>	<p>目標:</p> <table border="1"> <tr> <th>計画</th> <th>具体的な方策</th> </tr> <tr> <td></td> <td></td> </tr> </table>	計画	具体的な方策		
計画	具体的な方策					
国語	<p>目標: ○</p> <p>×</p> <p>月模擬試験出口()</p>	<p>目標:</p> <table border="1"> <tr> <th>計画</th> <th>具体的な方策</th> </tr> <tr> <td></td> <td></td> </tr> </table>	計画	具体的な方策		
計画	具体的な方策					

広島県・広島市立舟入高校の赤尾 元先生は、1、2年生の模擬試験の受験後、その結果に一喜一憂することなく、次の学習につなげさせるための振り返りを重視している。

振り返り時に活用する自己分析シートでは、各教科・科目のできたところ、できなかったところを整理させているが、「古文の文法ができなかった」「単語を覚えていなかった」など、振り返りの内容が表面的で、「次の模擬試験までに何にどう取り組むのか」が十分に考えられていない生徒も散見されるといふ。また、自分が掲げた計画に沿って、具体的な学習行動を持続させるための仕かけの必要性も感じている。

学習行動の改善につながる
模擬試験の振り返りが必要

1、2年生 模擬試験振り返りシート

After

改良ポイント

1 肯定的に自身の学習を振り返らせる

今回の模擬試験の結果を見て、できなかったところや不足していた点ではなく、よかった点とその理由を振り返らせた上で、改善すべき点を考えさせる。

2 学習方法や学習内容を教師が具体的に例示する

各教科担任が今回の模擬試験を振り返り、今後、取り組むべき学習内容や、心がけたい学習方法を例示し、学力向上のための適切な学習行動を持続させる。



1年〇〇月模擬試験 振り返りシート

1年 組 番 氏名

1 今回の模擬試験の得点を確認しよう。

教科	得点		
	7月	11月	1月
英語	30	40	
数学	40	45	
国語	75	56	

2 今回の模擬試験を振り返り、よかった点・今後取り組むべきことを書こう。

	①よかった点を書こう (どのようによかったのか、その理由まで書こう。よかった勉強法なども書いてみよう)	②一番振り返りをした 大問(分野)もしくは、 問題を書き出してみよう	③②の振り返りを踏まえた 勉強をするために、右 の「オススメ勉強法」を 見て、どれに取り組むか を書いてみよう(自分に合 う勉強法がない場合は、 自分に合った勉強法を書 いてみよう)	次 回 の 目 標 得 点
英語				
数学				
国語				

◎各教科の先生からのオススメ勉強法。自分の振り返り内容に合った勉強法を選び、実行しよう

		オススメ勉強法
英語	単語	• 学校指定の単語帳を、チェックをつけながら音読。各単元 50 回制覇する
	長文読解	• スラッシュを入れながら長文を読む。読み終えたらスラッシュの位置が正しいかどうかをチェックする • スラッシュを入れた長文を音読。CDがあれば音声にかぶせて一緒に読むと、リスニング力も身につく
	その他	• 教科書の CD を流しながら、文字を見ずに耳からイン、口からアウト、頭の中で和訳する (リスニング、読解力、並べ替え対策として)
数学	間違えた問題を、右の手順で解き直す	①まず、できなかった問題を「解き方が分からなかった」「公式を覚えていなかった」「計算を間違えた」の原因別に分類する ②次に、 • 解き方が分からなかった問題は、解答解説を見ながら解答の流れを理解する • 公式を覚えていなかった問題は、その公式を確認し、教科書の練習問題を解く • 計算を間違えた問題は、間違えた箇所を確認し、もう一度解く。解くことができたなら、次回、同じ計算が出てきた時に気をつけるポイント (因数分解、展開、移項、代入に気をつける、など) を書く ③最後に、時間を意識しながら、間違えた問題を繰り返し解き、問題集等で類似問題を何度も解く。解くことができたなら、次回の模擬試験等で、同じような問題が出てきた時、解くために大切であると思うこととそう思う理由を書く
	大問1 (評論)	好きな新書10ページ程度を最後まで読み通す (文章持久力をつける)
国語	大問2 (小説)	正解の構文や解答要素を研究し、自身の心情表現を増やす
	大問3 (古文)	文法事項のヌケモレを問題の中でチェック
	大問4 (漢文)	失点にかかわった句形の例文を10回声に出して読む。書き下す。白文で読む

「何が、なぜ、できたのか」「今日から何をやるのか」を問う

各教科・科目のどの分野ができなかったのかは、生徒が語るまでもなく、模擬試験の個人成績表によって明らかになっている。生徒が語るべきは、「どのような学習によって、どのような成果が得られたのか」という振り返りと、「どのような目標に向けて、どのような学習に取り組むのか」という見通しだ。

そこで、「振り返りシート」と改称もした改訂後のシートでは、「何が、なぜ、できたのか」を語らせることにした。その上で、教師のアドバイスを参考に、具体的な学習内容や学習方法について考えさせることで、学力向上と学習行動には強い結びつきがあることを生徒により意識させられるようにした。

次ページでは、3人の先生方の検討の様子をダイジェストで紹介!



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け → 生徒指導・進路指導ツール集」をご覧ください。

1、2年生 模擬試験振り返りシート

学習の道標となる助言を 振り返りシートに盛り込む

模擬試験を学力向上のきっかけとするためには、その結果を分析し、これまでの学習を振り返って、今後の学習の見通しを立てることが必要である。そして、模擬試験の成績は日々の授業や家庭学習における取り組み状況が反映されたものであることをしっかりと理解させることが重要である。今回の検討会では、模擬試験の結果と日々の授業や家庭学習を「よかったこと」という視点で結びつけることから、シートの改訂の議論が進められた。

次の模擬試験に向けて生徒に求められるのは、目標達成のための学習方法



活用の流れ

- 1 学年団で行われる模擬試験の結果検討会などで、今回の結果を踏まえた今後の教科別の学習方法を共有
- 2 模擬試験振り返りシートに「オススメ勉強法」を掲載し、生徒に個人成績表と一緒に配布する
- 3 模擬試験振り返りシートを担当が回収し、記入内容を基に生徒の学習をサポートする

の立案とその実行である。だが、1、2年生は自分に合った学習方法が身につけていないことも多く、地道な学習が学力向上に結びつかない生徒もいる。そのような生徒には、次の模擬試験までに確実に理解しておきたい単元や問題を教科・科目ごとに伝え、その生徒に合った学習方法で取り组ませることが重要である。そこで検討会では、学習方法を立案する上でのヒントを、各教科担任から提供してもらい、それをシートに掲載するという案を採用した。特に学力中・下位層の生徒については、「この学習を進めれば、次の模擬試験でばん回できるはず」といった前向きな状態を模擬試験の振り返り時につくることが重要だという認識で一致した。

検討メンバーの先生に、自身の指導観や自校の生徒特性を踏まえて、ツールの活用方法や留意点などをお話いただきました

前向きな振り返りには生徒同士をつなぐ可能性がある

広島県・広島市立舟入高校 赤尾 元 あかお・はじめ



今回の検討会で私が学んだのは、「このように勉強したから、これができるようになった」と前向きに振り返る視点の大切さです。本校の生徒は、勉強に対してよい意味でのプライドを持っていますが、それ故、振り返りでは「できなかったところ」ばかりに目が向きがちです。また、「何ができなかったのか」は言えても、「なぜ、できなかったのか」までは分析ができていないため、学習方法の改善に結びつきにくかったように思います。「これをやったからできるようになった」という視点を持つことで、「何をすれば、何ができるようになるか」といった見通しを持てるという気づきをえました。

改善したシートを活用する際、生徒をグループに分けて、今後取り組む学習内容を共有するような作業を取り入れてみたいと思います。前向きな振り返りと見通しを共有することで、よい影響を与え合う関係づくりを促したいです。振り返りシートという一見個人的なツールが、生徒同士をつなぐツールに発展すればうれしいです。

赤尾先生プロフィール 教職歴3年。同校に赴任して2年目。進路指導部・理科(生物)担当。「努力を促す立場の者が努力する姿を見せないでどうする」という言葉を忘れず、日々全力疾走

学校プロフィール 全日制/普通科(普通コース、国際コミュニケーションコース)/共学/1学年約360人/2018年度入試合格実績(現役のみ)/国公立大は、東京大、京都大、大阪大、広島大などに199人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大などに延べ375人が合格。

質の高い振り返りとはどのようなものを理解させる

千葉県立君津高校 小山和紀 こやま・かずき



模擬試験の個人成績表を基に振り返りをさせると、できなかった単元や分野を挙げるばかりで、「どうすればできるようになるのか」と、日々の学習に結びつけた見通しを立てるのが苦手な生徒がいます。そうした生徒には、日々の授業を通して、振り返りの力を育むことが大切です。私は担当の数学で、その日の授業の内容が理解できたかどうか、授業では能動的に活動できたかどうかという2つの観点で振り返りをさせ、どうすればもっとうまくいくかを書かせるようになっています。「なぜ、うまくいかなかったのか」ではなく、「どうすればうまくいくのか」と授業の度に聞くことで、生徒は少しずつ「こうしてみようと思う」と、今後の学習行動を前向きに語れるようになります。

プラス思考の振り返りができるようにするにはある程度時間がかかりますが、生徒に変化が見えた時は、ほかの生徒の学習方法などを例示して、「真似をしてみては？」などと働きかけ、成長を促すチャンスとして生かしていきたいです。

小山先生プロフィール 教職歴18年。同校に赴任して8年目。数学科担当。「いつも『謙虚』に『感謝』の気持ちを持って、先生方や生徒と接することを心がける」

学校プロフィール 全日制/普通科/共学/1学年約280人/2018年度入試合格実績(現役のみ)/国公立大は、千葉大、静岡大、愛媛大、千葉県立保健医療大などに8人が合格。私立大は、青山学院大、駒澤大、芝浦工業大、日本大、法政大、明治学院大などに延べ294人が合格。

自己分析する力を生徒に育む丁寧な啓発を

兵庫県立北条高校 衣川顕子 きぬがわ・あきこ



模擬試験の振り返りを行う時、成績がわずかでも上がった教科・科目について、特に丁寧に振り返らせるようにしています。何をしたらから成績が上がったのかを生徒に尋ね、「もっと続けてみよう」「ほかにもできそうなことはない？」と励まします。学習に自信のない生徒にこそ、まずはよいところに目を向けさせたいです。そして、教師間での振り返りも、具体的であるべきです。自分たちの指導のどこに課題があるから生徒はその成績なのか、生徒が学力を向上させるために私たちが行動に移すべきことは何かを具体的に語れば、おのずと授業も変わっていくはず。改訂したシートの「オスメ勉強法」は、私たちにとって日々の指導の再確認の機会にもなるでしょう。

これからの生徒には、自己分析する力がますます求められています。しかし、そうした力は自然と育つものではありません。生徒が「自分のことを変えていきたい」と自己を理解し、行動できるよう啓発を続けていきたいと思っています。

衣川先生プロフィール 教職歴30年。同校に赴任して6年目。人間創造コース委員長。英語科担当。「生徒のやる気を起こさせる着火剤を目指し燃焼系教師でありたい」

学校プロフィール 全日制/普通科、人間創造コース/共学/1学年約160人/2018年度入試合格実績(現役のみ)/国公立大は、静岡大、岡山大、兵庫県立大などに12人が合格。私立大は、京都産業大、関西大、近畿大、関西学院大などに延べ159人が合格。

改良したいのに、どうすべきか分からない……

指導ツールを募集しています!

「改良! 指導ツール ビフォーアフター」では、取材にご協力いただける先生及び取材で検討させていただく「指導ツール」を募集しています。「自校で長年使っているツールを見直したい」「ツールのより効果的な活用法を検討したい」といった、課題意識をお持ちの先生方のご応募をお待ちしております。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、必要事項①~④をご入力の上、指導ツールを添付して下記のe-mailアドレスにご送信ください。

※送信前に一度、生徒情報が削除されているかご確認をお願いいたします

- ①学校名・お名前
- ②分掌・ご教職歴
- ③ツールの内容(目的・活用時期・活用方法)
- ④ツールに対する課題意識、改善要望

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「改良! 指導ツール ビフォーアフター」のツール募集でご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口(0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時~21時)にて承ります。(株)ベネッセコーポレーション CPO(個人情報保護最高責任者) 上記をご承諾くださる方はご送信ください。



ブドウ栽培からワイン醸造までを 実践的に学び、ワインの専門家を育成

山梨大学 生命環境学部 地域食物科学科 ワイン科学特別コース

大学の農場でブドウの栽培から行い、 1年かけてワイン作りを経験

「ワインは農作物」とも言われ、ブドウの品質がワインの味を左右します。栽培段階から不要な枝を切り、実や花を大きくするための摘心^{てきしん}などの作業も、実践しながら学びました。(北村さん)



大学施設の地下にワインセラーがあり、 ワインの発酵や熟成を行う

発酵中は、味に渋みを出すブドウの皮や種の成分が行きわたるよう、朝晩2回、樽をかき混ぜる必要があります。そうした一手間がよい味につながると思い、毎日セラーに通いました。(鶴田さん)

自分たちで作ったワインを 最終授業でテイスティングします

「ワイン製造科学実習」では、チームで1つのワインを作ります。ねらった味にできているかどうか、最終授業で試飲します。他チームのワインも飲み比べ、相互に批評し合いました。(鶴田さん)



その実習に備え、1・2年次には、「ワイン科学Ⅰ・Ⅱ」を履修し、ブドウの栽培、ワインの製造、成分や文化などに関する基礎知識を学ぶ。2・3年次には、専門知識と実践的な技術を学ぶため、「インターンシッ

ク」を通じて、山梨大学生命環境学部地域食物科学科には、ワインについて学べる、日本で数少ないワイン科学特別コースが設置されている。同コースが柱としている科目が、3年次に履修する「ブドウ栽培学実習」と「ワイン製造科学実習」だ。学生がブドウ栽培からワイン醸造まで（*）を手がける。

専門知識と実践的な技術を 学ぶカリキュラム



地域食物科学科
ワイン科学特別コース4年
鶴田 一樹
つるた かつき
東京都立多摩科学技術高校卒業。高校で酵母の研究をしていた。



地域食物科学科
ワイン科学特別コース3年
北村 梨
きたむら り
岐阜県立大垣北高校卒業。食品開発の仕事に興味があり、同コースに入学。

*ワインの大まかな製造工程（赤ワインの例）：〈1〉ブドウ収穫〈2〉除梗（茎取り）・破砕（実を潰す）〈3〉発酵（酵母によるアルコールの発生）〈4〉圧搾（皮・種を取り除く）〈5〉濾引き（微細な固形物の澱を除きワインを分離）〈6〉熟成（長時間放置して味にうまみを出す）

「ワイン科学ゼミⅠ・Ⅱ」といった科目が設置されている。

3年生の北村葉さんは、「ワイン科学ゼミⅡ」でワインのテイスティングのトレーニングを行ったことが、ワインの味を評価する上での基礎になったという。

「味の基本となる5味（甘味・塩味・酸味・苦味・うま味）をどの程度、認知できるのかをテストしました。人によって認知できる味の範囲が異なることが興味深かったです」

4年生の鶴田一樹さんは、2か所のワイナリーでインターンシップをした経験が実習で役立つと話す。

「ワイナリーごとに、ワイン作りで重視する点が異なり、勉強になりました。例えば、工場の清潔さにとり、品質を保つことに注力するところもあれば、健康なブドウだけを選別することにこだわるところもありました。仕込みを手伝いながら、自分はどうな手法でワインを作りたいかイメージを膨らませました」

理想のワインを目指し、醸造の手法を学生自ら考える

3年次にはいよいよワイン作りの実習が始まる。「ブドウ栽培学実習」

では大学の農場でブドウを育て、「ワイン製造科学実習」ではそのブドウを使って4人程度から成るチームごとにワインを仕込む。北村さんは、この秋、ワインの仕込みを終えたばかりだ。

「メンバーと話し合い、飲みやすく渋みの少ないワインを目指すことにしました。その理想の味を出すために、味に渋みをもたらす皮と種を発酵途中で半分減らす手法を採りました。また、味の違いを比べるために、2つの樽を用意し、天然酵母と培養酵母の異なる酵母を入れて今は熟成中です」（北村さん）

実習でできたワインは、最終授業で試飲会を行い、互いに批評し合う。「私たちは、種を除いて軽い飲み口のワインを目指していました。途中の試飲では、まずまずのできだと思っていました。最終的には思いの外、軽い飲み口になってしまいました。ねらった味を出す難しさを感じました。ほかのチームは違う仕込み方法でワインを作っていたため、同じブドウでも味が異なり、とても勉強になりました」（鶴田さん）

少人数でワイン製造過程を学ばせるのは、国内のワイナリーの多くが、

ブドウの栽培から製造、販売までを一貫して手がける小規模事業だからだ。同コースでは販売以外のプロセスを経験させ、様々な現場で活用できる実践力を育成している。

企業と共同研究を行い、ワインの製品化も経験

4年次には、発酵微生物工学、機能成分学、果実遺伝子工学のいずれかの研究室に入り、専門的な学びを深める。鶴田さんは、発酵学を専門とする柳田藤寿教授の指導の下、企業との共同研究に取り組んでいる。

「山梨県しづさき市しづさきの食品メーカーと共同で、しづさき市の自然環境から適した酵母を分離し、それを用いたワインの製品化を目指して研究をしています。商品開発の経験が豊富な先生からのアドバイスで、消費者がひきつけられるストリー性のあるワインを開発中です。花や木、川などからワインの酵母としては珍しい200以上の酵母を採集し、様々な試験を繰り返して、4つの酵母に絞り込みました。現在、有力なのは、しづさき市の川から採集した酵母です。大学院に進学し、この研究を続けていく予定です」（鶴田さん）

大学の思い

日本のワイン業界を支える人材を山梨から輩出したい



ワイン科学研究センター
教授
柳田藤寿
やなぎだ・ふじとし

本学には、ワインを専門とする日本唯一の教育・研究機関であるワイン科学研究センターがあり、ブドウやワインに関する高度な知識と技術を備えた人材を育成してきました。

近年、日本のワインの消費量は右肩上がり伸び、今後さらなる増加が見込まれています。また、日本のワインの輸出も開始され、国際競争力のあるワイン作りが求められています。

そこで、同センターでは、「ワイン・フロンティアリーダー養成プログラム」という社会人教育を実施しています。修了時の試験に合格すると、大学独自の認定資格「ワイン科学士」も取得できます。このプログラムには修士以上の学生も参加でき、社会人とともに学べます。学部教育ではあまり触れられないワイナリー経営学やブランディング学も学べるカリキュラムを設置し、修了生が日本のワインを世界へ広げてくれることを期待しています。

実際、このコースの卒業生が、ワイナリーを立ち上げるなどしています。これからも日本のワイン業界を支える人材を、山梨から育てていきます。



自然災害・社会災害の最小化を目指し 文理融合で実践的な知識を学ぶ

関西大学 社会安全学部

ゼミの学びを

世界遺産の修復に役立てています

アンコール遺跡にあるバイヨン寺院の石積みの劣化が年々どの程度進むのか、レーザースキャナーを使って計測しました。遺跡に興味のある私は、世界遺産の修復にかかわることができ、学びにも力が入ります。(加藤さん)

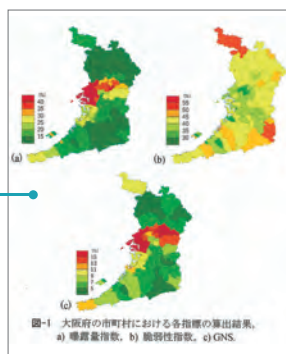


学部内外で研究を発表し、 発表スキルも磨けます

3年次の後期にゼミの中間発表会に参加。ほかのゼミの教授や学生にも聞いてもらうため、分かりやすい発表を心がけました。その経験が学会発表などにも生かされています。(梶谷さん)

大阪府の各市町村の 災害リスク評価を研究中です

地震や津波などの自然災害のリスクを示す「曝露量」と、災害に対する社会や経済の脆さを表す「脆弱性」をかけ合わせ、災害リスク評価を出しています。現在は、地道な計算を根気強く行っています。(梶谷さん)



4年間の学びの土台となる知識を幅広く理解する科目が、1年次必修科目の「社会安全学総論Ⅰ・Ⅱ」だ。前期は学部独自で作成した教科書に基づき、社会安全の基礎知識を学ぶ。後期は、同学部の教員28人全員によるオムニバス形式の授業が行われ、安全・安心を学ぶには、法学や経済学、心理学、教育学、情報学など、

社会が直面する安全上の 問題を多様な視点から学ぶ

関西大学社会安全学部は、安全・安心な社会づくりを学ぶ日本初の学部だ。自然災害や社会災害(事故)



社会安全学部
安全マネジメント学科4年
梶谷 遼和
かじたに・さわ
大阪府・私立追手門学院
中学校・高校卒業。卒業後
は、大学院に進学予定。



社会安全学部
安全マネジメント学科3年
加藤 亨典
かとう・きょうすけ
大阪府・私立関西大倉中
学校・高校卒業。社会貢献
できる学びを求めて入学。

多様なアプローチがあることを理解する。4年生の梶谷袋和さんは、高校時代は理系だったが、心理学にも興味があり、高校の先生に勧められて文理融合の同学部に入学した。

「1年次には、心理学はもちろん、自分の好きな数学が生かせる、地震を分析する授業なども受けました。文理問わず幅広く学ぶ中で、自分がどのような研究をしたいのかをじっくり考えることができました」

3年生の加藤亨典さんも、次のように同科目を振り返る。

「入学前は、漠然と防災や減災について学び、社会に貢献したいと思っていましたが、後期の授業で『地盤災害』を担当された小山倫史准教授が、地盤の研究を遺跡修復に役立っていることを知り、歴史的な建造物を見るのが好きな私は、興味を持ちました」

多様な視点から基礎を学ぶ同科目が、2年次以降の履修の土台になっている。

実習科目を多数設置し、 社会で役立つ実践知を修得

2年次以降は、津波や地震などの自然災害と、事故防止や危機管理に

ついでに社会災害、2つの分野に関する専門科目をいずれも履修する。

知識の実践的な活用を意識させるため、実習が多数取り入れられている。例えば、自動車運転の安全性を体験的に学ぶ「社会安全体験実習」や、統計資料を実際読み解く「統計データ解析実習Ⅰ」などがある。

加藤さんが一番社会を意識したのが「社会安全実践演習」という授業だ。4つのテーマ（*1）から1つを選び、ロールプレイングを行う。

「私は『合意形成』を選びました。『ある町に放射性廃棄物処理場を建設する』と想定し、行政と市民の2チームに分かれ、議論しました。行政側は合意を得るためのプレゼンテーションを市民側に行います。私は市民として、行政に対して質問や反論を行いました。現実にもそのような問題が起こった場合、議論はさらに困難になることが予想されます。専門知識とコミュニケーション力の必要性を実感しました」

危機管理の現場で経験を積み、 将来の道を明確化させる

3年次からのゼミでは、専門分野に分かれ、自然災害や社会災害を最

小化するための課題に向き合う。加藤さんは、地盤・岩盤工学が専門の小山ゼミに入り、カンボジアのアンコール遺跡の保存・修復のための作業を行った。

「ゼミ生が毎年同地を訪れ、石積みでのレーザ計測を行い、劣化・変状が進行しているかをチェックしています。高校時代は文系だったので、データ解析作業に苦手意識もありましたが、遺跡保護には欠かせない作業なので、先輩に指導していただきながら研究を進めています」

梶谷さんは、同じく小山ゼミで、得意の数学を生かして、GNS（*2）という災害リスク評価について研究中だ。現在、国連大学が国ごとの災害リスクを公表しているが、日本には市町村レベルで災害リスク評価を表したものはまだないという。

「現在は、西日本の市町村の災害リスク評価を算出中です。各自治体が数値を比較し合い、自分たちの町の防災・減災においてどのような対策が必要なのかを考える上で参考にしてもらえ、指標となることを目指しています。大学院に進学し、その指標を活用してもらえよう、研究を続ける予定です」

大学の思い

幅広い知識を融合し、 社会の安全を守る人材を



社会安全学部
准教授
小山倫史
こやま・ともみ

安全・安心に関する問題は広範囲の分野に及ぶため、文理融合型の教育を行っています。ただ、文系の入学者が8割と多いため、専門的な理系分野に進んでも戸惑わないよう、数学やデータ分析などの授業を低学年で充実させています。また、どの災害現場にも「人」の授業が多いのも特徴です。

加えて、防災や危機管理に関する問題は、必ず現場があるため、知識を現場で活用できるように、実習や演習を重視しています。また、学んだことを社会で実践できるように、研究室同士の連携も盛んです。例えば、「土砂災害警戒情報が出ているのに、なぜ人はすぐに避難しないのか」というテーマでは、心理学や教育学、情報学の知恵を借り、どうしたら人が避難しようと思える情報を発信できるのかを考えます。

卒業後は、公務員を始め危機管理にかかわる分野に就職する学生も多いため、どの分野にも危機管理にかかわる人材は求められています。これからも、幅広い専門知識と実践力を備えた人材を育成していきます。

*1 危機管理本部運営、危機管理計画立案、合意形成、クライシスマネジメントの4つ。
*2 Gross National Safety for natural disasters（自然災害リスク指標）の略。

これからの会議・研修のあり方、つくり方

今、学校現場では、次期学習指導要領等に向けて、教師にも、「アクティブ・ラーニング」の視点に基づいた教師同士の日常的な学び合いが求められている。職員会議や教員研修などで、教師集団が知見を結集し、学校をチーム化させる具体策を、現場の声や実践事例を交えて紹介する。

監修 日賀優一

「答えが1つではない問い」を考える高校生向け対話型ワークショップを開催する「三四郎の学校」事務局長。本誌2016年6月号で紹介した長崎県立諫早高校での取り組みを始め、高校教師や社会教育従事者などを対象とした学びの場づくりに携わる。

全国の事例紹介

対話的な会議・研修

学校として育成を目指す資質・能力を検討したり、グローバル化を始めとする社会の変化に対応する教育のあり方を考えたりするため、全国の高校で対話を重視した会議・研修が行われています。今回は、実際に行われた会議・研修の3事例から、思考を拡散させたり、収束させたりする山場となる部分を中心にご紹介します。いずれの会議・研修も、未来の学校や教育のあり方について自由に語り合うもので、学校としての1つの答えをその場で決めるものでは

なかったことが共通点です。そして、語り合うだけで終わるのではなく、未来を見通した上で明日からをどのように過ごしていくのかを考え、具体的な行動へとつなげようとした事例です。なお、実際に行われた会議・研修では、紹介した部分以外に、緊張を解きほぐすためのアイスブレイクが盛り込まれたり、考えたことをさらに深める語り合いの場が後日設けられたりしています。自校の課題を語り合う場をつくる際の参考にいただければ幸いです。

CASE 1 生徒の長所から育てたい生徒像を検討

所要時間 120～150分

会議の大まかな流れ

1. 自校の生徒の長所を洗い出す ▶ 30分

教科・学年が混在した教師4、5人から成るグループで、生徒の強みやよいところを、できるだけ多く出し、全体で共有する

2. 生徒に最も必要な資質・能力を議論 ▶ 30分

生徒を肯定的に捉えた上で、生徒に最も身につけさせたい資質・能力は何かを、グループ内で語り合う

3. 資質・能力と必要な指導を検討 ▶ 30分

一人ひとりが、身につけさせたい資質・能力とその育成のために求められる指導を紙にまとめ、グループ内で発表

4. 教科・学年で語り合いの成果を共有 ▶ 30分

教科団や学年団に分かれて、それまで語り合ってきたことと、自分が取り組みたいと考えていることを共有する

校長を始め全教師が参加し、「これからの学校」を考えた会議です。この学校は、ここ数年、授業も部活動も休みとなる創立記念日の半日を、教師の対話の場として活用してきました。

会議では、誰もが気軽に楽しく語り合えるように、「本校の生徒の強み、よいところ」を、具体的なエピソードを交えて語り合うことからスタートしました。HRや授業、部活動で見た生徒の輝く姿を語り、気持ちを十分に前向きにしてから、「いろいろなよいところを備えている本校の生徒だからこそ、さらに伸ばしたり、改善したりしてあげたいところ」を語り合いました。長所を土台にして短所を語り合うことで、解決策等の見通しも立てやすくなります。

会議の最後では、教科や学年の単位でグループをつくり直しました。その意図は、語り合いの成果を教科や学年の財産として共有し、指導の改善のヒントにしてもらうことにあります。

Point

- ・生徒の長所から語り合うことで、会議自体の雰囲気を知るものに行える
- ・教科や学年で議論する前に、教科・学年を混在させて語り合うことで、思考を拡散させることができる

語り合いの記録には、模造紙とマーカーペンを使用しました。文字が見やすくなり、グループの中での意見共有がスムーズになります。



CASE 2 生徒と教師が社会に必要な資質・能力を語り合う

所要時間 60～90分

研修の大まかな流れ

1. 10年後の社会についてイメージを共有 ▶ 20分

生徒と教師が混在する4、5人から成るグループ内で、10年後の社会はどのような社会で、どんな資質・能力が求められるのかを語り合う

2. 社会に必要な資質・能力を育む方法を考える ▶ 20分

これからの社会で求められる資質・能力を育むためには、高校(教員)生活をどのように過ごせばよいのか、生徒と教師がそれぞれの立場で考えを述べる

3. 必ずできる小さな一歩を宣言する ▶ 20分

生徒と教師が「これからの社会で求められる資質・能力」と「その資質・能力を身につける(育む)ために、必ずできる小さな一歩」を考え、宣言する

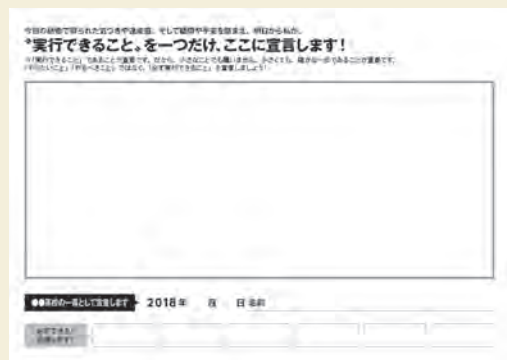
Point

- ・生徒と教師が語り合うことで、より多様な価値観が生まれる場となる
- ・生徒と教師が高校生活・教員生活における決意を共有し、それぞれの行動変容を促す

育成を目指す資質・能力を考える教員研修を開催し、そこに生徒も参加させた事例です。「これからの学校を話し合うのであれば、未来を生きる生徒の声も聞きたい」という教務主任の発案で、生徒会役員を中心に十数人の生徒の参加が実現しました。

これからの社会をイメージした上で、「求められる資質・能力は何か」「その育成のためにはどんな高校(教員)生活を送るべきか」を生徒と教師が同じテーブルで語り合いました。その上で、生徒、教師がそれぞれの立場で、これから自分ができること、変わるべきことを考え、宣言しました。参加した生徒から、「先生と初めてじっくり話ができた」と喜びの声が多く上がりました。

語り合いの最後に、「必ずできる小さな一歩」を宣言しました。グループの中で承認し合うことで、変化・変容のモチベーションを高め合いました。



CASE 3 学校の重点目標を具体化、個別化する

所要時間 90～120分

会議の大まかな流れ

1. グローバル社会に必要な資質・能力を議論 ▶ 30分

教科や学年を混在させた教師4、5人から成るグループ内で、自校が考える「グローバル社会に必要な資質・能力」を議論する

2. 高校の諸活動と結びつける ▶ 30分

グローバル社会で活躍する人材に育つのは、高校生活のどのような場面で、どのような行動ができる生徒なのかを考える

3. グローバル化させる仕掛けを検討 ▶ 30分

グローバル社会で活躍する人材を育成するために、学校にどのような場を意図的につくっていくのかを語り合う

Point

- ・学校の重点目標として共有されているキーワードを改めて議論し、深める
- ・語り合いの成果をプロジェクトチームなどが引き継ぎ、さらに議論を深める

学校の重点目標として掲げる「グローバル教育の充実」が、一部の教科や学年の課題にとどまっているという問題意識から、全教師が集まって、「グローバル教育」について改めて語り合う場が設けられました。

会議では、教科や学年を混在させたグループでグローバル社会で求められる資質・能力を語り合いましたが、「保健体育などの実技教科はグローバル教育の基点になる」「HRや部活動にグローバル教育の観点を取り入れたい」など、日々の指導と結びつけた意見が多く出ました。それらの意見を集約して、グローバル教育を推進する部局が、教科や学年を横断したグローバル教育の指針を打ち出し、校内に発信していくことになりました。

グローバル社会で活躍する人材像をイメージした上で、それを学校の諸活動と結びつけていくためのワークシートを使用しました。

2030年を生きるグローバル人材

①「大学、社会で〇〇なときに、〇〇な場面で」できる人

②「授業、部活、行事で〇〇なときに、〇〇な場面で」できる人

都教委の挑戦

第2回

学力向上策

多様な学校を有する東京都の取り組みを紹介する本コーナー。第2回のテーマは、学力向上策だ。2019年度から「高校生のための学びの基礎診断」の利活用が始まるが、東京都では2012年度から、学校全体での組織的な教科指導を支援し、生徒の学習の質を高めることで、学力向上に結びつけている。その成果と課題を受け、新しい施策もスタートさせた。

教育委員会の
施策

学校全体での組織的な指導に向けて「学力スタンダード」を設定し、指導と評価の一体化を促す

教育の質保証として
全生徒に基礎学力をつける

東京都教育委員会は、2012年度「都立高校改革推進計画・第一次実施計画」において、「社会的自立の基盤となる力の確立」を掲げ、改革の方向性として「学校の設置目的に応じた学力の向上」を示し、具体策として「都立高校学力スタンダード」をスタートさせた。その背景の1つ

師間で指導方針を共有するとともに、到達目標や進度を統一して、効果的に指導できるよう、「都立高校学力スタンダード」を策定しました

入試での誤答を分析して
新入生の学力を把握

「都立高校学力スタンダード」は、学習指導要領の項目・内容ごとに、生徒が習得すべき学力の具体的な目標を示したものだ。それを基に、各校が自校の生徒の学力等を踏まえて学校独自の「学力スタンダード」を設定し、学校全体で組織的な指導と評価を進めていく(図1上)。東京都では、この「都立高校学力スタンダード」



東京都教育庁指導部
高等学校教育指導課長
佐藤 聖一 さとう・せいいち
東京都教育庁指導部主任指導主
事、東京都教職員研修センター
企画部企画課長等を経て、現職。

「下」を9教科22科目作成。6教科については「発展」「応用」「基礎」の3段階とし、各校が設置目的や生徒の学力に応じて選べるようにした。

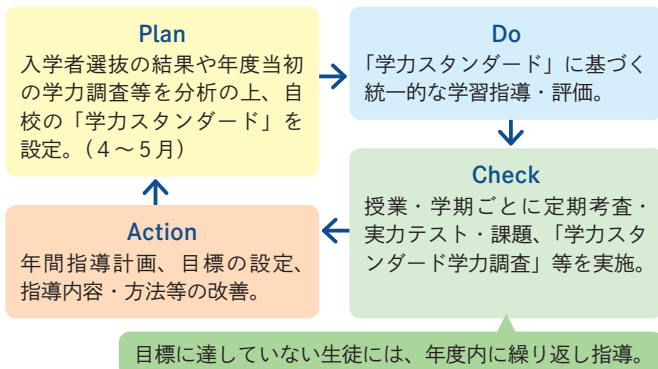
「各校の『学力スタンダード』の設定では、学力を適切に把握することが重要です。特に、新入生の学力を詳細に把握できるよう、高校入試終了後、都教育委員会が速やかに入試の各小問のねらいを解説した冊子を作成して各校に送り、各校において入学者の入試における誤答分析をす

には、11年度「都立高校の現状把握に関する調査」において、「授業の内容を十分に理解している」に「そう思う」を「多少そう思う」と回答した生徒が合わせて約4割だったことが挙げられる。指導部高等学校教育指導課の佐藤聖一課長は、次のように語る。

「教育の質保証の観点から、すべての生徒に基礎学力の定着を図ることが課題でした。各校が学校の設置目的に合った学力の育成に向けて、教

図1 「都立高校学力スタンダード」概要と成果

■「学力スタンダード」に基づく指導と評価の一体化



■「都立高校学力スタンダード」設定科目

国語総合、現代文B、数学Ⅰ、数学Ⅱ、コミュニケーション英語Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅱ、世界史A、世界史B、日本史A、日本史B、地理A、地理B、現代社会、倫理、政治・経済、物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎、農業と環境、工業技術基礎、ビジネス基礎

■実施校のアンケート調査結果

	導入前 (2012年度)	導入後 (2016年度)
生徒の学習状況、指導内容、指導方法等の共有	68.8	100.0
授業進度の統一	65.6	94.6
定期考査での統一問題の作成	59.4	88.3

*東京都教育庁提供資料を基に編集部で作成

図2 新たな学力向上事業

事業名	実施規模	概要
学力向上 研究校 (校内寺子屋 事業)	2016～17年度 10校 2018～19年度 30校	外部人材を活用し、義務教育段階の学力の定着が十分でない生徒の学習を支援。 ・各校への指導主事等の派遣 ・外部人材への謝金(報償費) ・教材費の支援 ・外部模試費用の支援
ゆめナビ プロジェクト 研究校	2017～19年度 10校	基礎学力の定着を重視する都立高校において、生徒が明確な目標を持ち、学力を向上させ、進路実現に努力できるように支援。 ・企業・NPO法人との連携をコーディネート ・指導資料「東京リ・スタディ」の作成、配布 ・オンライン個別学習支援 ・成果検証のための外部模試費用の支援

*東京都教育庁提供資料を基に編集部で作成

るよう伝えていきます」(佐藤課長)

1・2年次における学力の把握については、「学力スタンダード学力調査」を実施している。13～15年度は東京都が問題を作成し、統一日に調査を行い、16年度以降は、東京都作成の標準問題を基に、学校ごとに作成し、実施している。

「最初の3年間、教委内の作問委員会で問題作成した際には、自校で作問ができるよう、各校の先生方にも委員を務めてもらいました」(佐藤課長)

本事業は、14年度からすべての都立高校(進学指導重点校などを除く)で実施されてきた。その結果、各校で組織的な指導が進んだことが明らかに(図1下)、生徒の学習意欲の向上につながる成果も見られた。

一方で、新たな課題も浮かび上がった。「基礎」段階を活用する学校の中には、義務教育段階の学習内容の定着が十分でなく、高校の授業内容を理解できない生徒が一部に見られ、そうした生徒の多くが学業不振から

中途退学をしていることが分かった。

外部とも連携しながら
基礎学力の定着を図る

そこで新たに、16年度から「学力向上研究校(校内寺子屋事業)」を始めた(図2)。それは、「元教師や教師志望の大学生らを活用し、学力下位層の生徒の学習を支援する取り組みだ。そして、17年度から開始した「ゆめナビプロジェクト研究校」は、義

務教育段階の学力はあるものの、高校での学習に苦戦している生徒が、目標を持って学習に取り組めるよう支援する事業である(図2)。キャリア教育やインターンシップの充実のほか、義務教育段階の学習内容を復習しながら高校での学習につなげられるよう、国語・数学・英語の教師用指導資料「東京リ・スタディ」をベネッセと連携して作成し、都立高校と中等教育学校の担当教師全員に配布した。「両事業の指定校では、学力不振による中途退学者がゼロになったり、学力下位層が減少し、中上位層が増加したりする等の大きな成果が得られています。また、生徒の学習意欲を高める取り組みを積極的に取り入れる学校が増えています」(佐藤課長) そのように、組織的な指導体制の強化、学力不振による中途退学者の減少などの成果が出ている一連の学力向上策だが、今後の展開について、佐藤課長は次のように語る。

「新学習指導要領に対応した『都立高校学力スタンダード』の作成を進めるとともに、文部科学省の『高校生のための学びの基礎診断』の位置づけや活用の方針を示していきたく考えています」

学校現場 の 実践

東京都立練馬工業高校

生徒のキャリア意識の醸成と 学力の底上げを図り、 希望進路の実現を支援する

中学校までの学び直しと キャリア教育に力を注ぐ

東京都立練馬工業高校は、都内に6校あるエンカレッジスクール（*1）のうちの1校で、2006年度から指定を受けている。守屋文俊^{ふみとし}統括校長は学校教育目標をこう語る。

「本校では、特に義務教育課程までの学び直しとキャリア教育に力を注ぎ、生徒の希望進路の実現に結びつけることを目指しています」

具体的には、生徒が集中して学べるよう、1年次の国語・数学・英語は30分授業とし、さらに中学校までの学習内容の復習を中心に行う「ベーシックの時間」（50分）を国語・数学・英語で1単位ずつ設けている。そして、国語・数学・英語は、3年間を通して習熟度別少人数授業としている。キャリア教育としては、2年次の2学期に全生徒を対象とした3日間のインターシップを実施。さらに、

希望者は、企業で熟練技術者から実技指導を受ける技能習得型インターシップを、夏季休業中の10日間、受けられる。

同校では現在、そうした様々な取り組みをカリキュラム・マネジメントとして体系化する作業を進めている。その一環として、それぞれの教育活動や教育資源の役割、位置づけを、概念図「練馬工高 Next Stage プロジェクト」にまとめた（図3）。主幹教諭で教務部の上野正幸^{まさゆき}先生は、次のように説明する。

「この概念図は、本校がどのような生徒の育成を目指し、そのためにどのような学びや支援を行っているのかを、中学生でもイメージできるように作り直しました。現在は、学校全体や各教科・科目において、卒業までにどのような資質・能力をどのレベルまで生徒に身につけさせるかという目標設定の作業に、ルーブリックの作成などを通じて取り組んでいます」

図3 「練馬工高 Next Stage プロジェクト」



* 学校資料をそのまま掲載



東京都立練馬工業高校
上野正幸^{まさゆき}
教職歴17年。同校に赴任して12年目。主幹教諭。教務部。



東京都立練馬工業高校
米澤稔邦^{よねざわ とくし}
教職歴28年。同校に赴任して6年目。主幹教諭。教務部主任。



東京都立練馬工業高校
統括校長
守屋文俊^{もりや ふみとし}
教職歴30年。同校に赴任して2年目（通算13年目）。

東京都立練馬工業高校

◎2006年度、東京都からエンカレッジスクールの指定を受ける。生徒は全員がキャリア技術科に入学し、1・2年次は共通の科目を履修、3年次から6系列ある専門系列に分かれる。17年度から「ゆめナビプロジェクト研究校」、18年度から「学力向上研究校（校内寺子屋事業）」の指定校。

◎設立 1963（昭和38）年

◎形態 全日制/キャリア技術科/共学

◎生徒数 1学年約160人

◎2018年度進路実績（現役のみ）

私立大は、尚美学園大、聖学院大、東京電機大（二部）、東京福祉大、東洋学園大、目白大などに10人が合格。専門学校進学38人。就職91人。

◎URL <http://www.rimakogyo-h.metro.tokyo.jp/site/zen/>

* 1 小・中学校で十分に能力を発揮できなかった生徒を対象に、生徒たちの意欲を育み、頑張りを支援し、社会生活を送る上で必要な学力を身につけさせることを目的として、東京都が既存校の中から指定している高校のこと。

社会で必要になる資質能力を 生徒たちに意識させる

同校では、17年度から「ゆめナビプロジェクト研究校」、18年度からは「学力向上研究校（校内寺子屋事業）」の指定も受けている。その2つの事業は、同校が重視する「学び直し」と「キャリア教育」をより充実させていく上で、最適な内容であると捉え、積極的に進めている。

「ゆめナビプロジェクト」と連携して行われる「都立専門高校生の社会的・職業的自立支援プログラム」では、高校生向けのキャリア教育を支援するNPO法人の協力で、1年次の学期に1回、チームワークが求められる課題に取り組むグループワークや、様々な分野で活躍している社会人を招き、生徒が仕事や進路についてインタビューをするといった活動をを行っている（写真）。それらの活動のねらいについて、主幹教諭で教務部主任の米澤稔邦先生はこう語る。

「実際に社会人と話したり、グループワークをしたりする中で、社会に出て、多くの人と協力しながら仕事をしていく際に、どのような力が必要になるのかを、生徒に意識させて

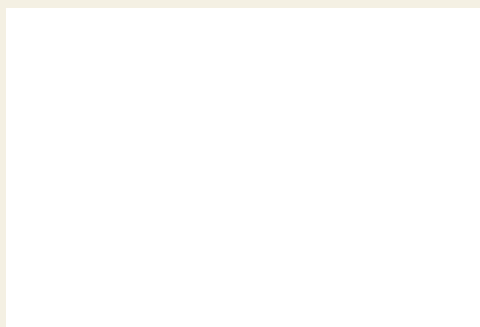


写真 NPO 法人と連携して行った「都立専門高校生の社会的・職業的自立支援プログラム」では、チームでの課題解決を経験するため、ゲーム的な内容から小グループでの発表まで、生徒はグループワークに複数回取り組んだ。

います」

実施に際しては、連携先のNPO法人と事前に綿密な打ち合わせをしている。例えば、ある会社経営者を招いた際には、高校中退後、通信制高校に入り直し、苦労を重ねた自身の体験を基に、高校を中退すると待ち受けている困難や、学ぶことの大切さを語ってもらった。

「本校には、高校で学び続けることに、前向きになれない生徒もいます。そうした生徒の心に響く話をしていただける方に、講演をお願いしています」（米澤先生）

生徒は、1年次にキャリアに対する意識を高めた上で、2年次では同校が以前から実施しているインターン

シップに参加する。同校では130社以上の企業の協力を得ており、生徒はその中から自分が関心のある業種や職種を選んで参加する。

「インターンシップを通じて、将来の進路の目標が見つかった生徒は、その後の学びに向かう姿勢がとも前向きになります。進路目標と学力向上は密接な関係にあると実感しています」（守屋統括校長）

また、「ゆめナビプロジェクト」の一環として、プロジェクトチームが中心となり、生徒一人ひとりの学校生活や学習態度について記した、個人カルテの作成にも取り組んでいる。そして、様々な資料を基に、それぞれの生徒の支援のあり方について学年会で検討する「ケース会議」を学期に1回程度開いている。個人カルテは、特に丁寧な指導が必要な生徒を対象に現時点では作成しているが、今後は全生徒のカルテを作成することを目指している。

個に応じた指導で 学力の底上げを図る

今年度から始まった「校内寺子屋事業」は、GTZ（*2）が「D3」の

1年生を対象に、国語と数学でそれぞれ週に2度ずつ、1回2時間開講している。講師は、国語では、特別支援学校で授業を受け持った経験のある元教師に、数学では、大学で数学の基礎・基本の教授法について研究をしている大学生に依頼している。

「『校内寺子屋』が開かれる時には、本校の教師も必ず参加するようにしていますが、授業を行うのはあくまでも外部の講師です。そのため、外部講師の選定については、慎重に検討しました」（米澤先生）

同校では、1年次に中学校までの復習を行う「ベーシックの時間」を設けているが、「校内寺子屋」では、参加者が少人数であるため、より個に応じた指導が可能となる。毎回必ず出席し、「分かった」と言う頻度が着実に高まっている生徒もいるという。

「『校内寺子屋』によって、基礎学力が定着する生徒が1人でも増えれば、生徒の進路実現の可能性も大きく広がっていきます。現在実施しているのは国語と数学のみですが、今後、英語についても信頼して任せられる講師を見つけ、さらなる充実を図っていきたくと考えています」（守屋統括校長）

* 2 ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」の15段階で評価される。

「リーダー」を育む6か年デザイン

FILE 4

東京都・私立海城中学校

不断の改革で、時代が求める

「新しい学力」「新しい人間力」を育成

建学の精神に立ち返り、
「新しい紳士」の育成を掲げる

海軍兵学校の予備校を前身とする東京都・私立海城中学校が学校改革に着手したのは、約25年前のことだ。例年50人前後の東京大学合格者を輩出していたが、進学後に留年する卒業生も多く、それが校内でも課題が上がっていた。校長特別補佐の中田大成先生は、次のように振り返る。

「大学合格自体が目的になり、大学で学ぶ目的を見失ってしまったことが、留年の要因だと考えられました。本校の建学の精神『国家・社会に有為な人材の育成』に立ち返り、教育活動を見直す必要がありました」
そこで、創立100周年の翌年にあたる1992年、建学の精神に基づき、社会に出て活躍できる人材育成の実現に向けた学校教育目標を、「21世紀に必要なとされる『新しい学力』『新しい人間力』の育成」として教育活動の刷新を図った。

「新しい学力」は、課題を発見し、その解決に向けた情報収集・分析を行い、ソリューション

ションを生み出す「課題設定・解決能力」であり、「新しい人間力」は、共生のための対話的なコミュニケーション能力と、異質な背景を持つ人間同士が協働し、互いに力を引き出しながら新しいものや価値を生み出すコラボレーション能力と定義した。それらの資質・能力の育成に向け、同校は90年代から試行錯誤を重ねてきた。

仲間と力を合わせて行う体験活動
で協働性や当事者意識を育む

「新しい学力」の育成に向けた取り組みの1つは、90年代に始めた「社会科総合学習」だ。それは、中学1～3年次に週2時間、調査・発表を行い、学期に1回、レポートにまとめる探究学習だ。生徒が自分で決めたテーマに沿って、企業や自治体、大学などに自分で連絡して話を聞きに行き、それに文献やインターネットで調べた情報を加えて解決策を提案する。中学3年次には、学習の集大成として、原稿用紙30～50枚の卒業論文を作成する。

「生徒は、『社会科総合学習』を通じて、



東京都・私立海城中学校
中田大成 なたか・たいせい
教職歴34年。同校に赴任して27年目。
校長特別補佐。入試広報室長。

- ◎ 設立 1891（明治24）年
- ◎ 形態 全日制／普通科／男子校
- ◎ 生徒数 1学年約320人
- ◎ 建学の精神 「国家・社会に有為な人材の育成」
- ◎ 2018年度入試合格実績（現浪計） 国立大は、東北大、東京工業大、東京大、一橋大、名古屋大、京大などに188人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ726人が合格。
- ◎ URL <https://www.kaijo.ed.jp/>

自ら学ぶ姿勢を身につけていきます。大学での留年率が大幅に下がるとともに、ゼミで率先して発表し、ディスカッションを主導する卒業生が増えました」（中田先生）

「新しい人間力」の育成では、中学1・2年次のプロジェクトアドベンチャー（以下、PA）と、中学2・3年次のドラマエデュケーション（以下、DE）が中心的な取り組みとなる。PAは、立木や丸太などを使いながら、生徒たちが力を合わせて課題に取り組みプログラムだ（写真）。活動を終える度にメンバーで成功や失敗の要因を話し合い、気づきを獲得する。

「振り返りによって生徒は様々なことに気づき、それが知恵として昇華されていきます。授業や日常生活で似たような場面に遭遇した時に、その知恵を生かして課題を乗り越えることができるでしょう」（中田先生）

次世代リーダーの育成に向け、変革を進める私立中高一貫校を取り上げ、特色ある取り組みを紹介する本シリーズ。最終回は、東京都・私立海城中学高校を紹介する。同校は、大学進学後の留年率の高さを発端として、建学の精神に立ち返り、社会に有為な人材の育成に向けた様々な教育活動に取り組んでいる。



写真 中学2年次のプロジェクトアドベンチャーの様子。下で友人に命綱を支えてもらいながら、恐怖の伴う高所での課題に挑む。そうした活動を通して、信頼に基づいた支援の大切さ、協働して課題を成し遂げる達成感を学ぶ。

DEは、演劇の専門家の指導を受け、生徒が自ら演劇をつくり上げるプログラムだ。例えば、中学2年次には、地域の人々に人生の思い出を聞き、それを基に台本を作成して上演する。生徒はその過程で多様な人があること知り、さらに同じ話を聞いても、人によって受け取り方が違うことに気づく。「DEの活動を通して、人には様々な考えがあることを改めて実感し、互いの価値観を尊重する態度へと結びついています。さらに、PAもDEも、生徒同士で話し合い、力を合わせて取り組む活動が、対話的なコミュニケーション能力の基盤をつくります。そうした経験を経た後の学習や行事では、リーダー、フォロワーにかかわらず、自分事として当事者意識を持って協働的に取り

組むようになります」(中田先生)

eポートフォリオの活用で生徒の気づきを促す

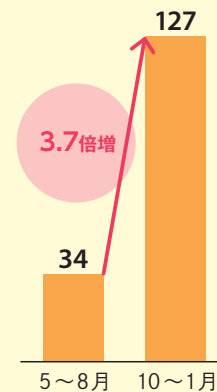
約20年にわたる取り組みをさらに発展させようと、17年度、eポートフォリオによる振り返りを始めた。中学3年生にタブレット端末を持たせ、「Case」(*)を活用して、学習や部活動など、生徒個々にテーマを決め、自由に記録を残させた。その1年間分を分析すると、年度末に向けて、事実・内省を踏まえた具体的な目標・計画が書かれた振り返りが多くなっていき、生徒の主体的な活動が増えていることが分かった(図)。「eポートフォリオで、主体性が数値化され、その伸びが顕著に分かるようになりました。振り返りは、生徒の気づきを生み、よい刺激になっているので、学年を拡大して活用したいと考えています」(中田先生)

同年度には、教師と生徒が特定のテーマについて学び合う自由参加型講座「KSプロジェクト」にも着手した。中学2年次、高校2年次を対象に、理科の実験の動画を海外姉妹校に送り、フィードバックをもらって再実験をして深める講座や、英字新聞「KAIJOTIMES」を発行し、世界に発信する講座などを開催している。

「中学・高校時代に自分の興味・関心を徹底的に掘り下げていく体験が、生涯学び続

図 ポートフォリオの実証結果

■主体的な活動(レベル3~5)の数



ポートフォリオに書かれた振り返りの内容によって、「レベル0 学習とは無関係な内容」から「レベル5 体系化した上で具体的な行動に落とし込む」まで、5段階で評価。レベル3~5を主体的な活動と定義し、期間中のその数を調べた。

* 学校資料を基に編集部で作成。

ける意欲や態度を育むと考えています。また、社会に開かれた学びを追究することは、異質なものを結びつけ、新しい価値を創造する素地を養うことにもつながるでしょう。予測不能の学びに教師が積極的にかかわることで、生徒の潜在能力を引き出していきたいと思えます」(中田先生)

そのようにして育む「新しい学力」「新しい人間力」は、次期学習指導要領で育成が求められている資質・能力と重なり、また、大学入試改革にも十分対応できると、同校は捉えている。

「本校の取り組みはいずれも主体性や対話を重視した学習であり、eポートフォリオは多面的・総合的評価に結びつくものです。今後の大学入試では記述式問題が増えることが予想されますが、それらの学習の積み重ねが生きていくと考えています」(中田先生)

* 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

京都学園大学が2019年4月、「京都先端科学大学」に

グローバルな視野と実践力を持つ 「トンガリ人材」を育てる

京都学園大学は、日本電産株式会社の創業者でもある永守重信理事長の下、社会のニーズに一層応える教育を行う大学へと飛躍するための改革を加速させている。

2019年4月、「京都先端科学大学」に生まれ変わり、20年4月には、世界的に需要が高まっているモーター技術者の育成に力を入れる工学部を新設予定だ。

突出した能力を持つ「トンガリ人材」の育成を目指し、どのような教育の充実を図っていくとしているのか。

同大学の現在とこれからの、19年度、学長に就任予定の前田正史副学長に聞いた。

社会がこぞって 人材を求め、大学を目指す

京都学園大学は、経済経営・健康医療・人文・バイオ環境の4学部を有する総合大学だ。2015年度、亀岡キャンパスに加え、京都太秦^{うずまさ}に新キャンパスを建設して健康医療学部を設置。18年度には、世界有数の総合モーターメーカー、日本電産株式会社の創業者である永守重信氏が理事長に就任し、産業界のニーズに対応すべく教学改革を加速させている。創立50周年を迎える19年度には、「京都先端科学大学」に名称変更し、20年度には工学部を新設する予定だ。

「先端科学」と言うと、理系の大学をイメージするが、同大学においては、「科学」は理系に限らず「学問全般」を、「先端」は「トンガリ」を意味する。世界の先頭を走る大学となり、突出した能力を持って世界を変える人材を育てる。そして、世界中の学生が入学を希望し、社会がこぞって人材を求める大学——そうした大学を目指している(図1)。

改革の背景には、社会のニーズに
応える大学教育をしたいという思い
がある。次期学長に就任予定の前田



京都学園大学副学長
前田正史 まえだ・まさふみ
東京大学理事・副学長等を経て
2018年度から現職。19年度、
学長に就任予定。

正史副学長はこう語る。

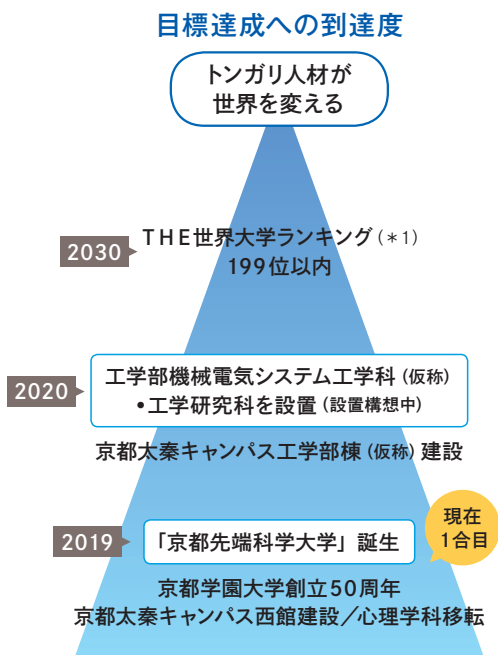
「少子化の中、限られた人的資源を生かしていくためには、産業界のニーズに合った資質・能力を若者に育むことが必要であり、それが社会の活力を生み出すことにもつながります。本学で学び、自信を持って社会に羽ばたいてほしいと考えています」

実践的な英語力を育成 海外インターンシップも実施

同大学が最も力を入れているのは、英語教育改革だ。産業界が求める「使える英語力」を育むため、「ベルリッツ」と提携し、19年度から実践的な英語教育プログラムを行う。入学後、半年間は1時間目に必修科目「英語コミュニケーション」を置き、徹底的に英語力を磨く。最終的には卒業生全員が英語を使える状態を目指す。

そして、「使える体験」の充実も図る。その1つ、海外インターンシップでは、海外43か国にある日本電産の事業所を活用し、3か月〜1年間

図1 京都学園大学の目標と到達度



*大学資料を基に編集部で作成。

図2 工学部の学びの特色

分野	内容
工業数学・物理学を徹底学習	低回生時に専門領域の基盤となる工業数学・物理学の講義と演習を重視し、洞察力を養う。標準的な工学部カリキュラムの1.5倍の時間とする。
実習・演習・PBL型学習に挑戦	個人ワーク(演習)とグループワーク(実習・PBL)に繰り返し取り組み、専門領域の理解と、考察力・実践力を養う。
コースツリーで専門性を育む	制御工学、モーター工学、電池工学、パワーデバイス工学などの専門科目から、ロボット分野、電気自動車分野など、将来の進路に合わせて適切に選択して履修することができる。
電子教材を積極的に活用	学生一人ひとりがパソコンあるいはタブレット端末を使用し、講義・演習・実験・自宅学習で、専門的な科学技術計算ソフトウェアや電子教材を駆使することで、効率的に専門分野の力を養う。
キャップストーンで総仕上げ	3回生と4回生で2回、企業から提示された課題に半年間の時間をかけて取り組む「総合的な経験をする実践的教育プログラム：キャップストーン」を実施。

*大学資料を基に編集部で作成。

「学生には、常に『トングリ人材が世界を変える』を持つことを期待しています。そのためには、自信のあることを一つ一つすることが大切です。そうすれば心に余裕が生まれ、自分を伸ばしたい、苦手な分野に取り組もうという意欲が湧いてくるでしょう。好きなものをとことん追究する楽しみも味わってほしいと思います」(前田副学長)

*1 イギリスの高等教育専門誌『Times Higher Education』が、年1回発表する世界の大学ランキング。「教育」「研究」「被引用論文」「産業界からの収入」「国際性」を評価指標とする。

のインターンシップを行う。「語学学校に数週間通う程度の留学では、異文化理解は十分にできません。中長期の海外インターンシップで、海外でのモノづくりや仕事のあり方、文化や価値観の違いを肌で感じ、その経験を社会で生かしてもらうのがねらいです」(前田副学長)

ほかに、数的処理能力や読解力・表現力、コミュニケーション力を高める教養科目を設置予定だ。実務にも必要なそれらの資質・能力を身につけながら、最終的には、自分自身で「スキルを生み出す力」を備えた人材になってほしいと、前田副学長は語る。「知識・技能の中には、今は通用し

ていても、すぐに古びてしまうものもあります。本学で、多様な学びや経験を通して、自分にたくさん引き出しをつくり、卒業後、働きながら新しい知識・技能を自分で獲得したり、生み出したりする力を身につけてほしいと考えています」

世界で活躍できるモーター技術者を育成

20年度には工学部機械電気システム工学科(仮称)の新設を計画 중이다。その目的は、「産業の米」とも言えるモーターの技術者の育成にある。今後、電気自動車やロボット、ドローン

など、モーターの需要は大幅な拡大が見込まれている。その一方、モーター分野の人材は世界的に不足しており、現場が求める技術者・研究者の育成が急務だ。さらに、小型コンピューター内蔵のモーターの開発も進んでおり、モーター技術者には機械や電気とともに、半導体、通信、材料などの幅広い知識が求められる。同部では、第一線の技術者による授業、協働型プロジェクトにより卒業認定を行う実践重視の教育で、産業界が求める即戦力の育成を目指す(図2)。

学内の学部間連携も図っていくと、前田副学長は語る。

「科学技術の根底には、ヒューマニ

ティーがあります。工場の産業用ロボットも、医療現場で活躍する介護ロボットも、現場では必ず人が介在します。人間の心や身体を理解していなければ、適切な指示を出せず、安全確保も図れません。サイエンスとヒューマニティーの連携により、人に優しい環境をデザインできるのです」

具体的には、健康医療学部との医療マシンの共同開発、人文学部との人間心理を反映させたロボットの研究、経済経営・健康医療学部とのビッグデータの解析による社会保障制度の研究などが想定されている。

また、全学的に外国人留学生を増やす方針だ。工学部では、将来的に学生の半数を外国人留学生にする考えで、外国人教員による英語での授業も開講を予定しており、キャンパスが国際的な雰囲気になると予想される。

「学校組織で取り組む『探究』の指導デザインを考える研究会 ～『探究』の導入による学校改革の可能性～」開催

生徒と教師がともに楽しむ 探究学習の追究を

2018年9月、ベネッセコーポレーション主催による「探究」の指導デザインを考える研究会が開かれた。学校を挙げて探究学習に取り組む首都圏5校の代表者が、自校の実践内容を紹介。さらに、探究学習を通じて生徒に育成したい力や、探究学習に組織的に取り組むためのポイントなどをパネルディスカッション形式で語り合った。当日、400人収容の会場は満員となり、探究学習への関心の高さをうかがわせた。

プログラム

第1部 「探究」の効果と可能性について

- 基調講演「私たちは探究で何をめざすのか？
～生徒の Agency を引き出す学びへ～」
OECD日本イノベーション教育ネットワーク
事務局長 小村俊平
- 実践事例
東京都・私立かえつ有明中・高校 佐野和之先生
お茶の水女子大学文教育学部1年 宇井瑞希さん
東京都・私立広尾学園中学校・高校 木村健太先生
東京都・私立広尾学園中学校・高校3年 後藤愛弓さん

第2部 「探究」の実践例および 「探究」を効果的に進める方法

- 実践事例
東京都・私立三田国際学園中学校・高校 田中 潤先生
埼玉県立大宮高校 畑 文子先生
東京都立八王子東高校 島津 聡先生
- パネルディスカッション
東京都・私立かえつ有明中・高校 佐野和之先生
東京都・私立広尾学園中学校・高校 木村健太先生
東京都・私立三田国際学園中学校・高校 田中 潤先生
埼玉県立大宮高校 畑 文子先生
東京都立八王子東高校 島津 聡先生

「探究」を行う価値と効果について、実践を基に語る。次期学習指導要領の公示を受け、探究学習を学校全体でどのように実践するか、各校での関心が高まっている。そこで、今回の研究会では、生徒や教師にとって探究学習を行う価値や教育的効果について、5校が自校の実践を基に語った。そのうち2校については、卒業生や在校生が登壇。探究学習を通して、自身にどのような成長や変容があったのかを、自分の言葉で伝えた。



安心・安全に語り合える場が、 創造的な探究学習の土台になる

東京都・私立かえつ有明中・高校では、6年間で生徒が身につける資質・能力を、①学び方を学ぶ、②自分軸を確立する、③共に生きるの3つとし、それらの資質・能力を基に、全教科・科目の授業計画を策定している。そして、3つの資質・能力の育成を実践的に図るために設けられた特別教科「プロジェクト科」では、生徒の興味・関心に基づき、高校1年次は個人、高校2年次はチームで探究学習に取り組む。

プロジェクト科では、何をするかという「doing」とともに、自分自身はどうあるのかという「being」を大切にしていると、プロジェクト科を担当する教育統括部長の佐野和之先生は説明する。

「『doing』に意識を向け過ぎると、



東京都・私立かえつ有明中・高校
教育統括部長
佐野和之
さの、かずゆき

卒業生 が学びを振り返る

自ら企画した講演会で「教育」の面白さを知る

お茶の水女子大学文教育学部1年 宇井瑞希さん
(かえつ有明中・高校卒業)

高校1年次の学習目標の1つ、「自分の内面に気づくこと」ができたきっかけは、文化祭で出店したカフェが赤字だった原因をクラス全員で話し合った時のことでした。互いを非難し合っていた私たちに、佐野先生が折り紙を置き、「折り紙は色が1枚1枚違うけれど、この中に特別なもの、優秀なものはあるかな」と問いかけられました。そして、人形を持ち出し、「発言する人はこの人形を持って話をする。ほかの人はその人の話に静かに耳を傾ける」という対話の手法を示しました。そうして一人ひとり話すうちに、自分の思いに気づき、それを話せるようになりました。そして、折り紙のように一人ひとり違うのだと分かったら、互いを認め合う雰囲気生まれました。クラスが率直に思いを話せる安心・安全な場になったのです。2年次は、ヘルシーなラーメンの開発・販売に取り組み、意見の対立がありながらも、それを乗り越えて成功できました。

内面に気づく私個人のきっかけには、中高生と将来について考えるNPOとの出会いが挙げられます。私は高校1年生の時、将来について考えるワークで何も書けませんでした。そのNPOの活動を通して様々な職業について知り、自分の将来を考えられるようになりました。そして、自分の経験を周りにも伝えたいと考え、社会人20人を学校に招く講演会を自ら企画・運営しました。その時、大勢の友人や後輩が「将来を考えるきっかけになった」と目を輝かせて話す姿を見て、中高生が輝く瞬間をつくりたいと思うようになり、教育分野に進む決心をしました。今は、大学で教育学を学びながら、前述のNPOの学生スタッフとして中高生と社会人の橋渡しをしています。



間をつくりたいと思うようになり、教育分野に進む決心をしました。今は、大学で教育学を学びながら、前述のNPOの学生スタッフとして中高生と社会人の橋渡しをしています。

探究活動をうまく進めることを優先しようとするため、本来の興味・関心から離れた選択をしてしまう可能性があります。「Being」を大切にすることで、ネガティブな状態に置き

ても、本当に大切にしたいことに目を向けて、探究活動を進めることができます」
そうした考えに基づき、1年次には自分軸の確立に徹底して取り組む。社会や他者からの期待、常識や経験などによって刷り込まれた思い込みを取り去り、自分が本当に大切にしている思いや感情を自覚して、表現することを目指す。例えば、生徒同士で今の気持ちを洗いざらい話し、

自分の内面を表現したり、偏見を持たず相手の話を聞いたりする活動も、その1つだ。
「自分はどう思われているのか、なぜこの場にいるのかといった不安がある」と、本当の自分を出し切れず、創造的な場をつくることもできません。自分が何を感じたのかを、対話を通じて共有することで、安心・安全な場をつくることも、探究学習で「は大切だと考えます」(佐野先生)

探究学習で学問の楽しさを実感し、興味・関心を広げていく

東京都・私立広尾学園中学校・高校では、各学年に1クラス設置している医進・サイエンスコースで、最先端の研究活動に取り組んでいる。高校1年次の4月に、生徒は自分の興味・関心を掘り下げて、幹細胞、環境化学、現象数理など6つある研究チームのいずれかに所属。指導教官のアドバイスを受けながら、6〜7月までに研究テーマを決めるのを目標に研究活動を開始する。3〜4人で1つのテーマに取り組み、年度末に学会形式の研究成果報告会で発表する。

同コースの研究活動の特徴は、学問の楽しさを最優先にしていることにある。面白いと思える研究テーマを深く掘り下げていき、その過程で出てきた疑問や、研究に必要な隣接



東京都・私立広尾学園中学校・高校 医進・サイエンスコース統括長
木村健太
きむら けんた

在校生が学びを振り返る

研究活動を通して、 文理を超えた学問の楽しさを知る

広尾学園中学校・高校 医進・サイエンスコース3年 後藤愛弓さん

中学3年生の時、先輩の研究成果報告会を見て、その姿に憧れ、医進・サイエンスコースに進みました。

私は、環境化学研究チームが取り組んでいた色素増感太陽電池に興味を持ち、研究を引き継ぎました。研究活動は、とにかく楽しいです。世界で誰もやっていないことに取り組んでいると思うだけでワクワクします。

もちろん、それだけに難しさもあります。研究テーマは単なる興味・関心ではなく、社会のニーズがあり、ある程度実現可能性が高いものでなければなりません。現在、世界でどこまで研究が進んでいるのかを調べるために、学术论文を読まなければなりません。私は英語が苦手な人で、最初はタイトルの意味すら分かりませんでした。それでも、最新の研究を知りたい一心で辞書を片手に読んでいくうちに、英語力を高めたいと思うようになり、英語の勉強にも力を入れるようになりました。さらに、論文を読んでいくと、太陽電池の開発にはオームの法則などの物理の知識が不可欠なことも分かり、物理の授業も頑張るようになりました。それまでは、勉強はやらされるものと、マイナスに捉えていましたが、研究活動を通して初めて、自分から勉強したい、勉強が楽しいと思えるようになりました。

研究の面白さが分かるにつれて、他分野の研究についても知りたくなり、毎週行われる6チーム合同の進捗研究会にも参加し、数学や生物などにも関心が広がっています。大学では分野を超えて学ぶことができる学際的な学部・学科に進みたいと考えています。

分野の知識を手がかりにして、興味・関心の幅を広げていくのだ。例えば、生物が得意な生徒は、細胞培養の過程で試薬の調整のためにモル計算が必要だと分かると、研究に必要な知

識として、化学も頑張って学ぶようになる。同じように、学术论文を読むことを通じて英語力の必要性を、また、発表力を高めるために国語の大切さを実感するという。研究で使う知識と授業で学ぶ内容を結びつけることも、強く意識している。例えば、がん細胞をテーマに研究している生徒には、細胞分裂の仕組みやDNAの複製について学ぶ分野・単元の授業へつなげる。医進・

サイエンスコース統括長の木村健太先生は、そのねらいを次のように説明した。
「生徒が自身の研究と関係する分野に目を向けるようなアドバイスを聞いて、教師が意図的に発して、興味・関心を広げるよう促していくことを大切にしています。そうして研究を通じて知った学問の面白さが、さらに深まることで、苦手な分野にも取り組む意欲が湧いてくるのです」

実践事例3

東京都・私立三田国際学園中学校・高校

6年一貫で12のコンピテンシーを育成

東京都・私立三田国際学園中学校・高校では、探究学習を通して、リーダーシップ・問題解決能力・探究心・創造性・共創・コミュニケーション・社会参画・責任感・率先・革新性・異文化理解・生産性の12の資質・能力の育成を目指している。「社会の変化から逃げるのではなく、それに適応して楽しめる力をも身につけさせたい」と、田中潤教頭は語る。

それらの資質・能力は21世紀スキル (Recognition・Logical Thinking・Creative Thinking) を横軸、開校以来の理念である「知好楽」(Know・Act・Custom) を縦軸としたルーブリックで測る。

同校の探究学習は、課題設定・情報収集を行い、仮説を立てて検証し結論に導くタイプと、課題についてフィールドワークを行い、課題解決を実践するタイプがある。担当教官



東京都・私立三田国際学園中学校・高校 教頭
田中潤
たなか・じゅん

実践事例4

埼玉県立大宮高校

言語活動を核とした探究的な取り組み

の指導を受けながら、課題設定・調査研究を行い、ポスターセッション形式で発表する「基礎ゼミナール」(図1)は前者、宿泊行事と探究学習を合わせた広島・京都研修は後者である。同校が大切にしているのは、生徒に学びの本質を伝えるのと同時に、教師にも楽しんでもらうことだと、田中教頭は語る。

「教師が生き生きと探究活動に取り組む姿勢を見せることが、どのような指導にも勝ると考えています」

埼玉県立大宮高校では、進路指導主

事の畑文子先生が学年主任となった2013年度の1学年から探究学習に取り組み始めた。沖縄修学旅行を軸とした探究学習や、大学院生との協働による探究活動などを実施したが、学年単独の取り組みにとどまっていた。

そこで、16年度、管理職と進路、教科代表、若手教師から成る「高大接続検討チーム」を立ち上げ、学校全体での探究学習に着手。プログラムの策定、ベネッセの「GPS-Academic」(※1)による効果検証の導入などを

進め、17年度から実施した。1学年では、HRの時間を使って言語活動プログラムや志願書作成などを実施し、表現力向上と自己把握を促した。2学年では、「総合的な学習の時間」で自校のアドミッション・ポリシーの策定や志望理由書の作成(図2)、3学年では、同様に「総合的な学習

の時間」でルーブリックの作成と大入試問題の解答、ルーブリックに基づいた自己採点などを実施した。

生徒・教師とも取り組みへの満足度は高く、18年度も取り組みの一部が継続されている。

「教師間の共通認識を図りながら、徐々に学校全体で進められるよう体制を整えたいと考えています。そのため、学問は人が幸せに生きるために必要であるという原点に立ち返って、プログラムを深化させていきます」(畑先生)

図1 基礎ゼミナール

分野	内容
言語と文学	「文学を味わう」 「ことばを科学する」
メディアと人間	「メディア・クリエイション」
個人と社会	「経営学実践講座」 「社会科学研究方法論」
実験科学	「微生物学実験講座」 「生物を考える」 「理論科学研究」
数学とコンピュータ科学	「見て・創って・感じる数学」 「Tech! (プログラミング)」

*研究会での配布資料を基に編集部で作成。



埼玉県立大宮高校
進路指導主事
畑文子
はた・あやこ

図2 2学年での実施内容(2017年度)

内容	詳細
自分を知る	GPS-Academicの結果を振り返り、全6回のプログラムの概要を理解
高校を考える	今までの大宮高校での活動を振り返り、生徒に求められる資質・能力について議論し、大宮高校のアドミッション・ポリシーをつくる
大学を知る	大学各学部のディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーを踏まえ、アドミッション・ポリシーを推測する
志望理由書①	3年生の書いた志望理由書を基に、志望理由書の評価表(ルーブリック)を作成する
志望理由書②	自分自身の志望理由書を書く
志望理由書③	志望理由書①で作成した評価表を基に、②で作成した志望理由書を相互評価する

*研究会での配布資料を基に編集部で作成。

*1 ベネッセのアセスメントの1つで、問題発見・解決に必要な3つの思考力(批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力)を選択式、記述・論述式、質問紙で多面的に測るテスト。

「問いの立て方」から始まる探究学習指導

東京都立八王子東高校では、2018年度の1学年から探究学習をスタートした。19年度には学校全体で実施する予定だ。「自ら学ぶ・自ら考える・自ら創る」をキーワードに、協働力・実践力・想像力・思考力・発信力・創造力・人間理解力・意志決定力の8つの資質・能力を育成する(図3)。

3年間の流れは次の通りだ。1年次は、「哲学対話」「課題解決プロジェクト」などで、問いの立て方や学びの深め方を身につけ、探究のプロセスを体験的に習得。2年次には、ゼミに所属して論文を作成し、論理的思考力や表現力の向上を図ることで、卒業後の自己実現につなげる。

活動の記録は、オンラインで入力し、8つの資質・能力の伸びを客観視させる。ここでは、生徒の内省が深まっている様子が見られ、「今まで受け身でやるが多かった」と



東京都立八王子東高校
探究部主任
島津 聡
しまつ・さとし

図3 育成を目指す8つの資質・能力

基礎的な知識・技能の習得	協働力	他者と協力し、一つひとつの事象に取り組む態度を身につける
	実践力	興味・関心を持ち、自分の考えに基づき計画し、実行する力を身につける
	想像力	結果を予測し、想像する力を身につける
思考力・判断力・表現力の育成	思考力	物事をクリティカルに考え、問題意識を持つ習慣を身につける
	発信力	自分の考えを分かりやすく他者に伝える方法を身につける
	創造力	物事に対して新たな価値を生み出すことができる
生きる能力・態度の育成	人間理解力	自分自身や他者を知り、人間関係を理解する力を身につける
	意志決定力	情報を収集し、知識や他者の意見を参考にして、行動を決定することができる

*研究会での配布資料を基に編集部で作成。

探究学習を効果的に進めるための教師のマインドと校内体制とは

探究学習の成功の鍵は教師と生徒が楽しむこと

司会 探究学習を通して生徒にどのような力を身につけさせたいと、先生方はお考えでしょうか。

佐野 学校の存在意義は、一人ひとりの幸せを実現することであり、そのために生徒たちは学び、コミュニケーションをつくり、生きる力を養うのだと思います。気をつけなければならないのは、社会の要請から「教育はこうでなければいけない」という思い込みにとらわれることです。生徒も教師も自分を見つめて本当にしたいこと、なりたいたい自分は何かを突き詰めて考える必要があります。

木村 今にとらわれないことを大切にしています。今は目立たない生徒でも、将来、どのような資質・能力が開花するかは分かりません。今を前提にせずに学びを深め、生徒の未知の可能性を広げるところに、探究

の意義や重要性があると考えます。

田中 生徒も教師も「楽しむこと」が何より大事だと、私は思います。本校では「発想の自由人」という言葉を大切にし、社会が変わっても自由に自分の意見を持つ、他者と協働して発信できる人材の育成を目指しています。専門性や主体性など、様々な資質・能力のうち、日本人に最も必要なのは「情熱だと言われています。生徒の情熱を育てるために、教師自身が探究学習を楽しみ、情熱を持って取り組むことを心がけています。

畑 いろいろな学校で教える中で、生徒がしたいことを探す力を育む探究学習に大きな可能性を感じています。生徒が自ら問いを持ち、意欲的に取り組んでいける仕かけを、教師がどれだけ準備できるかが、探究学習の成功の鍵になると考えています。

島津 探究学習では、自分の「好き」を発見して、それをとことん追究していく面白さに気づかせることが重



要だと考えています。本校は、これまで受験指導における「面倒見のよさ」をアピールしてきました。今後は、教師が生徒に寄り添い、助言することで、問いやプロセスの深まりを助けていけるような「面倒見のよさ」も追究しようと考えています。

新しい学力観の中で変わる「面倒見のよさ」の定義

佐野 「面倒見のよさ」は本校でも特長の1つですが、よいことばかりではないと感じています。探究学習では、

教師が手を離す場面も必要になります。生徒が自力で行っていることを、教師の「面倒見のよさ」によって邪魔しないよう、常に気をつけています。

島津 学力の定義が変わる中で、「面倒見のよさ」の中身も再考する必要があります。従来「面倒見のよさ」と思っています。従来の「面倒見のよさ」は、「これに乗っていけば入試で成功する」というペースメーカーのようなものでした。探究学習では、問いを立てたり深めたりする力の育成に力を入れつつ、その先はつかず離れず見守り、生徒を信じて自力で前に進んでいく様子を見守れるかどうかが必要になるでしょう。

田中 本校でも探究学習を取り入れた時、先生方から「生徒に失敗させてよいのですか」といった質問を受けました。探究する中で、生徒はいろいろなところでつまずきながらも、それをしっかり受け止めて、自身の成長につなげていきます。生徒が失敗を経験しながら次のステップに進めるよう、どのように支援していくのかを考えることが大切だと思います。

木村 ただ、教師があまりに手を離し過ぎると、生徒は不安になり、教師の顔色を見ながら、教師が知っている答えを見つけて出すことに意識を

向けかねません。そこで、本校では、問いの立て方の前提として「世界の誰も知らないこと」を設け、生徒と教師が一緒に考えながら研究を進めるスタイルをつくりました。探究学習の目的は、研究成果を出すことではありません。課題を発見し、修正しながら検証していくプロセスが大切であるという原点を忘れずに、教師は生徒にかかわるべきだと思います。

心の内を言い合える環境が共通理念を醸成

司会 校内の足並みをそろえるために工夫されていることはありますか。

島津 本校では、導入準備の段階で多くの先生方から意見を出してもらいました。厳しい声もありましたが、思いを率直に言ってもらえたのはよかったと思います。新しいことを始める際に一番困るのは無関心です。不安や不満を率直にぶつけていたことで職員会議の議論も白熱し、その中で次第に共通理念が醸成されていきました。

佐野 本校のサイエンス科では、毎週必ず時間割の中に研修の時間を設けています。15〜18人の担当教師が

週1回顔を合わせて、取り組みの内容や、改善のアイデアを共有し、新しい考え方やスキルが校内で循環しやすくなるようにしています。

畑 本校では、16年度、管理職と進路、国語・数学・英語の教科代表、若手有志による「高大接続検討チーム」を立ち上げ、探究学習の導入の検討を本格化させました。メンバーに若手教師が入り、チームが活性化したことが、大きな推進力になりました。

若手のエネルギーをいかに取り込むかも、校内の足並みをそろえる上で大切なポイントになると思います。

田中 何より重要なのは、先生方が安心して自分らしく働ける環境を担保しつつ、探究学習を楽しむことだと思います。先生方は一人ひとり異なる価値観を持っていますが、その価値観と探究学習で目指す方向性ができるだけ近づけていくことが大切です。そこで、本校では、何か思いやアイデアが出てきたら、必ず互いに耳を傾ける方針を徹底しています。職員会議のようなオフイシヤルな場だけでなく、職員室での会話でも心の内を言い合える環境をつくることで、学校全体のビジョンが浸透していくのではないのでしょうか。

2018年10月号へのご意見

日常の振り返りの共有からPDCAサイクルを回す

PDCAサイクルの重要性を認識していても、なかなか実践できずにいた。10月号の特集を読み、忙しさを言い訳にせず、生徒を後押しする意識を持ちながら、日常の中で行う小さな振り返りを、教師間で共有することから始めたいと思った。 長崎県・私立海星高校 植田 隆

の専門性が発揮された刺激的な会となっている。ただ、「指導変革の軌跡」の北海道浦河高校の記事で紹介されていたように、中には調べ学習にとどまっている生徒もいるようである。学校教育目標と各学科、各教科・科目の目標を明確に定めた上で、学科・教科を横断した課題研究への支援を行いたい。

静岡県立御殿場高校 松山 陸

学校の基本を定めることの重要性を実感

本校でもランドデザインを作成し、現在、それに基づいたコモンルーブリックを作成中である。それが完成して、学校全体でPDCAサイクルの構築に取り組むことになる。10月号の特集を読み、取り組みの進みは遅いとしても、学校の基本をしっかり定めてPDCAサイクルを回していくことが重要だと感じた。

東京都立南多摩中等教育学校 徳武英人

振り返りでは生徒との対話が必要

「改良！ 指導ツール ビフォーアフター」の記事を読み、学期と学年でリフレクションを分けて作成させるのは名案だと思った。生徒が自身の深い部分にまで思いを馳せながら、少しでも前に進めるようにしてやることは、本校のように生徒の進路が多様な学校ではなかなか大変だ。ツール提供者の福岡県立福岡高校の深江一美先生が言われていたように、生徒とともに言葉を探し続けることが必要だと感じた。

北海道北広島西高校 徳橋孝之

目標を定めた上で教科横断の探究学習を実践

本校でも全校で課題研究発表を行っており、各学科

教育 ちよこトーク



テーマ
受験生に
お勧めの験担ぎ

- 気に入った鉛筆削りを使う。試験会場にも自分の努力の証しとして持っていける。 栃木県
- 一番使った教材を膝の上に置き、感謝を込めて「ありがとう」と言う。静岡県

- 合格祈願のしおりを作り、毎日使う参考書などに挟んでおいて、意欲を継続させる。 兵庫県
- とんかつとおかかおにぎり（かつおのカツ）を食べて、受験に勝つ！ 岐阜県

『VIEW21』高校版 公式アカウント

LINE@

友だち募集中！

『VIEW21』高校版や教育に関連する最新情報をタイムリーにお届けします。お友だちの登録方法は、下の2次元バーコードを読み取っていただくか、LINEアプリの「友だち追加」>「ID検索」で「@view21」とご入力いただき、追加をお願いいたします。

ぜひ、お友だち登録をお願いいたします！
アカウント名：@view21



編集後記

今号の特集で取り上げさせていただいた広島県・私立広島女学院中学高校では、卒業生の北岡美佐さんの講演を取材しました。講演後、希望者を集めた質疑応答の時間があり、「海外進学のために取り組むべきことは何ですか」「インターネットがない時代に、どうやって情報を手に入れて、自分を動機づけましたか」など、在校生の質問に柔らかな雰囲気でお答えされる中、「私の担当だった先生の英語の授業が素晴らしかった。女学院での学びはきっと今後の力になる」といった発言がありました。自身の在学時代を踏まえ、後輩の今を肯定する励ましは、きっと何年か後、他者を励ます卒業生に通ずるのだと感じました。(野村)



VIEW21 高校版 2019 2月号

次号は 2月15日発行 (予定)

『VIEW21』高校版は年6回の発行です

教師を育てた 言葉たち

No. 011

東京都・私立 共栄学園中学高校 杉山晴彦先生

すぎやま・はるひこ

◎教職歴 30 年。同校に赴任して 31 年目。
進路指導部長。

東京都・私立共栄学園中学高校 全日制/
普通科/共学/1学年約320人/2018年
度入試合格実績(現浪計):国公立大は、千
葉大、埼玉大などに6人が合格。私立大は、
上智大、津田塾大、東京理科大、明治大、
早稲田大などに延べ 438 人が合格。



教 師になって 10 年目に参加した研修で、講師から「**阻害要因は内に求めよ**」という言葉聞いた時は、まさに目からうろこが落ちる思いでした。

当時の私は、教師としての自信を持ち始めた時期でした。ただ同時に、物事が思うように進まない時、その要因を自分以外の他者に求めることが増えていたように思います。成績が低迷する生徒に対しては「これだけ授業やプリントを工夫しているのに……」と生徒の側に要因があると考え、校内会議で私の提案に首を縦に振らない先輩や同僚に対しては「頭が固い！」と反発する。自分は正しいという思いが強くなるほど、苦しくなっていく状況でした。

ある先輩からは「杉山先生の言っていることは確かに正しい。でも、正しいと分かっている、人は動くとは限らないんだよ」と諭されたこともありました。実際、理路整然と説明したつもりなのに、「うーん」と唸るだけで沈黙してしまう相手を前に、「理屈では動かないのであれば、一体どうすればよいのだろうか」と途方に暮れる経験もありました。だからこそ、「相手を変えようとするのではなく、自分の考え方や行動、表現の仕方などに原因を求めて自分自身を変えることで、結果的に物事が進む」という講師の教えを、私は素直に受け入れ、すぐに実践してみることができたのです。

宿 題をしてこなかった生徒には、叱るという行為以外に自分に何ができるのかを考えました。そもそも生徒は、宿題をしてこなかったことに自責

の念を抱いています。しかし、私が強く叱ることで、宿題をしてこなかったこと以上に、叱られたことに意識が向いてしまい、自分を変えようという思いが深まらないのではないか……私は生徒を頭ごなしに叱るのではなく、まずは「どうしたの？」と理由を尋ねるようになりました。自分を見つめる時間が与えられたことで、生徒たちは自分の中にある阻害要因に向き合い、ゆっくりとですが、変化していきました。

会議で提案が通らない時は、相手を非難するのではなく、内容の再検討へと気持ちを切り替え、企画書をいつ、誰に、どんなタイミングで出すのかも見直しました。反対意見を「自分の考えをさらに磨いていくための材料」と前向きに捉えることで、次第に校内の議論が楽しくなっていました。

また最近、私は思わぬ阻害要因を発見しました。ここ数年、生徒同士の対話を重視した授業を行うようになって、生徒自身が対話の中で自分の理解を妨げていた阻害要因に気づく場面を多く目にするようになりました。もしかしたら、私たちが教えすぎることが、生徒の理解にとっての最大の阻害要因だったのかもしれない。

人 を変えることは確かに難しいけれど、「どうせ変わらない」と変化を諦めることは私たち教師にはできません。私が、自分が変わることを選んだのは、他者の変化を諦めないためでもあります。そして、一人ひとりの教師が少しずつ変わることによって、学校という組織もまた変わっていくのだと思います。

VIEW21の
バックナンバーを読みたい

VIEW21を
より多くの先生で読みたい

そんなときは!

VIEW21をBenesse High School Onlineでもご覧いただけます。

Benesse High School Online

高校の先生の課題解決をサポートする情報サイト

過去の冊子がお手元がない場合や、より多くの先生で共有されたい場合に、ぜひBenesse High School Onlineをご利用ください。 ※Benesse High School Onlineのご利用は無料です。

アクセス方法

- 1 各種検索エンジンで「ハイスクールオンライン」と入力して検索
ハイスクールオンライン 🔍 検索
(ご利用には、学校ID/ログインコードもしくは先生個人ID/パスワードが必要です。)
- 2 ハイスクールオンラインにログイン後、トップページの「知りたい」>「指導」>「VIEW21」をクリック



『VIEW21』公式アカウント LINE@ スタート!

最新情報や時期ごとにオススメのコンテンツをLINEで配信! 右の2次元コードを読み取っていただくか、「友だち追加」にて「@view21」でID検索して、『VIEW21』公式アカウントのLINE@を友だちに追加してください。

@view21

でID検索! 🔍



ハイスクールオンラインに関するお問合せ

WEBサポートデスク 通話料無料

0120-350124

受付時間/月~金 8:00~19:00 土 8:00~17:00 (祝日、年末・年始を除く)

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume 5 2018年12月号

2018年12月14日発行/通巻第373号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所

VIEW21編集部 〒163-0415 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング

©Benesse Corporation 2018

お客様
サービスセンター

【フリーダイヤル】 **0120-350455**

受付時間 月~金 8:00~19:00 / 土 8:00~17:00 (祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17